

かねこしろう

# 香峯子抄

夫・池田大作と歩んだひとすじの道



主婦の友社 編著





平成16年8月、長野にて（撮影・池田博正）



## まえがき

私は、誠実な正しき道を真つすぐに生き抜いてきた母が大好きです。

人間としての尊い使命に徹した、平凡であつて偉大な母だと思います。

私たち兄弟には、ただの一遍も、厳しく叱られた記憶はありません。

どんなときでも、笑顔を忘れない。

どんな苦難にも、決して負けない。

ありとあらゆる嵐があつても、微動だにせず、正しく強く歩み通してきました。

その母の微笑みは、どれほど深い信念を秘めていることか。

そして、どれほど大きな希望の力を持っていることか。

海外の友人の方々からも、「お母さまの素晴らしい笑顔に励まされました」と、

よく言われます。

実は、十数年前より、日本を代表する女性誌のパイオニア「主婦の友社」から、



その母の「微笑み」をテーマにした本の出版をという、ご厚情あふるるお話をいただいておりました。

そのつど母は恐縮しながらも、固くお断りしてきました。自分に光が当たること<sup>のぞ</sup>を望まない母にしてみれば、それは当然のことだったのです。

「主婦の友」との縁は、まことに深く、昭和三十二年の夏には、父と母の師匠である戸田城聖先生ご夫妻を紹介する記事が掲載されました。

父も、昭和三十八年の秋、創価学会第三代会長に就任した三年後に最初の取材を受け、以来、新春の寄稿や作家の有吉佐和子さんとの対談、母と一緒のインタビューなど、「主婦の友」を通して、女性へのメッセージを贈ってきました。

ロングセラーとなった『婦人抄』や、アメリカの女性未来学者ヘンダーソン博士との対談集『地球対談 輝く女性の世紀へ』も、発刊されております。

こうした長年の清々しいおつきあいもあり、村松邦彦社長や出版部の林幸子さんたちへのご恩返しになればと、母は今回の出版をお受けすることにいたしました。



「幼おきないころの思い出」「友情ゆうじょうそして師弟してい」

「青春けっこんと結婚おつと」「夫おつとをいかに支さえるか」

「子育こそだてと家庭かていづくりの知恵ちえ」

「人生しれんの試練のを乗り越こえる勇気ゆうき」

「女性じよせいの社会しゃかい貢献こうけん」「世界せかいとの対話たいわ」

「平和へいわと幸福こうふくと健康けんこうの哲学てつがく」等々……。

熟練じゅくれんの名めいインタビュいーは、私たち家族かぞくも知らなかった秘話ひわまで引き出しながら、母もの持つ「微笑ほほえみ力りよく」を心温こころあたかく、そして見事みごとに浮うき彫ぼりにしてくださいました。

『香峯かね子抄こしょう』とのタイトルも、編集部へんしゅうぶで考えてくださったものです。

この「香峯かね子」という漢字かんじの名前は、戸田先生とだせんせいからいただいたものですが、ちょうど平成十六年の秋から、「峯」の文字が人名用漢字じんめいように加くえられたことにも、不思議ふしな時ときのリズムを感じかんしました。

若わかき日の母が戸田先生から贈おくられた御書ごしよには、一首いっしゆの和歌わかが記しるされています。



月光のげっこう

やさしき姿にすがた

妙法のみょうほう

強き心つよこころを

ふくみ持てかしも

この歌のとおりの人生を、母はさわやかに生き抜ぬいてきました。これからも変かわることはないでしょう。

その月光のごとく、やさしくも強き心の光彩こうさいを、この一書から感じとり、「女性せいせいの世紀」を微笑み生きゆく糧かてとしていただければ、私たち家族かぞくにとって、これほどの喜びよろこはありません。

平成十六年 秋

長男ちやうなん 博正ひろまさ



『香峯子抄』もくじ 目次

まえがき ..... 池田博正 4

第1章 むすめじだい 娘時代 ..... 11

「運命うんめいの出会い」を待つ少女 ..... 12

インタビュー ..... 14

第2章 れんあい けっこん 恋愛と結婚 ..... 51

ぜんりよくしつそく おつと 全力疾走の夫とともに初心しよしんを貫くつらぬ ..... 52

インタビュー ..... 56

### 第3章

楽しきわが家<sup>たの</sup>.....95

家族を幸せにするヒント<sup>かぞく しあわ</sup>.....96

インタビュー.....98

### 第4章

幾山河<sup>いくさんが</sup>.....143

夫の「開拓」の日々を支える妻の役割<sup>かいたく つま やくわり</sup>.....144

インタビュー.....148

### 第5章

微笑み賞<sup>ほほえ しょう</sup>.....175

妻の一途さがつくり出す家族の絆<sup>いちず かぞく きずな</sup>.....176

インタビュー.....180

エピローグ.....201



第1章  
娘時代



## 「運命うんめいの出会い」を待つ少女ま

「運命の出会い」という言葉ことばがあります。

あなたも一度や二度は、そう思える「出会い」を経験けいけんしているのではないでしょう  
か。相手あいては、恋人こいびとだったり、夫おつとだったり、  
先生だったり、友人だったりとさまざまで  
しょう。では、その「運命の出会い」は、  
あなたを幸せしあわにしてくれたでしょうか。

そして、ここにも、そんな「運命の出会い

い」を待つひとりの少女がいました。その  
少女の名前は、白木しらきかね。のちの創価そうかが学会  
第三代会長・池田いけだ大作氏の夫人ふじん、池田  
香峯子かねこさんです。「運命の出会い」の相手  
は、もちろん、夫・池田氏です。

池田氏との出会いを「一生いっしょう涯の幸せ」と  
いう夫人の言葉に触発しよくはつされるようにスター  
トしたインタビューからわかってきたこと  
は、控えめな夫人の意外いがいなパワーでした。  
そのパワーは「幸せを引き寄ひせる力ちから」とい  
ってもいいでしょう。

夫人のパワーを支えるものは、愛情あいじょうとい



つてもよく、努力<sup>どりよく</sup>といつてもよく、知恵<sup>ちえ</sup>といつてもよく、人柄<sup>ひとがら</sup>といつてもよいでしょう。それを感<sup>かん</sup>じとるヒントはあなた自身<sup>じしん</sup>の心の中にあります。

大切なことは、平凡<sup>へいほん</sup>な日常<sup>にちじよう</sup>の中に何気<sup>なにげ</sup>なく存在<sup>そんざい</sup>していることが多いものです。自分だけでなく、周り<sup>まわ</sup>の人たちも幸せにする夫人<sup>ものしず</sup>の物静<sup>えがお</sup>かな笑顔<sup>びしょう</sup>の中に、あなたが知りたい「幸せを呼<sup>よ</sup>ぶヒント」があるのかもしれない。

夫人<sup>たんじよう</sup>が誕生<sup>しょうわ</sup>したのは、昭和七（1932）年二月二十七日。父の名は、白木薰次<sup>しらきしげじ</sup>。母の名は、静子<sup>しずこ</sup>。姉（よし）と兄（文郎<sup>ふみお</sup>）、

そして弟（周次<sup>しゅうじ</sup>）の四人きょうだいの三番目でした。生家<sup>せい家</sup>は、東京都大田区<sup>とうきょうとおおたく</sup>の矢口渡<sup>やぐちのわた</sup>です。

いま、夫人の半生<sup>はんせい</sup>をたどることは、昭和という時代<sup>じだい</sup>の家庭<sup>かてい</sup>の姿<sup>すがた</sup>を、まざまざとよみがえらせてくれることにもなるでしょう。

では、夫人へのインタビュを中心<sup>しん</sup>に、夫・池田氏<sup>いけだ</sup>をはじめ、周囲<sup>しゅうい</sup>の方々<sup>かたがた</sup>の証言<sup>しょうげん</sup>などをとに、夫人の「幸福力<sup>こうふりよく</sup>」の秘密<sup>ひみつ</sup>に迫<sup>せま</sup>っていきましょう。

——ご実家は、どんなご家庭だったのでしょうか。また、ご両親から教えられたことで、いまでも心に残っていることは、どんなことでしょう。

実家は一言でいうと、とても円満な家庭だったのではないでしょうか。両親の夫婦仲は、子どもから見ても、とってもよかったのです。(笑)

主人がよく申します。

「円満なる家庭は、子どもにとっても、夫婦自身にとっても、何よりもかけがえのないものだよ」と。当然のことかもしれませ

んけれど……。

父は、まったく普通のごく平凡な人でした。

生真面目で、家族思いでしたから、家中に波風が立つということは、ほとんどございませんでした。

私が小さいころは、父が帰宅しますと、門のところにある呼び鈴がチリンチリンと鳴ります。

「あ、お父さんが帰ってきた」と、家族みんな、玄関に並んで、「お帰りなさい」と、それこそ三つ指ついて迎える、というような家でした。



その習慣しゅうかんのせい、私は、結婚けっこんしてからも主人が帰宅しますと、やはり同じようにして出迎でむかえていました。

おおく 大田区こばやしちょうの小林町げんざい（現在の東矢口三丁目）に住すんでいたころは、子どもたちがまだ小さくて、そんな躰しつぱまでは、なかなかできませんでした。

しょうわ 昭和四十一（1966）年に、新宿区しんじゅくの信濃町しなのまちに越こしてきたときには、長男ちやうなんの博正ひろまさが中学一年生、二男じなんの城久しろひさが小学六年生、三男さんなんの尊弘たかひろは小学二年生になっていました。

主人が帰ってきて、まだ子どもたちが起お

きているときには、小さな狭い家せまですが、各部屋かくへやにつけてあるインターホンで、「パパがお帰りよ」と声をかけます。

みんなで「お帰りなさい」と出迎えてから、子どもたちはそれぞれの部屋へ戻もどっていくようになります。

しぜん 自然にやっていたことですが、それは、私が小さいときの白木家しらきけの躰しつぱだったのです。

たいへん 父は大変に律義りちぎな人でしたから、躰しつぱには厳しいところがありました。しかし、強制きやうせいするとう感じかんはありませんでした。そうされた覚えおぼはないのです。

ただ挨拶あいさつの仕方しかたについては、やかましい家庭かていだったことは確かたしです。子どもたちが帰宅きたくすると、両親りょうしんに「ただいま戻もどりました」と挨拶あいさつをしていました。

挨拶の仕方は、家庭で教えることのできる、大切な躰しつけの一つだと思います。きちんとした挨拶ができないと、人との意思いしの疎そ通つうも上手じょうずにできなくなりますからね。

四季折々の時候じこうに寄よせて、挨拶あいさつから始はじまるのは、日本にほん独特どくとくのかたちかもしれませぬ。そこに通かよう心づかい、これは美うつくしいものだと思います。

どんなに時代じだいが変かわっても、私たち日本人うしなが失うしなつてはいけないうれしさだと思います。

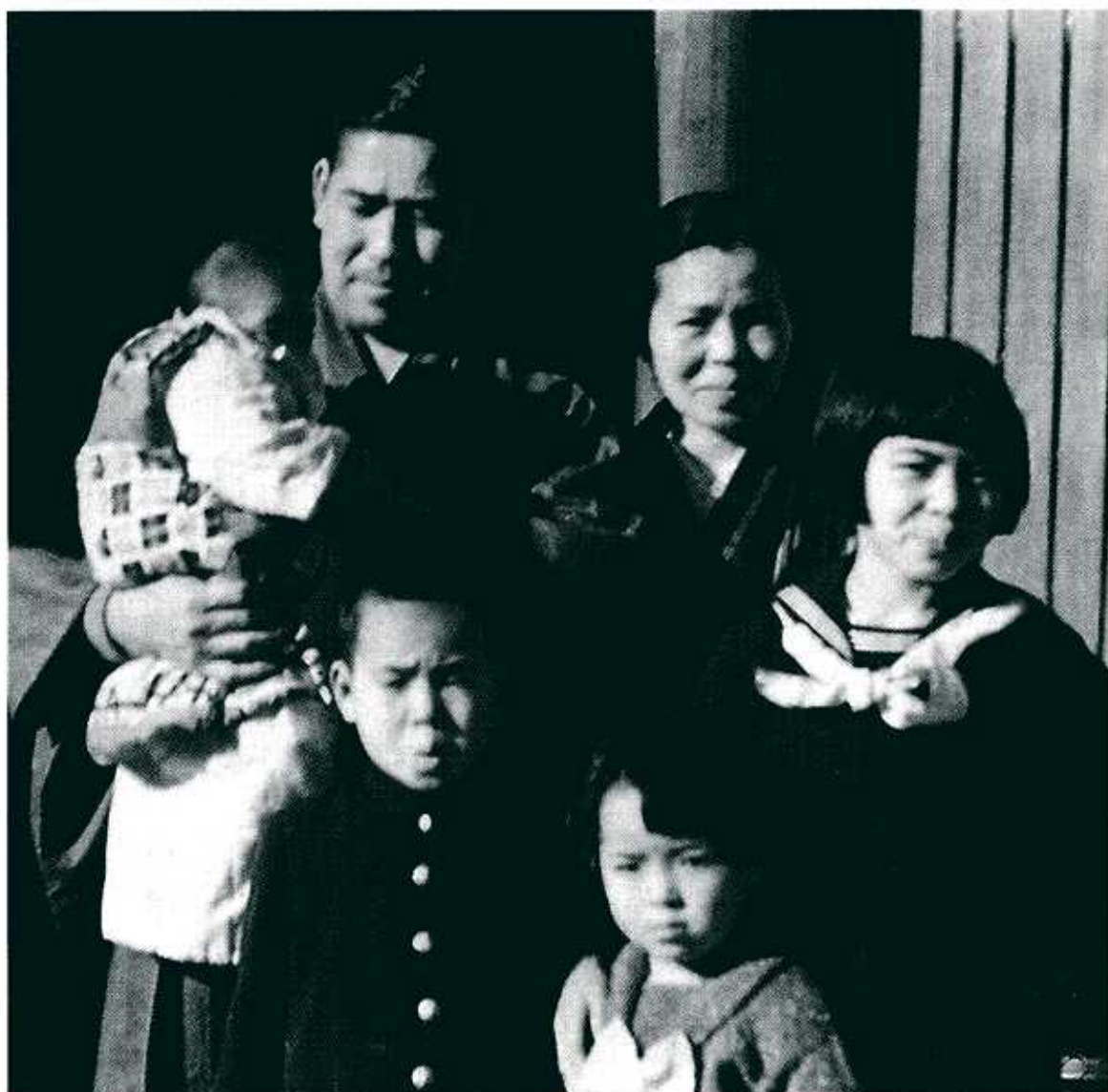
母は勉強家べんきょうかでした。何事なにごとも自ら進すすんで行おこなうほうでした。そして新しいものが好きすき。

“ハイカラさん”というのでしょうか。(笑)

母の実家じつかは、昔むかし、岐阜ぎふで村長むらちやうをしておりました。当時めづらでは珍めづしく、母は女学校おんながっこうを出でています。そんな関係かんけいもあつたのでしょうか、婦人ふじん之友社のともしやの羽仁はにもと子こさんが創つくられた、あの自由学園じゆうがくえんの気風きふうが好きで、ご近所きんじよの方たちとサークル活動かつどうをしたり、婦人ふじん之友社のともしやへ通かつたりしていました。

大正デモクラシーと、武者小路実篤むしやのこうじさねあつさんや有島武郎ありしまたけおさんたちの人道主義じんどうしゆぎに、だいぶ心酔しんすいしていたみたいです。





東京・矢口渡の自宅にて家族と。いちばん前が香峯子夫人（5歳ぐらい）、右側が姉・よしさん、左側が兄・文郎さん、父・薫次さんに抱かれた弟・周次さん、母・静子さん

母は、病氣びようきで具合ぐあいが悪わるくても、ちよつと元氣になると、もう忙いそがしく動うごき回まわつていました。そういうことは、私もよく覺おほえています。

しかし母の體質たいしつは、決して強けついほうではありませんでした。むしろ弱よわかった。そういうこともあつて、姉も私も、よく家事かじの手伝てつだいをしていました。

母は、物ものを大變たいへんに大事だいじにする人でした。台所だいじょうの食たべ物ものを無駄むだにしないということなどは、徹底てつていしていました。自然しぜんのうちに、私どもも教えられたのではないかと思ひます。これも、白木家しらぎけの教育きよういくだったのですね。

そうした昔氣質むかしがたぎを含ふくみながら、合理ごうりてき的な

ことは進すすんで重おもんじる、といった母でした。

父は、一面いちめん、豪放磊落ごうほうらいらくで、こむずかしいことを言うのは嫌きらいでした。ですから母のような女性じよせいを望のぞんでいたものでしょうね。

(笑)

私は、四人きようだいの三番目でした。いちばん上が姉で、三歳さんさい違ちがいの兄、そして弟です。

白木家では代々だいだい、女性じよせいには「さい」「らく」「いし」など、かな二文字ふたもじの名前がつけられておりました。

長女ちやうじよの名は「よし」で、私は「かね」で



す。祖父そふがつけてくれました。

結婚けっこんしたおり、人生じんせいの師しである戸田城聖とだじょうせい

先生せんせいから、現代げんだい的に漢字かんじで「香峯子かねこ」と

命名めいめいしていただき、それ以降いこう、ずっと使つかわ

せていただいております。両親りょうしんも、最初さいしよか

らそうしておけばよかったと、喜よろこんでおり

ました。

戸籍上こせきじょうの改名かいめいの手続てつづきはしております

ので、本名ほんみょうは「かね」のままです。

私たちが育そだったのは戦中戦後せんちゅうせんごでしたか

ら、両親りょうしんの苦勞くろうは大変だっただと思います。

父は砂糖会社さとうがいしやに勤つとめておりましたが、戦争せんそう

で事業じぎょうができなくなり、疎開そかいをしなければ

ならなくなりました。

疎開先そかいは、両親りょうしんの故郷こきょうである岐阜ぎふの、か

なり山奥やまおくでした。あの時代じだいに、育ざかち盛りの

子ども四人かかを抱かかえての疎開そかいです。いちばん

両親りょうしんが大変な思かんいをしていると感じたの

は、やはり、その間のことでした。

もちろん戦争わさわの災わざいということでは、日

本国中こくちゅう、どこでも、どなたの家庭かていでも、み

な同じでした。

戦争せんそうほど、みなが不幸ふこうになるものはあり

ません。それこそ、二度にどと絶対ぜったいに起おこして

はいけない惨禍さんかです。

そんな思かんいを抱かかえながら、懸命けんめいに生いき抜ぬ

いた昔むかしの人たちは、本ほん当に偉えらかったと思かんい

ます。

自分が親の一人になってみて、平和なときでさえ、子どもを育てるのは大変なことなのに、と感じます。

そのことで主人と語り合うときがありません。どんな苦労があっても、子どもを育てるうえでの苦労は宝、かけがえのない宝ですね。



創価学会との出会いは、どんなこと

がきつかけになったのでしょうか。入会してから家族の暮らしに何か変化があったのでしょうか。

創価学会への入会は、まず母が決断したことでした。

母は、私を産んだあと、産後の肥立ちが悪く、静脈炎にかかってしまったのです。静脈の中に血栓ができる病気で、安静にしておりませんと、その血栓が肺に行きやすいのです。そうなった場合は、それで駄目になってしまうという体だったようです。いまなら昔と違って、お薬があるからいいでしょうが、当時、お薬を手に入れることは、むずかしい時代でした。ですから、いつも足がすぐくはれておりました。そのようなわけで、私から母にべたべた甘えていくことはなかったと思います。私



の下には弟もいますし、我慢がまんするといいま  
すか、忍耐にんたいづよ強くなったのは、そんな事情じじょうが  
あったからかもしれません。（笑）

それで、隣となりの家の方が、母の体を心配しんぱいし  
て、入会を勧めすすめてくださったのです。

母は入会するまで、一年間くらいは逡巡しゅんじゆん  
していたみたいです。父もやはり、その間  
は反対はんたいしていましたが、母が決意けついした以  
上、父も決意するのは、もう当然とうぜんといった  
ふうでした。（笑）

入会いっしよは、家族みんなが一緒いっしょでした。昭和しやうわ  
十六（1941）年の七月十二日のことで  
す。私が矢口やぐち小学校の四年生しよねいのときでし  
た。

私の出産しゅっさんが契機けいきになって入会したので、  
「あの子はやっぱり仏法ぶつぽうと縁えんが深ふかかったの  
だ」と、生前せいぜん、母は姉と話していたようで  
す。

五年生しよねいのときには、辻武寿先生つじたけひさせんせいが学級担  
任にんでした。戸田城聖とだじやうせい第二代会長だいにかいちやうの門下生もんかせいで  
いらして、現在げんざい、最高指導さいこうしどう会議員かいぎいんの辻先生  
です。ですから、やはり私は、仏法に縁が  
あったのかもしれない。

当時たうじ、わが家やでの座談会ざだんかいに、初代会長しよだいかいちやうの  
牧口常三郎先生まきぐちつねさぶろうせんせいが見えたことがあります。  
母に連れられて、矢口渡やぐちのわしの駅えきまで出迎でむかえ

に行きますと、牧口先生は「よく来た、よく来た」と頭をなでてくださいました。周りは家も少なく、駅前えきまえに何軒かお店があるだけで、近くたまたまの多摩川の土手を見通せるほどだったと思います。

牧口先生は、随分ずいぶん、ご年配ねんぱいの方だなという印象いんしょうがあつたのですが、座談会ざだんかいでは背筋せすじをピンと伸ばされ、朗々ろうろうと話されて、本当に威厳いげんがありました。

戦争中せんそうちゅうですから、あるときは特高警察とっこうけいさつが廊下ろうかで監視かんししていることもありました。牧口先生の話はなしを遮りさへき、何度も「そこまで！ 中止！」と怒鳴り声どなこゑが飛ぶ

のです。子ども心こころにも心配しんぱいでしたが、母は「牧口先生は正しくて、毅然きぜんとしておられるから、何も怖こわくない」と語っておりまし

た。  
家庭かていには恵まれめぐていたと、両親りやうしんに感謝かんしゃをしております。父は平凡へいほんな親でしたが、なんでも包容ほうようしていくほうでしたし、母は、むしろ嫌きらわれることもハッキリ言う親でした。入会しんかいしてからは、信心しんじんのことに関かんしてはすごく厳きびしかったのですが、それぞれの役割やくわりはきちんと果たはしてくれたと、ありがたく思っております。

父は八十五歳まで、かくしゃくと生き抜ぬ





4歳のころ、兄と自宅にて

きました。

母も病氣をすつかり克服して、日本全国を元気に駆け回るようになりました。九十歳で亡くなるまで、はつらつと皆さんを励まし続けていました。



——子どものころ、きょうだい四人は、仲がよかったですか。(笑)

私は四人きょうだいの三番目でしたので、白木の家の中では、あまり重要視されない立場でした。(笑)

長男・長女は、すごく大事にされました。そういうところは、封建的な、昔ながらの田舎育ちの両親でした。

でも、それがかえって幸いして、いまでは助かったと思っております。

と申しますのは、主人と結婚し、主人が学会でこういう立場になりましたから、親戚づきあいと思うようにできません。

主人も五男坊でしたので、自由でやりやすい面がありました。私も白木のほうの親戚には、ご無沙汰ばかりしてしまいました。が、それでこられたのは助かりました。

もちろん無視ということではございません。(笑) しかし、何かしなくてはいいけな



くても、どうしても学会のことが優先ゆうせんされるのは、しかたのないことでした。

兄は負けん気が強く、姉も気が強いほうでしたから、きょうだいゲンカもあつたようです。（笑）

私は、その姉を尊敬そんけいしていた感じかんじです。勉強べんきょうもできましたし、いろいろな面めんで言うことも言いますし、姉には一日いちもくお置いていました。

兄とは三つしか違ちがわないものですから、あまり相手あいてにはならなかった。（笑）ですから、ケンカはしたことはありません。



——記録きろくを拜見はいけんしますと、二年生のときは三学期に、三年生のときは二学期の級長きやうで、四年生では副級長ふくきやう。五年生、六年生は一学期の級長となつています。その後、高等女学校に進すすまれたのですね。

姉も私も、高等女学校は調布学園ちやうふがくえん（現在の田園調布学園）にお世話せわになりました。

私立の女学校です。そのモットーは「精進しん」でした。

お掃除そうじというものに、すぐく重おもきがおかれていて、各教室かくきやうしつはもろんのこと、講堂こうどうとかトイレのお掃除など、そういうことを

徹底てっていさせる学校でした。

最初さいしよ、父がその学校を見に行き、一見し

て気に入ったのです。

創立者そうりつしゃの西村庄平先生にしむらしょうへいせんせいの銅像どうぞうがありまし

て、それが堂々どうどうとモツプを持もっておられ、

バケツもちゃんとおいてある。(笑) その

校風こうふうが、父のかねての持論じろんとぴたり一致いっちし

たのでしよう。まず姉が入り、私も当然とうぜんそ

こに、ということになりました。

そうしたことに限かぎれば、父は頑固がんこ一徹いつてつな

ところがありました。

調布学園ちようふがくえんは私立でしたが、公立でもいい

女学校はあったのです。実家じっかの近くにもあ

りました。

そこへ入った友人もたくさんいますが、わが家やには調布学園以外いがいを受験じゅけんするという意識いしきはありませんでした。普通ふつうでしたら、友人と一緒いっしょに公立を受けなさい、と言われたと思うのですが。

主人しゅじんの父も、正しいと思うことは頑固なまでにやり通した方かたで、「強情ごうじやうさま」とあだ名されていたといひます。戦争嫌せんそうきらいというところなど、白木しらきの父と相通あいつうじる点が多かったようです。それは、結婚けっこんしてから、よく感かんじました。



——少女時代のお写真を、ぜひ見せていただきたいのですが……。

子どものころの写真は、あまり残っていないのです。空襲で焼けたからです。

昭和二十（1945）年の四月十二日に、岐阜に、母と兄、弟、私の四人で疎開しました。

弟だけ学童疎開という方法もありましたが、それではかわいそうだからと、家族で、父母の実家のある岐阜に疎開することにしたのです。

その列車の中で、アメリカのルーズベル

ト大統領が亡くなったという話が舞い込んできました。「それならば戦争はもう終わる。じゃあ、家に帰ろうか」と皆で言ったほどでした。

（ルーズベルト大統領は、昭和二十（1945）年四月十二日、静養先のジョージア州で急死）

ところが、とんでもなかったのです。疎開して二日後の四月十五日、東京の自宅方面が空襲にありました。あの東京大空襲です。

（この年の三月に続き、四月十三日から十五日にかけて、東京へ二度目の大空襲があった。大森や蒲田方面への空襲は十五日であった）



当初は、東京に残った父と姉が後片付けをして、まとめた荷物を送り出し、あとから岐阜に出てくる予定だったのですが、その前に焼けたのです。二人は、取るものも取りあえず逃げました。

このとき、お酒が好きだった父は、掘ってあった穴にお酒をしまい、その上に畳を何枚か、かぶせておいたそうです。焼け野原に、それだけが無事、残ったのです。

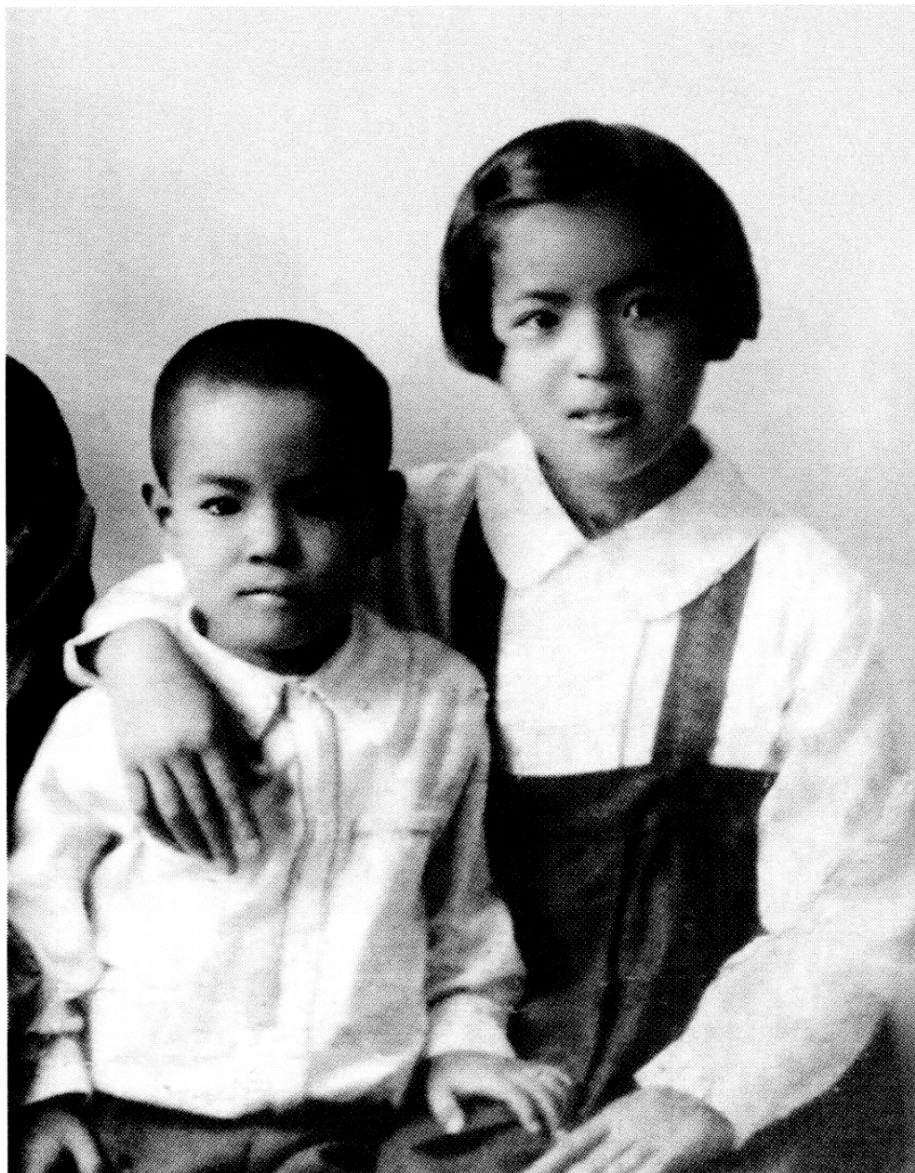
(笑) この地域では、創価学会員のお宅二軒だけが守られて焼けず、あとは壊滅。父は、そのお酒を持ってお祝いに行つたと、笑い話として語っておりました。

私たちが岐阜に着いたとき、東京がそんなに焼けたとは知る由もありませんでした。電話もテレビもない時代でしたから……。

私は、それまで私立の女学校に通っていましたが、県立には移れないということでした。市内の学校に行くことになりました。その関係で、兄と私が市内の美園町の母方の叔母の家に、母と弟は市外の福富の母の実家に、お世話になりました。

長良川をはさんで、二組に分かれての疎開生活が始まったのです。

あとから、父のはがきが届いて、東京が



10歳のころ、弟と

焼けたことを知りました。

ところが、昭和二十（1945）年の七月、岐阜も大空襲にありました。終戦の一月前のことです。

（岐阜大空襲。昭和二十（1945）年七月九日の夜、B29の編隊が岐阜市を襲撃し、中心部の約七割が焼失した）

兄は中学生でしたが、男手だからと、叔父とともに、町の消防団へ駆り出されていきましたので、残された叔母と子ども二人と私とで必死に逃げました。

焼夷弾が降ってくるのを後ろに見ながら、よくこれだけ正確に市街地にだけ落と

せるものだ后感心したものです。

真っ黒に焼け焦げてしまった、見分けもつかない痛ましい犠牲者の方々を横目に、大きな長良橋を渡って、市外へ、ぞろぞろ、ぞろぞろ、大勢で避難しました。

ちようどそこに、葉っぱはついていない枝だけの桑畑があつて、その中に身を寄せ合っていると、枝の一部になったようで、安心するのです。そこで一夜を明かしました。

「こういうのを『桑原、桑原』（落雷などを避けるまじない）っていうのね」と私が言うと、「こんな大変なときに」と、みんな笑ったのですよ。（笑）



朝になり、市内のほうへ戻ろうとしました  
たが、一面、焼け野原でした。

焼け出された私たちは、かろうじて残っていた、叔母の知り合いの家にとどり着きました。親戚だっと思います。

叔父と兄を捜し出さなくてはと心配して  
いたところ、どういうわけだか、そこに、  
自然と家族が無事、集まってきました。ま  
あ、そこしかなかったのですけれども。

不思議なもので、私たちを案じた父も駆けつけてくれ、再会できました。



——弟さんが奥様を評して、「おふくろが姉のことを『何を言われても絶対に怒らない』とよく言っていました。疎開先でも、疎開っ子はいじめられたものです。が、姉に限ってはそれがなかった。不思議です」と言っています。

そんなこと、ありませんよ。(笑)  
いじめられたこともあります。つらいこともありました。

怒るべきところでは怒りますし、悔しいこともございます。(笑)



——少女時代の読書で、印象深い本は何  
 でしょうか。

よしやのおこ  
 吉屋信子さんの小説でしようか。『あの  
 道この道』という作品が忘れられません。

同じ日に生まれてきた二人の少女が、一人  
 は裕福な家庭で、もう一人は貧乏な家庭  
 で、入れ替わって成長していきます。

その結末というのが、『王子と乞食』の  
 趣にも通じるところのある物語でした。  
 いまでも心に残っております。

そして、山本有三さんの『路傍の石』で  
 す。涙しながら読みました。

外国文学では、『嵐が丘』とか『風と共  
 に去りぬ』でしようか。



——終戦後は、すぐに東京に戻られたの  
 でしようか。

昭和二十（1945）年の八月十五日、  
 終戦は、この疎開先で迎えました。

父の砂糖会社は海外との取り引きで成り  
 立っていました。日本は敗戦したばかりで  
 すから、仕事はまだまだできません。父と  
 すれば、このまま岐阜に住みつこうかとい

う気持ちきもちもあつたようです。

女学校の二年生になつていた私には、すぐにも、生まれ育そだつた東京へ帰りたいという強い思いがありました。そのときだけだつたと思うのですが、どうしてか私、強ごう情じやうを張はつたみたいです。

終戦になつたのが、一学期いちがっきの終わりです。二学期が終わるまで、岐阜で過すごし、まず兄と私の二人で、横浜よこはまの菊名きくなに住んでいた父方の伯母おばのところところに下宿げしゆくしました。そこから、田園調布でんえんちやうふの学園がくえんに通うためです。家族かぞくが元もとのところところにバラックを建たてるまでの間、お世話せわになりました。

そのころ、伯父おじはすでに亡なくなつてお

り、二人の息子むすこも戦地せんちからまだ帰つてきていませんでした。ですから、伯母さん一人だつたこともあり、「おいで、おいで」と親切しんせつに言つてくれたのです。私も、伯母の手助てだすけをしようと思ひまして、一生懸命いっしやうけんめい、台所だいどころを手伝てつだつたり、お掃除そうじをしたりしていました。父の姉で、かなりの年配ねんばいでしたから、「おばさん」というより「おばあさん」と呼よんで慕したつていました。

ある朝、雨戸あまどを開あけますと、隣となりのお宅たくの方かたと顔が合あいました。挨拶あいさつを交かわしますと、「ほんとうに人間らしい顔を久ひさしぶりに見みました」と言いわれるんです。(笑)

まだ子ども同然どうぜんの年ですから、「それは、



どういう意味ですか」と笑ったものです。

その言葉は忘れられませんね。(笑)

いま思うと、すでに創価学会に入会して

おり、お題目を唱えていました。戦後まも

ない殺伐とした世の中で、信仰している少

女の顔は、なにか平和で穏やかに見えたん

でしうか。(笑)

菊名から矢口渡に戻り、少しでも家計を

助けようと思い、学校に通いながら、土曜

日、日曜日には、電車に乗って、品川のパ

ン工場にアルバイトに行きました。父が砂

糖の会社でしたから、その関係だったかも

しれません。

当時は、食パンしか作っていなくて、学

校給食も全部、食パンでした。そのうちコ

ツペパンも作るようになりましたが。

パンの作り方など、それまで知らなかつ

たのですが、そこで初めて教わりました。

小麦粉の残った生地で、その職人さん

が、渦巻きパンとか、カニの形をしたパン

など、「昔とった杵柄」というのでしう

か、職人技を見せてくれて、「わあ、素晴

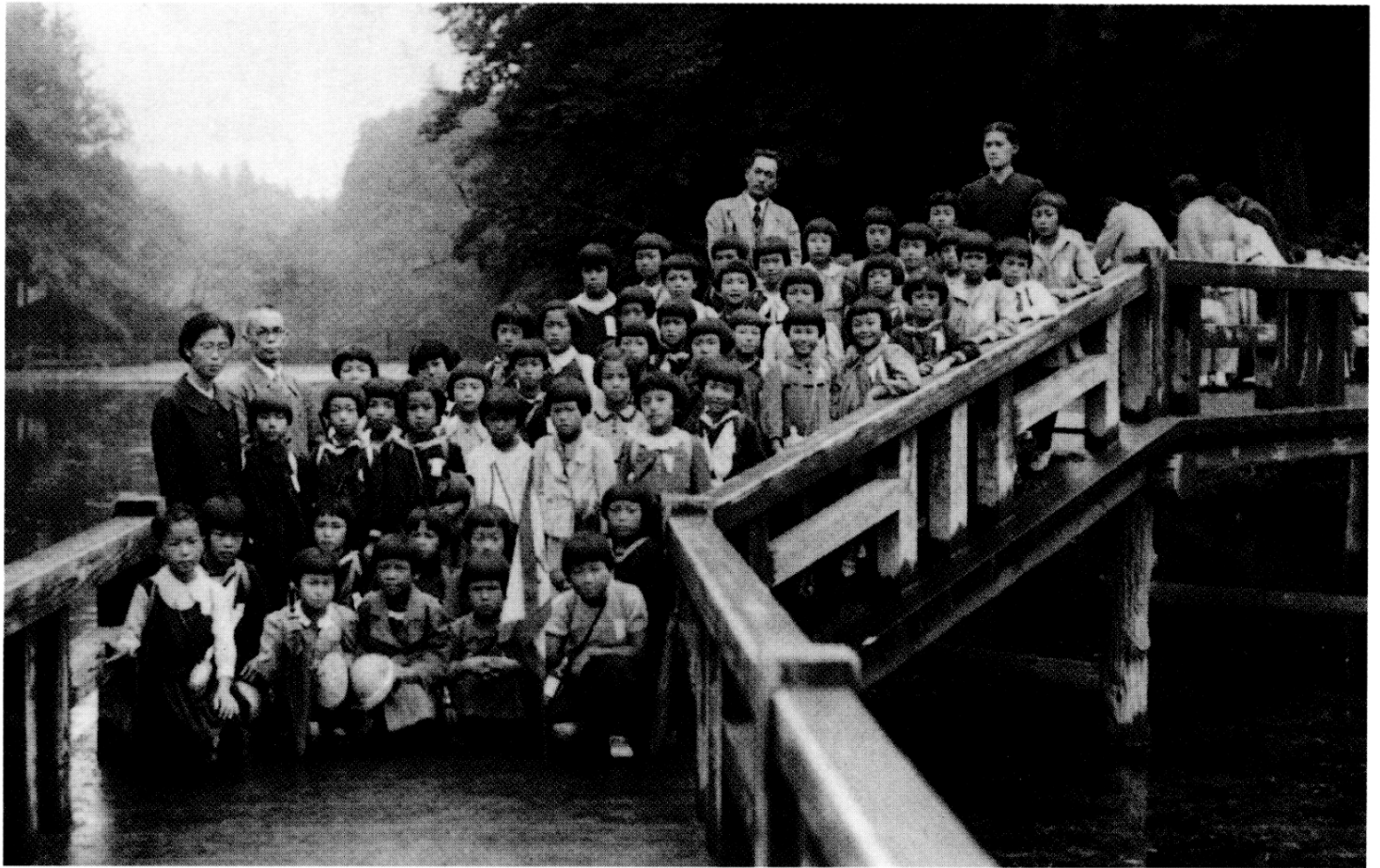
らしいな」と思ったものです。

また近くの病院でも、一年半ほどアルバ

イトをしました。歩いていけるところでし

た。

母が通院していた関係だったか、何かの



矢口小学校 4 年の遠足。3 列目、中央（武蔵野・井の頭公園）



ときに、手伝てつだいに来てくれないかと声がか  
かったのです。

注射器ちゅうしゅうきの煮沸消毒しゃふつしょうどくや粉薬こなぐすりを包むお手伝てつだい

をしたり、保険ほけんの点数を計算したりもしま  
した。

習ならい事ごととしては、小学校のころは、お習しゅう  
字じに通かよいました。教おそわっていた先生が病氣びようき  
になって、やめてしまいましたが。

のちに、銀行ぎんこうに勤つとめていたころは、速記そつき  
も少々かじりました。

すべて、いまに生きています。



調布学園ちょうふがくえんでの学生生活は、奥様おくさまにと

って、かけがえのないものだったよう  
すね。

幸しあわせなことに、調布学園では、よき友人、  
そして、よき恩師おんしに恵めぐまれました。

生涯しょうがいにわたる同窓どうそうの友は、何ものにもか  
えがたい宝たからです。

また、担任たんになんをしてくださった前田富子先  
生せい、さらに社会科を教えてくださいださった島田  
正就理事長はじめ、素晴すばらしい先生方がたとの

出合いがありました。

卒業そつぎょうしてからも、陰かげになり日向ひなたになり見み



守<sup>まも</sup>つてくださり、恩師とは何とありがたいものかと、身<sup>み</sup>をもつて感<sup>かん</sup>じてきました。

\* \* \*

ここで、夫人<sup>ふじん</sup>が卒業した調布学園の理事長であつた故<sup>こ</sup>・島田正就さんをはじめ、加賀多枝子<sup>えこ</sup>さんたち同窓生の皆<sup>みな</sup>さまのお話<sup>しやうかい</sup>を紹介<sup>しょうかい</sup>します。

自分が担<sup>たん</sup>当<sup>とう</sup>した教え子<sup>き</sup>は、八千人になりませんが、ひとときわ際<sup>きわ</sup>立<sup>だ</sup>つていたのが、香峯<sup>かね</sup>子さんでした。

廊下<sup>ろうか</sup>ですれ違<sup>ちが</sup>つても、立ち止ま<sup>あ</sup>つて挨拶<sup>あいさつ</sup>されるお下<sup>さ</sup>げ髪<sup>がみ</sup>の姿<sup>すがた</sup>が、いまでも思い出されます。毎年、「お元気で」といただく年賀状<sup>がじやう</sup>がうれしいです。

(故・島田正就理事長の話)



担任の前田富子先生は、入学前から、香峯子<sup>ちゆうもく</sup>さんに注<sup>ちゆう</sup>目<sup>もく</sup>されていました。学校見学のおり、お姉さまと一<sup>いっ</sup>緒<sup>しょ</sup>にいらした香峯子<sup>むか</sup>さんを迎<sup>むか</sup>えられたのが、前田先生だったのです。

脱<sup>ぬ</sup>がれた靴<sup>くつ</sup>をきちんとそろえ、上品<sup>じやうひん</sup>にお辞儀<sup>じぎ</sup>される姿<sup>すがた</sup>に「こういうお嬢<sup>じやう</sup>さまにこそ入学<sup>にゅうがく</sup>していただきたい」と感心<sup>かんしん</sup>されて、入

がくしけん  
学試験のあと、ご自身で合格を確認された  
じしん ごうかく かくにん  
と言われておりました。

◆  
入学されてからは、クラスの「世話役」  
せわやく  
をされていきました。この「世話役」は、成  
せい  
績優秀のうえに、品格が備わる生徒が選ば  
ひんかく そな せいと えら  
れる役目です。  
やくめ

◆  
クラスを、とてもよくまとめられて、  
「あのクラスは何の心配もない」「模範のク  
しんぱい もはん  
ラスで安心できる」と職員室の先生方が言  
あんしん しよくいんしつ がた  
われるくらいでした。

◆  
お掃除のぞうきんがけなども、率先され  
そうじ そつせん  
ていました。

どうきゅうせい  
私たち同級生の間では「いちばん調布学  
ちようふがく  
園らしい女性」と言われております。  
えん じよせい

◆  
「優しいなかにも、不正に対しては、きち  
やさ ふせい たい  
んと発言される勇気を持っていました」と、  
はつげん ゆうき も  
前田先生はよく語っておられました。  
まえだせんせい

◆  
池田先生とのご結婚のお話を聞かれたと  
いけだせんせい けつこん  
き、前田先生は「とてもうれしい。立派な  
りっぱ  
ご夫妻で、きっと素晴らしい創価学会を築  
ふさい すば そうかがつかい ぎず  
いていかれるに違いない」と喜ばれていま  
ちが よろこ  
した。

◆  
前田先生は、創価学会の行事にも出席さ  
ぎょうじ しゅっせき  
れ、大田区の文化会館や八王子の創価大学  
おおたく ぶんかかいかん はちおうじ  
創価大学



調布学園時代（16～17歳ごろ）。自宅にて

も訪問ほうもんされました。そのおりのことを調布ちようふ学園がくえんの職員室しよくいんしつでお話しなさり、校長先生はじめ皆みな、感動かんどうされていました。



平成十四へいせい（2002）年の夏、前田先生まえだ せんせいは九十六歳で逝去せいきよされました。地方での行事じのため、葬儀そうぎに参列さんれつできない香峯子かねこさんから、それは胸むねを打つ弔電ちようでんが届とどきました。

「蛍ほたるの光 窓まどの雪——

幾歳いくとせも最高さいこうにお世話せわになり、私たちを慈いつくしみ見守みまもってくださいました先生。

優しく、深い知性ちせいの誇り高き恩師おんしである前田富子先生まえだ とみこ せんせいのご高恩こうおんを、私は決して忘れません。……私は先生の思い出おもひでを胸むねに秘ひめ

ながら、これからも先生の生徒せいとらしく、人生じんを生き抜ぬいてまいります。

先生、ありがとうございます。ごゆつくりお休みやすみください。

懐かしき前田先生、さようなら！」

前田先生のご家族かぞくも、感動かんどうを禁きんじ得えない様子ようすでした。



香峯子さんは、本当に優しく、面倒見めんどうみのよい方かたでした。皆みなに平等びやうどうに接せつする素晴すばらしい方かたでした。

卒業後そつぎょうごのクラス会で、お目にかかったおりも、昔むかしと少しも変かわりなく、本当にうれしかった。





——卒業後の進路について、銀行に決められた経緯は、どんなことだったのでしょうか。仕事を通して学ばれたことはありましたか。

学校を卒業して就職したのは、昭和二十五（1950）年です。

女性の社会的な進出という、いまのような趨勢は考えられない時代でした。終戦後、五年しかたっていないし、東京の復興は、まだほど遠い感じでした。

そのころ、女性の就職先としては、やはり銀行が手堅くていちばんという時世で、

憧れの職場だったのですね。

看護師さんや学校の先生になるには、専門の学校を出なくてはいいけませんし。父の考え方も手堅くて、銀行ならば、という思いがあつたと思います。

いまでしたら、進学から就職まで、もつと自由に幅広く選択できますから、果たして女学校に入って銀行を選んだかどうか……。

実際、いよいよ卒業だというときには、先の学校に進むかどうかで、一度、気持ち揺れました。

実践的な女学校に娘たちを入れるくらい

の父ですから、女の子には学問はあまり必要ひつないという方針ほうしんでした。

姉は栄養学校へ進すすみました。私の場合は、「新しい学制がくせいの高校まで行つたのだから、それで就職しゅうしょくしたっていいではないか」というのが、父から言われたことでした。

あのころは、そんなに進学しんがくできる学校は多くなかったのですが、それでも同級生どうきゅうせいの幾人いくにんが受験じゅけんする人がいたものですから、ちよつと心こころが揺ゆれたのです。

三年生のころ、アルバイトで病院びょういんへお手伝ていに通かよつたこともあつて、医学部いがくぶへ行いくかな、と思つたこともありました。

でも、父の会社はまだ再建さいけんできていませ

んでした。貿易ぼうえきでの商あきないが再開さいかいできたのは、もつとあとのことでした。

医学部は相当お金がかかるので、薬専やくせん（薬学専門学校やくがくせんもんがっこう）ならいいかしら、と薬剤やくざい師しを志願しがんすることなどを考えて、いろいろと思案しあんしていたのです。

そのときに、「もう自分で決きめなさい」と両親りやうしんから言われました。そこで、それこそ真剣しんけんにお題目だいもくを唱となえました。

そして、就職しようと思つたのです。自分の心が本当に決きまつたな、と実感じつかんしたのは、そのときが初めてです。

それまでの信心しんじんは、どちらかといえば、両親かぞくいちどうがやっているから、家族一同がやって



調布学園卒業式。3列、左から7人目（昭和25年3月）



調布学園の文化祭。後列、中央（昭和21年11月）

いるから、ということでした。朝もちゃんと勤行ごんぎょうしないと、ご飯はんを食べさせてくれませんから。(笑)

けれども、真剣しんけんに祈いのると、こんなにちゃんと決きまるものなのだなあ、という体験たいけんをこのとき、初めてはじていたしました。自分の氣き持もちがまったく揺ゆれないで定さだまつたんです。

心こころが定しずまつてからは、就職しゅうしよくした場合のいろいろな利点りてんもよく見えてきました。姉あねが嫁よめいだ直後とつでしたし、家計けいの状況じょうきようもわかるものですから、やはり勤めつとて少しでも助たすけになれば、という氣持きもちちでした。

そこで就職するなら銀行ぎんこうと、今度こんどは、そ

ちらへの祈りになって、受うけたら入はいっちゃった、(笑) という感かんじなんです。

なぜ住友銀行すみともぎんこうだったかと申もうしますと、学校きやうじんへ求人きうじんに来た順番じゆんばんで、住友が最初さいしよに決きまったからです。

そのあと別べつの銀行からも求人きうじんが来きまして、両方りやうほう受けましたが、返事へんじも住友のほううが早く来きました。住友には学校がっこうからの推すい薦せんもあつたように思います。

あのととき、進学しんがくコースへ入いっていれば、主人しゆじんとの出会あいはなかつたかもしれませなし、(笑) やはりここうなつたのが、私の幸こう運うん中の幸運うんちゆうだったと思います。



就職したころは、まだ衣料切符がないと  
着るものも買いづらい時代でしたので、通  
勤着は古着を再生して、自分でちよこちよ  
こと縫って着ておりました。それで裁縫が  
身につきました。いまのような制服は、も  
ちろん、まだありませんでした。

銀行での仕事は、最初は計算の係でし  
た。出納ですね。私はまだ見習い中でした  
けど、一日の集計をする係だったのです。  
それには算盤が上手でないといけませんか  
ら、家で練習しました。在学中はあまりや  
ったことはありませんでした。入行すると  
きに「算盤が下手でもいいのですか」と聞

きましたら、いいという話でしたので。  
(笑) それが覚え始めで、比較的うまくな  
りました。

わずか二年の勤めでしたが、最後は支店  
での競技会で優勝するくらいになりました。  
た。計算機が登場してからも、しばらくは  
やつぱり算盤でした。

銀行では、一日のものを必ず集計して、  
それが終わらなければ残業してでも、たと  
え一円多くなっても、全部やり直しますで  
しょう。その「今日のことは今日やらなけ  
ればいけない」という習慣が、結婚後にも  
役に立ちました。いまでも役に立っている

ような感じがします。

特に家計簿をつけるのに、たいそう得を

しました。「家計簿をつけていく大事さ」

は、結婚の際に戸田先生から指導されたこ

とでもありました。あらかじめ、その予行

演習をしていたようなもので、(笑) これ

も幸運でした。

家計簿は、母もきちんとつけておりました。

ドイツなどでは家政学が、家庭の中で

しっかり根づいているそうですね。そのド

イツの主婦の伝統が一つの基礎となつて、

その上に国家の財政学も築かれ発達してき

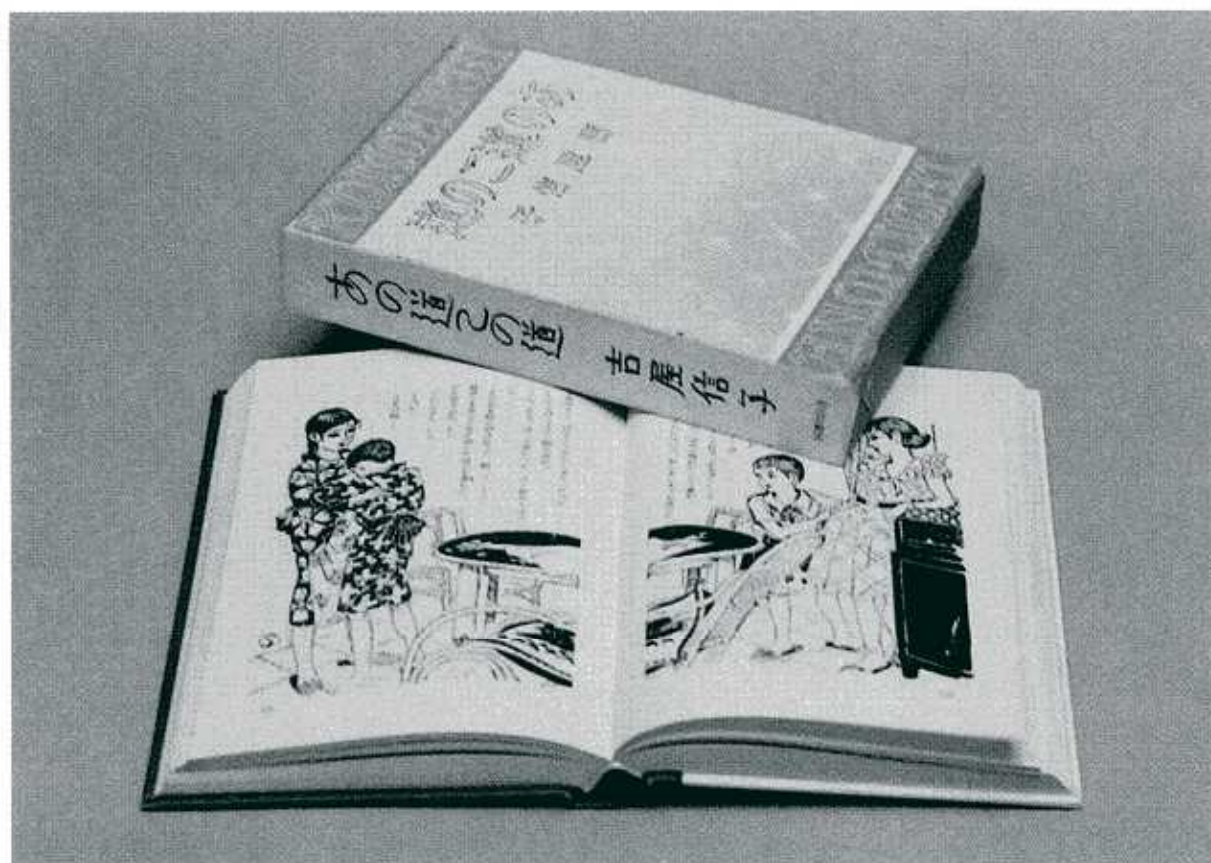
たという話を、何かの本で読んだことがご

ざいます。母も、そうした堅実さを重んじているようでした。母は性格上のこともあったと思いますが、勉強を進んでしておりましたから。

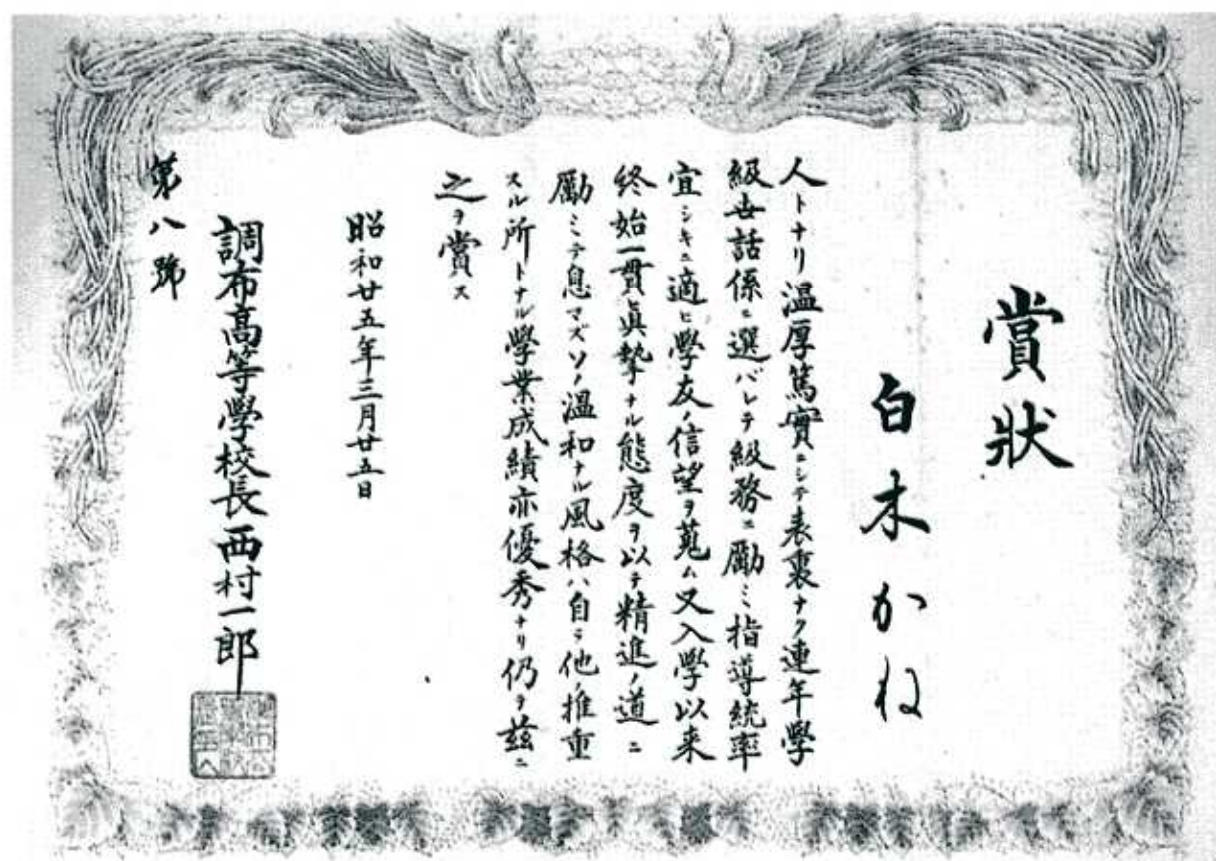
これは結婚後のことですが、銀行に勤めたおかげで、銀行が上手に活用できるようになりました。(笑)

結婚してからは、まず、最寄りの銀行にお給料を全部、預けてしまふんです。そうしますと、出しに行くのはなかなか面倒なものですから、なるべく手元にあるお金でなんとかするようになりました。

引き出すときも、一度にたくさんは出さ



少女時代の思い出の本『あの道この道』



調布学園時代の賞状

ないのです。(笑) 当時で千円とか三千円とか、少ない金額を出してくるのが平気なんです。勤めるまでは、銀行というところはたくさんのお金を預けたり引き出したりしなくては、なにか恥ずかしいような感覚でした。(笑) しかし当時、銀行側は、こまめな引き出しを、むしろ歓迎しておりますから。

銀行に勤めていたおかげで、よかったなあと思うことが、ずいぶんとありました。

(笑)

対人関係の面でも勉強になりました。

それまでは女学校でしたから、職場で初めて男性の人たちと一緒にいるという

経験をしました。同僚の方の中に男性がいるという、つまり私なりの一種の社会化でしようか。人との接し方を学ばせていただきました。



——仕事と学会での活動の両立に悩むこともありましたか。

私が勤め始めました昭和二十五(1950)年は、学会では戸田先生の第二代会長推戴へ機運が高まっていた年でした。その翌年の昭和二十六(1951)年の五月



三日には、待ちに待った戸田先生の会長就任式を迎えましたので。

この年（昭和二十六年）の夏、七月十九日に女子部の結成もございました。私も最初の七十四人の一人として参加しております。

その結成式のあとだったと思うのですが、皆で歌を歌うことになりました、中心者の方から、突然、私が指名されました。

私がちよつと戸惑っておりますと、戸田先生が、その方に「人前で歌うのが好きなのかどうか、指導者は、同志のそういうことも頭に入れておかないといけないのだよ」と言われて、かばってくださったこと

を覚えています。

戸田先生は、座談会などで、わが家（や）にいらしてましたから、私のこともよくご存じで、一切を見守ってくださいっていたのですね。

勤めだして一年目は、仕事のほうに没頭（ぼつとう）せざるを得（え）なかったという感じ（かん）です。ですから、算盤（そろばん）もうまくなつたと思うのですが。（笑）

その間、せめて座談会にはと思い、出席（しゅつせき）しておりました。

二年目は、仕事の係（かかり）が集計係（しゅうけい）から総務係（そうむ）に配置換え（はいちが）になりました。少しずつ、いろ

いろと時間の工夫くふうもできるようになりまして、なるべく学会活動がっかいかつどうと両立りょうりつさせていくように努つとめました。

いまでもそうですが、この「両立」というのが、口くちでは唱えとなやすく、実じつのところは大変たいへんむずかしいことです。

しかし「両立」へ努力どりよくすることが、将来しょうらいになってみますと、自分自身じぶんじしんの境涯きやうがいを広げ、福運ふくうんを積みつ、生活力せいかつりよく、生命力せいめいりよくとなつて、人生を大きく開ひらいていく礎いしずえになることは、確たしかだと思おもいます。



第2章

恋愛と結婚







全力疾走の夫とともに  
初心を貫く

十九歳になった白木かねさんが出会った「運命の人」は、父の薫次さんとは、対照的といってもいい青年でした。

青年のころの池田氏は、結核を患っていたため、体が弱く、ガリガリにやせ細っていたそうです。師匠である戸田城聖氏が「大作は、三十歳までしか生きられないかもしれない」と涙ながらに嘆いたという話

が伝わっているほどです。しかも、というべきか、それなのに、といったほうがいいのか、池田氏は周囲があぜんとするほど、すべてにけた外れな青年でもあったようです。

体が弱く、三十歳までしか生きられないかもしれないけた外れの青年。これでは、かなり減点されてもしかたがない存在といってもいいでしょう。でも、かねさんは違っていました。「いわゆる力のある大きな人という感じで、すごく印象的でした。というよりも魅せられました」と、池田青年の本質を見抜いたのです。

池田青年は周囲の視線などまったく意に



介さず、平然<sup>へいぜん</sup>としていたようです。それが  
かえってよかったのかもしれない。「私  
は、そういう人に喝采<sup>かつさい</sup>をするほうだったの  
です」と、かねさんはご自分を分析<sup>ぶんせき</sup>してい  
ます。

すでに気づかれた方もいらっしやると思  
いますが、かねさんは、どんなときも冷静<sup>れいせい</sup>  
に状況<sup>じょうきょう</sup>を判断<sup>はんだん</sup>して、必ずよい方向<sup>ほうこう</sup>へ考えを  
進<sup>すす</sup>めていき、結果<sup>けつか</sup>を出します。裁縫<sup>さいほう</sup>も、  
「下手<sup>へた</sup>だった算盤<sup>そろばん</sup>」も自分のものにしてし  
まいました。究極<sup>きゅうきよく</sup>のプラス思考の持ち主<sup>もぬし</sup>と  
いってもいいでしょう。

そして、控えめな美少女<sup>びしょうじょ</sup>・かねさんは、

「優しいなかにも、不正<sup>ふせい</sup>に対しては、きち  
んと発言<sup>はつげん</sup>される勇氣<sup>ゆうき</sup>」を持<sup>も</sup>っていました。

昭和四十一<sup>しやうわ</sup>（1966）年の「主婦<sup>しゆふ</sup>の友<sup>とも</sup>」  
7月号<sup>ごう</sup>に「美しい花<sup>はな</sup>を咲<sup>さ</sup>かせるための根<sup>ね</sup>っ  
こになろう」という対談<sup>たいだん</sup>があります。当時  
三十八歳の池田氏<sup>ありよし</sup>と作家の有吉佐和子<sup>さわこ</sup>さん  
のビッグな顔合わせです。三十二歳で創価<sup>そうか</sup>  
学会<sup>がっかい</sup>会長<sup>かいちやう</sup>に就任<sup>しゅうにん</sup>して、それから六年後のこ  
とでした。

その中に、こんな対話<sup>たいわ</sup>がありました。

池田 女房<sup>にようぼう</sup>はおとなしい。（笑）口出しも

いっさいいたしません。(笑) 戸田先生が会長に就任なされたあくる年、昭和二十七年に結婚式をあげました。昭和三十五年五月二日に、会長になって、その日、家に帰ってきたら、女房が、「今日の就任式を私はお葬式だと思っ

ています」と言いました。  
有吉「お葬式と思う」とおっしゃったんですか。それはおとなしくないかもしれない。(笑)

のちに有名になった、このエピソードについて「私をそういう気持ちに作り直した

のは、やっぱり主人だったと思います」と微笑む夫人は、池田氏が見込んだとおりの妻になっていました。

「夢のある、ロマンにあふれた人」、そして「何かを託せる存在感のある人間」として、かねさんが池田青年を意識し始めたころ、池田氏の心にも大きな変化が起きていました。

大志を抱く池田青年が、かねさんの資質に気づかないはずはありません。お二人の結婚には、創価学会の未来がかかっていたのです。





昭和35年 8 月、京都にて（撮影・池田大作）

妻が、私の目の前に一人の若い女性として急に浮かび上がってきたのは、昭和二十六年の夏である。

蒲田にある新潟鉄工所時代、荏原中学校の学徒動員で来ていた白木という学生がいた。その後、彼の家が戦前からの創価学会の会員であることを知った。ある会合の帰路、彼は「妹です」といって、彼女を紹介したのである。

当時、彼女は都心の銀行に勤めていた。やがて幾度となく顔を合わせることが多くなった。

（池田大作著『私の履歴書』へ日本経済新聞社より）

——「ある会合の帰路」に、お二人が出会われたとき、未来の夫に、どんな印象を持たれたのでしょうか。

その会合といいますのは、千代田区の西神田にあつた小さな学会本部で、戸田先生が毎週、金曜日に行われていた御書（日蓮の遺文集）の講義です。いわゆる「金曜講義」と呼ばれていました。

それは、早く行かないと部屋に入れないくらいで、階段まで満員になるのです。その講義に、兄も私も通っていました。

そうしたある日、兄と主人が「あ……」



と言いついて、挨拶を交わしたのです。二人は顔見知りだったのですね。

戦時中、主人が蒲田の新潟鉄工所で働いていたときに、友人と読書の感想などを語り合うグループをつくっていました。兄も中学生の学徒動員で同じ工場に勤めていた関係で、そのグループに顔を出していたようです。

戦後は、お互いバラバラになって、会う機会もなかったのが、数年後に再会したわけです。

主人の住まいは大森でしたから、神田からは私たちの帰りと同じ方角の電車になります。私は兄の横で、つり革を握っております。

ました。

兄は主人に「妹です」と紹介し、主人は「ああ、そうですか」と会釈を交わし、そのまま兄と話し込んでいました。それが出会いました。

その後も何度か、一緒に帰る機会がありました。

私は、小学生のときに教わった担任の辻先生も一緒の方角だったので、むしろ辻先生とお話をしながら、そして主人は兄と話をしながら帰っておりました。ですから、そのころは、お互いにそれほど意識した存在ではなかったと思います。

所属は、同じ蒲田支部かまたしぶでした。

立宗満七百年の記念きねんに学会の事業じぎょうとし

て、日蓮大聖人の御書全集ごしよぜんしゅうが発刊はつかんされまし

た。各自かくじが何冊購入なんさつこうにゅうするか、支部で打ち合うちあ

わせをしたことがありました。

そのとき、御書の編纂へんさんに携わった主人しゅじんは

「百冊」って言うのです。一冊一二〇〇円

で、あのころとしては大変たいへんに高価こうかなもので

した。

ですから、皆さんみなは、注文ちゅうもんはせいぜい二

冊か三冊、多くても五冊でしたのに、主人

は「百冊」だと。(笑)

主人は、そういうふうには、ほかの人とは

けた外はずれでした。

母は、そうしたけた外はずれな話に「池田いけださ

んは大風呂敷おおふろしき」と言っていました。(笑)

同じ支部で、母も幹事かんじ、主人も幹事という

ときでしたので。

母は「大風呂敷」と言いましたが、それ

をその場で聞いていた私は、何と言えはい

いのかしら、いわゆる力ちからのある大きな人と

いう感じかんで、すごく印象的いんしやうてきでした。という

よりも魅みせられました。(笑)

母などが言いますのには「池田さんはオ

ーバーで」となりますが、主人は主人で

「大風呂敷でも包つつめばいいんでしょ」と言

ったことがあります。(笑)

私は、そういう話に喝采かつさいをするほうだっ



講義をする戸田城聖第二代会長



西神田の旧学会本部

たのです。(笑)

ときどき会って多摩川べりを歩いたときでも、話が世界全体のことから宇宙のことへ飛躍しますし、(笑) 夜空の星々のことを語りながら、学会の在り方や将来の構想へどんどん進んでいきますので、私としては、スケールの壮大なその話に、耳を傾けていくのが精一杯でした。

慶應義塾の創立者・福沢諭吉先生のおうぎよく、そのりつしゃふくざわゆきちせんせい、思想は、昔から好きなようでした。よく「衆心の発達」ということを言っておりまして。それを、私のような者にもわかるように話してくれました。

その「衆心」とは民衆の精神であり、その心情であり、それを発達させて初めて本当の文明になるのだ。これが、福沢先生が主張される真髓の一つなんだよ、というように。

そういう話をしたあとに、「これも読みなさい」「あれも読みなさい」というのです。本のお話をよく聞かされました。なかでも長与善郎さんの『竹沢先生と云ふ人』とか、バイロン詩集とかは、しきりに薦められますので、私も読みました。鶴見祐輔さんの『ナポレオン』もでした。





——ご主人しゅじんから紹介しょうかいされた本で、いちばん印象いんしょうに残のこっている本は、何でしょう  
か。

アレクサンドル・デュマの『モンテ・クリスト伯はく』。「巖窟王がんくつおう」の物語ものがたりでしようか。  
ヴィクトル・ユゴーの『レ・ミゼラブル』  
も、心こころに残のこっております。

主人は、もともと文学青年でしたから、  
社会そしきや組織あぐへいの悪弊たいに対しては鋭い反発すどはんぱつがあ  
ったようです。「人間主義にんげんしゆぎの組織であれ」  
とよく言っていました。

戸田先生とだせんせいからも「学会を自分が理想りそうとす  
る組織にしたらいいいではないか」と言われ  
たと、主人から聞いておりました。

みんなが、それぞれに生き生きとして活かつ  
動どうできる組織、それを自分はつくりたいの  
だと。青年時代じだいから私に語る理想は、そう  
いうことばかりでした。

戸田先生も、結婚式けっこんしきでの祝辞しゆくじで「男は力ちから  
を持たねばならない」と言ってくださった  
のですけれど、女性じよせいは、高い理想とともに  
力ちからを持つ男性だんせいに魅力みりよくを感じるかんのではないで  
しょうか。

主人のように、夢ゆめのあるロマンにあふれ  
た人は、私の周りまわには、あまりいませんで

した。

ふつう男性像だんせいぞうといひますと、若いわかときの女性じよせいはよく父親ちちおやと比較ひかくするといわれます。それが、理想りそうの男性像になる場合もありますしょうし、逆さかの場合もあるといわれますね。

戸田先生とだせんせいはまた、祝辞しゅくじの中で、「妻子さいしに心配しんぱいをかけるような男は、社会で偉大いだいな仕事ごとはできない」ともおっしゃってくださいました。

父は、その点、家族かぞくに心配をかける人ではありませんでしたから、私はあまり父を意識することはなかったように思います。

(笑)

ともあれ、主人しゅじんのような男性は、際立きわつていたというだけではなく、何かを託たくせる存在そんざい感のある人間として魅力みりよくを感じかんしました。

七月のある日、私は学会がっかい員宅で予定よていされていた会合に飛び込とこんだ。

そこには彼女かのじよが一人だけいた。戸外では雷鳴らいめいが遠く近く鳴り、静寂せいじやくな部屋へやの中には二人だけの沈黙ちんもくが支配しはいしていた。二十三歳という青春の脳細胞のうさいぼうの仕業しわざであつたのであろうか、私は、かたわらにあつたワラ半紙いっぺんに、一片の叙情詩じょじょうしを書いて渡わたした。



結婚式（昭和27年5月3日）

「吾が心嵐に向かいつつ

吾が心高鳴りぬ……」

夢中だったにちがいない。紙片が広げら

れようとしたとき、私はそれを押し止め、

「あとで……」といった。

彼女はハンドバッグに素直にしまいこん

だ。

詩はさらに――

「嵐に高鳴るか吾が心よ」とつづき、

「ああ吾が心汝の胸に泉を見たり

汝の胸に花咲くを願いたり」と。

（『私の履歴書』より）



憧れの男性から、こんなロマンチッ

クな詩をいただいて、どんなお気持ちだ  
ったでしょうか。

あところ、女子部の班長だった私は、川  
崎市にある拠点のお宅で、皆さんがいらつ  
しゃるのを待ちしていました。

そのときのことです。しかし私のほう  
は、そこまで思っていないかったです。

まだ結婚とか何とかは、全然、頭にあり  
ませんでした。しかし、そのおりにいただ  
いた詩が、そもそも相聞（恋）の詩でした  
から、私はびっくりしたのです。



それまでは、主人しゅじんを憧れて見ていただけでした。あそこで詩をもらってから、そういう気持ちが生まれたということです。主人は、何と云うか知りませんが。（笑）  
びっくりしましたが、それで心が決きまったのも事実じじつです。

そのころ、主人が戸田先生とだせんせいのもとで勤つとめていた会社は、市ヶ谷いちがやにありました。一方の私は、矢口渡やぐちのわたの駅えきから乗って、蒲田かまたで乗のり換かえて、有楽町ゆうらくちようまで通かよっていました。ですから、よく大森おおもりの駅えきで一緒いっしょに乗り合あわせるようにするわけです。（笑）電車はすぐ満員まんいんですから、別べつに話をするという

のではないのですが……。それで手紙の交こう換かんが始はじまりました。

あの相聞の詩は、持もち合あわせの伝票でんぴようの裏うら紙がみにサーツと書いてくれたものです。それを、ずっとハンドバッグの中に入れて持もっていました。いまではボロボロになっています。ですから、大切にしています。

目蒲線めかませんで、時々見ときどきかける美うつくしい女性じよせいがいた。どこに行くのだろう。どういう家の娘むすめさんだろうと思っていた。

あるとき、大作だいさくが、一人の女性を家に連つれてきた。なんと、その美しい人であった。

本当に驚いた。

（兄の故・池田増雄さんの話）

手紙でも、主人は一生懸命、私を育ててくれる感じでした。

信仰に關しても、戸田先生に關しまして、私はまだまだ、わかっていない時期でしたので。

主人は、そのころから、もう自分の使命というものを自覺しておりました。全部、自分の胸のうちに収めていたのでしょうね。

ですから結婚したのち、会長就任の日の

夕べに、私が「お葬式と思います」と申したことが有名になったようですが、私をそういう気持ちに作り直したのは、やっぱり主人だったと思います。（笑）

アンドレ・モロアの結婚訓に「結婚に成功する最も肝要な条件は、婚約の間に永遠のつながりを結びたいという意志が真剣である事だ」とあるが、二人とも幾多の苦難の坂も励ましあつて進もうと語りあつた。私は聞いた。生活が困窮していても、進まねばならぬ時があるかもしれない。早く死んで、子どもだけと取り残されるかもしれない。

れない。それでもいいのかどうか、と。

彼女かのじよは「結構けつこうです」と微笑ほほえみながら答え

てくれた。

私ども二人の心中を訊きかれた戸田先生

は、双方そうほうの親への了解りようかいをとってくださるこ

とになった。夏が過ぎ、秋も去さった冬の寒さむ

いある日である。（『私の履歴書わたしのりれきしょ』より）



——ご結婚までの道のりをお聞かせくだ

さい。

「結婚とは、互たがいの目を見つめ合うことで

はなく、互きようつういに共通の目標を見つめて協力きようりよく

して歩むことだ」と、主人はよく青年たち

に語ります。

私たちの婚約前後には、戸田先生が、

「いわゆる恋愛れんあいをして、それで、恋愛をし

たことによって両方りようほうがよくなれば、それは

いい恋愛だ」とおっしゃっていただきまし

た。

「両方が駄目だめになってゆくようであれば、

それは悪い恋愛わるだ」ということも言われま

した。戸田先生の言い方は、そういうところ

が大変たいへんに明快めいかいでした。（笑）

戸田先生は「すごいやつを香峯子は射止めたなあ」と言われました。

すると叔母さん（香峯子夫人の母・静子さん）が、「大ちゃんは、大風呂敷なので」と。

戸田先生はお笑いになって「大風呂敷でも、いまに見ていてごらん」と応じられましてね。とにかく「すごい男だよ」と。

そのときは私、戸田先生のおっしゃる意味がよくわからず、叔母さんもきょとんとした顔をしておられました。

（学会本部・会長室でのエピソード。その場に居合わせた親戚の故・白本文さんの話）

そうそう、「大風呂敷」の話ですね。（笑）母がそうして戸田先生のところへ伺ったことは、ずっとあとになって知りました。あのころの青年部は人が少ないものですから、私たちのことが噂になっては、心配していたのかもしれませんが。

母は、おつきあいのこととは知っていたと思うのですが、結婚については、まだ若すぎる、という思いもあったようです。婚約が決まったのが十九の年で、嫁いだのは、やっと二十歳になった昭和二十七（1952）年の五月三日でした。

何事も前へ前への母でしたので、ひとたび話が決まった以上は、応援してくれまし





新婚時代

た。戸田先生が後ろ盾でしたから。

嫁ぐ段階では、母からの特別な言葉はありませんでした。

とにかく「ちゃんと信心をして、戸田先生についていけば間違いはないから」というだけでした。

——プロポーズの言葉は？

「信賴しんらいしてついておいで」と言ってくれました。

でも、いまになって考えてみると、私の

ほうが主人しゅじんの人間にんげん的な魅力みりょくにひかれて、まっしぐらという感じかんでした。(笑)

——いちばん強くひかれたのは、どういう点でしたか？

主人が、自分の師匠ししやうを最高さいこうに尊敬そんけいし、讃たたえていたことです。十九歳から偉大いだいな師匠を持つて、お仕えつかしたことを、何よりも誇ほこりとしていました。

「金銭きんせんでも、名誉めいよでもない。最高の師匠に出会い、教わったことを、最高の幸福者こうふくものと



昭和29年ごろ

思う」と語っていました。



——師匠ししょうの戸田先生とだせんせいとは、ご夫妻ふさいとして、たくさんのお思い出があるでしょうが、一つ二つ、お聞かせください。

そうですね。

一つは、結婚式けっこんしきのとき、数十人の小宴会しょうえんかいの席上せきじょうでのことです。戸田先生からの祝辞しゅくじは、「二人して、青春時代せいしゅんじだいに決めた信念しんねんの道を、最後まで貫き通していつていただきたい」と簡潔かんけつに言われました。

また、いちばん師匠ししょうが尊とうとくありがたく思えた思い出として、「大作だいさくは三十歳までしか生きられないかもしれない」と言われて、滂沱ぼうたの涙なみだを流ながして泣なかれたことがあります。それは、十数人の幹部かんぶが、先生のそばに集あつまったときのことです。その中に父がおり、あとから聞きました。弟子でしたちは皆みな、驚おどろいたようです。

師匠というものは、どれほど偉大いだいであり、弟子でしを思う気持ちきもちが、どれほど深く、すごいものかということ、改めて感かんじとりました。

戸田先生は、仏法流布ぶつぽうるふのために、日本中を回まわっていました。夫おつとも一緒いっしょのときが多





戸田城聖氏から贈られた御書

かったです。

戸田先生が地方へ出発されるときは、どんなに朝早くとも、羽田空港でも、上野駅でも、私は子どもを抱えて、お見送りに行きました。また、ご帰京されるときも、夜遅くであれ、誰もいなくとも、お出迎えに行ったものです。たまに、二、三人の幹部の方がご一緒のこともありました。

これは、戸田先生の弟子として、先生がお亡くなりになるまで、続けさせていただきました。

あるとき、ある会で、先生が「香峯子は組織の役職は低いけれど、今日、たった

一人の「送迎部長」に任命する」と言ってくださった思い出があります。



結婚指輪はいただきましたか。

ええ。「ダイヤだよ」と言われてもらった指輪には、ダイヤが二つ、ついていました。「二人という意味だ」と言っていました。

ところが、それが、年々、輝かなくなっていくのです。(笑)

実は、ジルコン(ダイヤモンドのように



結婚指輪



池田氏が贈ったアメリカ土産の  
ピルケース(イラスト・美喜 薫<sup>み き かおる</sup>)

つやのある鉱石こうせき）だったのです。（笑）い  
まとなつては、懐かしい思い出です。

——ほかに何か、思い出のプレゼントは  
ありますか。

そうですね。主人がアメリカを初訪問し  
たときお土産みやげを買ってきてくれたんです  
（昭和二十五しやうわ（1960）年十月）。

それは、小さな小さなピルケース（薬箱）  
で、ふたにはエメラルドのように輝く宝石  
がついていました。「本物だよ。高いんだ

よ」と言つて、手渡してくれました。

ところが、その後、私も一緒にアメリカ  
へ行つたとき、たまたま道端の露店で、そ  
れと同じものを見つけたのです。

「あらっ、一ドルじゃない！」（笑）

「まずいところ、見られちゃったな……」

（爆笑）

二人で大笑いしました。

ただ、主人が最初にアメリカに行つたと  
きは、外貨の持ち出しも、一人が一日当た  
り三十五ドルと制限されていた時代です。

その中で、主人は、自分たちの食事代な  
どはできる限り切り詰め、その分を現地の  
同志のために心がけていました。



ですから、小さな「一ドルのピルケース」  
にも、（笑）お金で計れない大きな真心が  
込められていたんだなと感<sup>かん</sup>じます。



小説『人間革命』を拜見<sup>はいけん</sup>しますと、

結婚式で、戸田会長は「主人を駄目<sup>だめ</sup>にするような女房<sup>にようぼう</sup>だったらば、そのときは女房を追<sup>お</sup>い出<sup>だ</sup>す」と言われてますね。

そして「私は二人をどこまでも守<sup>まも</sup>っていきます。二人とも、また、この覚悟<sup>かくご</sup>でいってほしい」とも言われ、この「最愛<sup>さいあい</sup>の一言<sup>ひとこと</sup>は、二人の胸<sup>むね</sup>に直角<sup>ちよくかく</sup>に突<sup>つ</sup>き刺<sup>さ</sup>さった」と書かれていましたが……。

本当にそうでした。それまでは、私は戸田先生にじかに訓練<sup>くんれん</sup>されるというよりは、主人に訓練されていたわけです。

結婚式のときに、戸田先生から言われたことは、「家計簿<sup>かけいぼ</sup>をつけること」と、「朝晩<sup>あさばん</sup>、出勤<sup>しゅっしん</sup>するときと帰宅<sup>きたく</sup>するときは、笑顔<sup>えがお</sup>で送り迎<sup>むか</sup>えしなさい。どんなに不愉快<sup>ふゆかい</sup>なことがあろうと」ということです。

それもこれも、おかげさまで、無理<sup>むり</sup>なく自然<sup>しぜん</sup>にそういう形になりました。

家計簿<sup>かけいぼ</sup>と日記<sup>にっき</sup>は、結婚<sup>いらい</sup>以来、つけてきました。

家計簿は、ちよつとつけていないと、すぐたまりますしね。たまると、もうわから

なくなります。ちゃんとつけていたことが意外な面で役に立つこともございました。

家計簿には日記欄がありますし、来客や電車賃なども記しますから、主人の裁判のときに、そこまで弁護士さんが調べたのです。

たしか昭和三十（1955）年前後の記録ですが、そんな細かいことまで家計簿に残っていましたので、「これで事実が明確に裏づけられました」と弁護士の方が喜ばれたことがあります。

もちろん、裁判では主人の正義が立証されましたが、何が役に立つかわからないものだなと思いました。（笑）

日記のほうは、以前は、家計簿の下に書くようにしておりましたが、その後は「文化手帖」に、近年には、重宝な「五年日記」ができましたので、それにつけていきます。

日記は一日つけないといやになりますから、（笑）旅先でも毎日書くようにしていきます。

五年日記ですから、私がそれを見て「去年の今日は、こうでしたよ」とか、「一昨年（おととし）はこうだったんですよ」なんて主人に伝えると、すごく頭がいいと思うらしいのです。（笑）



結婚以来つけてきた家計簿

[illegible][illegible]

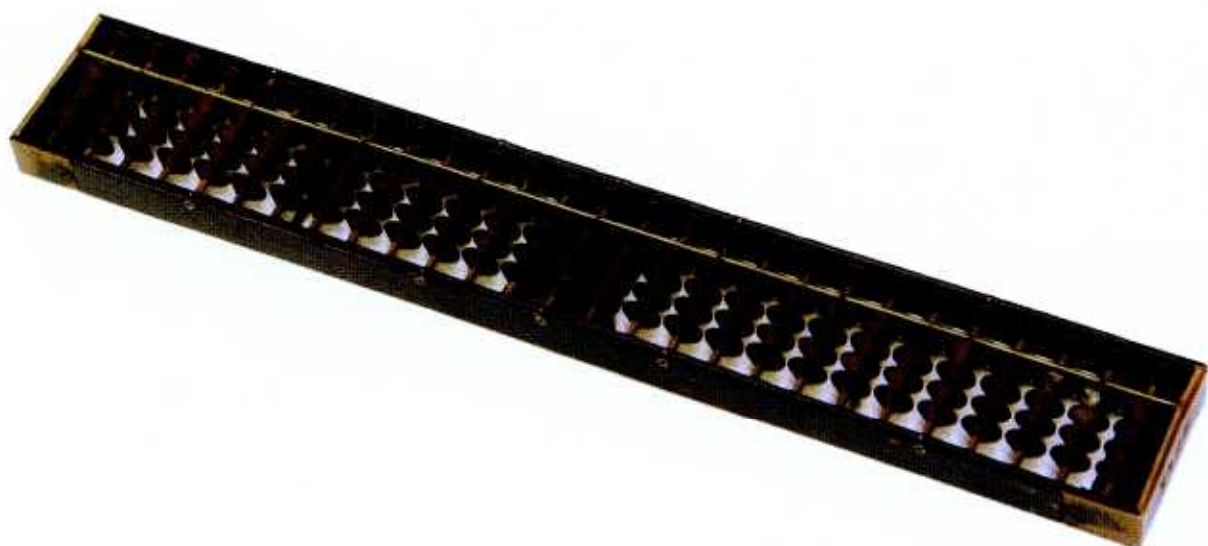


昔は、主人が自分で小さな手帳に必ずス  
ケジュールを書いていました。その後、私  
が記録するようになりましてので、今日は  
どこに行つて、どういう会合があるか、と  
いうことは常に知っていました。

新婚の旅で二人が語り合つたことは――  
生涯、戸田城聖先生に師事すること、創  
価学会から離れないこと、そして、社会の  
ためにプラスになることをすること、人の  
ために尽くすことを厭わない……などであ  
つた。  
（『人間革命』〈聖教新聞社〉より）

「夫婦は一つ、男は足、女は体というたと  
えもある。男は矢で、女は弓だからね。わ  
かつたね」と主人は語りました。「もちろ  
んでございます」と私は答えました。  
皆さん方も、大なり小なり同じではない  
でしょうか。ただ、その初心を貫いてこら  
れたという点では、幸いだつたと思いま  
す。後悔の人生はいやですもの。  
乗り越えるべき山河は、それは幾多もご  
ざいました。しかし、主人は常に全力疾走  
です。私はそれについてゆくばかり  
で、ほとんどあとを振り返るゆとりがなか  
つた、というのが実情です。





結婚当時に使用していた算盤（上）と電気コンロ（下）

お互いに出発点を忘れず、どこまで行つても共通の目標を見失わずに、青春の燃焼というのですか、それを一生涯、持続させていくには、励まし合いが不可欠でしょうね。お互いに人間同士ですから、励ましはどうしても必要です。

——どんな新婚生活でしたか。とても質素なスタートだったと伺っています。

結婚前、主人は大森のアパートに住んでいました。「青葉荘」です。昭和二十四

(1949)年五月から住んでいたようです。二階建てのアパートが三棟ありまして、九十世帯ほどが住まわれていたと聞いております。その一階の一間の小さな部屋でした。

結婚するのに一間というわけにもいかず、目黒の従兄の空いている家を借りて新居としました。

その後、従兄の大阪転勤が決まり、その家を売却したいと言われたので、アパートを探して大森・山王の「秀山荘」に移りました。



池田氏が独身時代に住んでいた「青葉荘」

池田先生のお宅に、あるご夫婦が見えて  
おられました。

そのご夫婦は、何か事業のことでちよつ  
と大変な様子でした。水炊きをごちそうさ  
れながら、池田先生が奥様のほうを向かれ、  
「鍋一つで来たんだよ」と言われました。

そして奥様に「あの鍋あるかい」と尋ね  
られたら、「はい」と答えられて、そのお  
鍋を持ってこられたんです。

もう使い古した凸凹の鍋でした。「大変  
であつたころを忘れてはいけないので、し  
まっている」「大事にしてるんだよ」とお  
っしゃいました。自然に納得がいくかたち  
で、さりげなく、その苦境のご夫婦を激励

され、指導されていたのです。それが非常  
に印象に残っています。

（故・白木文さんが大森のお宅を訪ねたと  
きの話）

母は本当に見えが嫌いで、家財道具は二  
人でそろえていけばいい、という考えでし  
た。いい意味での合理的な思考の女性だっ  
たと思います。

姉が結婚しましたときも、物が無い時代  
でしたから、料理は何もなくて、あのころ  
高級品だったあんパンを、皆さんにおつけ  
しての披露宴でした。





昭和28年7月、静岡・富士宮への車中。左は母・静子さん

また、私の結婚の時期も、姉の結婚ときほど離れていませんでしたので、質素な出発でした。そういうことにお金をかけることは考えられませんでした。

結婚前の私の給与は、勤めたところが銀行ですから、自然に浪費は慎みましたし、

(笑) 残りは母に渡していました。それを、母が全部貯めておいてくれました。

嫁ぐときに母がそれをくれたことと、結婚してから半年くらいたってからでしょうか、厚生年金が戻ってきました。

これが、私が働いた最後のお金だなあと思ったことがあります。

それを定期預金にしてずっと貯めまして、昔の大石寺の奉安殿建立の供養にしました。

主人は、若いときから体が達者ではありませんでした。結婚当時は、やせてヒヨロヒヨロだったのです。常に微熱もありました。

しかも、結婚前に想像していた以上の忙しさで、主人は自分の身をかまうゆとりがありませんでした。

戸田先生は、「大作を頼む」「健康が第一だ。まず健康を」と言われました。

私が主人にしてあげられる最大の務め

は、健康で思おもう存分働ぞんぶんはたらけるよう、陰かげで支ささえることだと思おもいましたし、それが、私の人生のすべてとなりました。

なんといつても食しょくじ事が基本きほんなので、食しょくじ事には、ともかく気をつかいました。

主人は江え戸どっ子こで、実家じつかは海苔屋のりやでした。

た。大好物だいこうぶつは、シヤケ（鮭）さけ、サバ、イカ

の塩辛しおから、昆布こんぶ、海苔などです。それで、一

つのものを続つづけて食べる癖くせがあつて、一週

間、サバならサバだけでも平気へいきなんです。

楽らくといえは楽なのですが、（笑）栄養えいようが偏かたよ

らないように気を配くばりました。

早く家に帰かえつてきて夕食ゆうしょくを食たべるとい

ことは、ほとんどありませんでしたから、あまり食たべたがらない野菜やさいを、夜食に出すなど工夫くふうしましたね。

特にサバの煮につけは、私のがいちばん照てりがよくて、おいしいと言いつてくれました。た。芙蓉蟹フーヨーハイも喜よろこんでくれましたね。

主人は、どんなときも心を集中しゅうちゅうして、全ぜん身全靈しんぜんれいで対話たいわし、講演こうえんをいたします。終了しゅうりようすると非常ひじょうに疲つかれる様子ようすなのです。講演な  
どが終おわったあとは、マッサージをしてあげていました。



——奥様おくさまのほうが、ご主人しゅじんから肩かたをもんでもらうというようなことはなかったのでしょうか。(笑)

そういえば、主人が会長を勇退ゆうたいして間まもないころのことでしょうか(昭和五十四年四月に勇退)。

結婚けっこん以来、初めて主人に肩をもんでもらったことがありました。(笑)

会長を辞任じにんしたあと、会員かいいんの方々かたがたから、それまでも増まして、実に多くのお手紙をいただきました。一通一通拝見はいけんし、お返事へんじを書いたりしていて、肩がこるようになって

たのです。

それで自分で肩をたたいていたら、黙だまつて後ろへきて肩をもんでくれたのです。

結婚三十年にして初めてでした。(笑) そのとき、すごく指先ゆびさきに力ちからがあつて、主人にこんなにも力があつたのかと驚おどろいてしまいました。

若いときから、体が弱いなか、無理むりを重かさねる日々でした。肺はいには癒着ゆちやくがあつて、それこそ、朝起あさきて体調たいちようがいいと言えるような日は、一日とてなかったと思います。そんな主人が肩をもんでくれたものですから、それだけに意外いがいなほど力強ちからづよく感じかんられたのかもしれない。





昭和29年、航空ショーにて

何かの拍子に、母の嫁入り道具だった鏡台の鏡が割れた。居合わせた長兄の喜一と私は、その鏡の破片をそれぞれ貰った。

やがて出征した長兄は、ビルマで戦死した。私は、兄の胸のポケットに入っていたであろう一枚の鏡を、思い出さずにはいられなかった。兄は戦場のひと時、自分の髭面をその鏡の破片に映し、故国の母に想いを馳せて懐かしんだにちがいない。もう一つの破片を分かちもっていた私には、その兄の心情が痛ましくもよくわかる。私は私の鏡を手にして兄を偲んだ。

昭和二十七年、私が結婚したとき、妻は新しい鏡台を運んできた。私の顔は、新し

い鏡に映すことになったが、ある日、妻は破鏡の一片を手にして、不審顔で見ていた。ガラクタの廃品もいいところである。屑籠行きの運命を私は察知すると、はじめて妻に、母や戦死した兄のこと、この鏡の破片にからまる歴史を語った。

妻は、桐の小箱をみつけてきて、鏡をそれにしまつて、無事、今日に至っている。

（池田大作著『私はこう思う』〈毎日新聞社〉「一枚の鏡」より要約）



昭和30年、箱根にて



「一枚の鏡」いちまいのかみという随筆ずいひつに登場とうじようする

鏡は、いまもお手元てもとにあるのでしようか。

この「一枚の鏡」は、いまでも桐きりの小箱こばこに入れて大切に保管ほかんしてあります。

かすり傷きずがいつぱいついた破片はへんで、最初さいしよは、なぜこんなものを、と思いました。何

かわけがあるとは感じかんしましたけれども。主しゅ

人は、戦時中せんじちゆうも、この鏡を大事だいじに守り通し

ました。戦後、青葉莊あおばそうの一人暮ひとりぐらしのとき

も、机つくえの引き出しに入れておいて、大切に

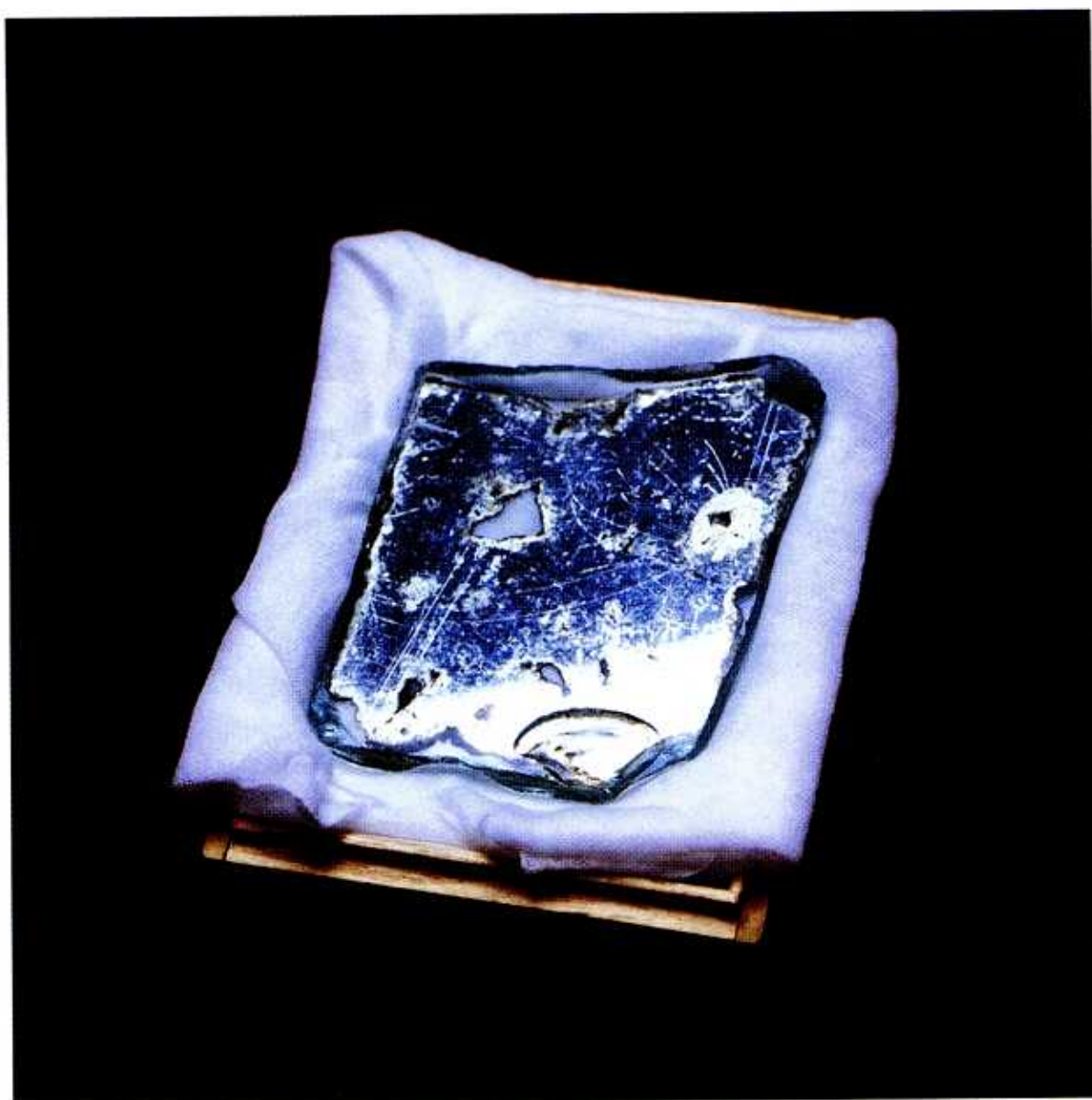
していたといひます。

主人は、この鏡にまつわる歴史れきしを詳しく随筆に書いていますが、私にしてくれた話は、あれほどつまびらかではありませんでした。でも、「この母の鏡が僕ぼくを見守つてくれたんだ」と、むしろさらりと主人が言いましたとき、「あ、この人の苦勞くろうは並なみのものではなかったのでは」と、その瞬間しゅんかんに思ひました。こんな思ひまで主人はしてきたのだな、と。

主人は、戸田先生とだせんせいに師事しじしてからは、実家かに帰ることは、ほとんどなかったといひます。特に父思ひ、母思ひが深い人ですから、とてもつらかったことでしよう。

しかし、結果けっか的に大きな孝行こうこうになればい





「一枚の鏡」

いのだ、という若者らしい覚悟があつたようです。



——随筆には、その鏡を見て、健康の危機を知り、食事に気がつかったとか、あるいはご機嫌な自分の顔を見て、口笛を吹いたり、朝の出勤前に髪を整え、「お母さん、おはよう」と心でつぶやいたと、書かれてあります。

そうして、母上の無言の心づかいを思つたと。

そうですね。それに重ねて、戸田先生が故郷を出発されるとき、母上から持たされたという「一枚のアツシ（はんてん）」の話も引いています。

母上の丹精込めた真心のアツシを、戸田先生は生涯、手放すことはありませんでした。アツシは戦火にも焼けなかったのです。恩師は「このアツシがあるからには、おれは大丈夫だ」と語った、と綴られていますね。

こんなことも主人の心情にはあつたのかと、私もしみじみ感じ入りました。





第3章

楽しきわが家





## 家族を幸せにするヒント

大志を抱く青年と、その青年に拍手を送る乙女。この絶妙のカップルが築いた家庭とは、いったいどんな家庭だったのでしょうか。

この章には、池田家の家庭論・教育論がぎっしり詰まっています。

二十歳で結婚した夫人は、二十一歳で長男の博正さんを、二十二歳で二男の城久さんを、そして二十六歳で三男の尊弘さんを

出産。三人の男の子の母になりました。

それだけではありません。夫が三十二歳で創価学会会長となったとき、二十八歳の若さで会長夫人となったのです。

池田夫妻にとって家庭は、絶えず人の集まる「職場」でもありました。

香峯子夫人は、妻としての決意をこう語っています。

「私が主人にしてあげられる最大の務めは、健康で思う存分働けるよう、陰で支えることだと思いましたし、それが、私の人生のすべてとなりました」

この言葉から、古きよき時代の主婦像を夫人に重ね合わせようとすることもできま



す。しかし、ここでも、ただ夫に従うだけの妻ではありませんでした。

過密スケジュールで不在がちな夫に、子育てを任された妻は、三人の息子に父親の存在をしつかりと植えつけていました。

ある日、家庭訪問した学校の先生に「大きくなら何になりたいの」と聞かれ、三人とも即座に「パパのような人になりたい」と答えています。

このとき香峯子夫人、三十二歳。池田氏は三十六歳でした。

「結局は、『子に親の何を見せて育てるか』ということだと思っています」

夫人の真心から生み出された言葉や行動

や知恵が、要所要所で、家族の絆をしつかりと強めていることがわかります。

池田家には、四つの家訓があります。それは、もちろん家族だけの幸せを求めるものではありませんでした。

どれも結婚当時から貫かれていることばかりです。そして、いまもきつと続けられているはずです。



——新婚時代のお住まいの様子や暮らしぶりなどはいかがでしたか。

昭和二十七年（1952）年の八月、大森の駅から歩いて十分ほどの山王にあった「秀山荘」というアパートに引っ越ししました。赤い屋根の二階建てで、十世帯ほどが住んでいました。

わが家は一階で、四畳半の和室と六畳ほどの小さな洋間の二間で、台所も半畳くらいの小さなものでした。

洗濯場とトイレは共同です。洗濯機などありませんし、お風呂は、もちろん、つい

ていませんでした。

越してからすぐ、勤行を大きな声でしていましたら、「こんなところから、お経が聞こえてきたら、人が住まなくなる」と大い

家さんに注意されました。（笑）板の間には、本棚をおいていました。主人がときどき古本を買ってきます。その古本についていた南京虫が、寝ている間に出

てきたことがあります。（笑）何かかゆいというので、白木の母に聞いて、古本をはじめ、部屋中、消毒したことがありました。（笑）

昭和二十八年（1953）年の一月、この「秀山荘」で初めて迎えた新春でしたし





昭和45年5月、新宿・信濃町にて。母・静子さん（右端）と  
池田氏の母・いちさん

ようか。青年部せいねんぶの同志どうしたちが、この部屋へやにいらしたことがあります。

小さな部屋が、七人もの青年でいっぱいになりました。狭い流しせまながで、すき焼きやの用意よういをして、精一杯せいいつぱいのおもてなしをいたしました。

主人しゅじんが、そのとき、本棚ほんだなにあった土井晩翠どいばんすいの詩集ししゅうを取り出して、「星落秋風五丈原ほしおつしゅうふうごじょうげん」を皆みなさんに朗読ろうどくして聴かせたのです。「三國志さんごくし」の英雄えいゆうである諸葛孔明しょかつこうめいの晩年ばんねんの心情しんじょうを謳うたった詩ですね。

すると、その詩につけられた曲きょくを知っている青年がいて、「詩も曲もすばらしい」

ということになりました。

主人は「ぜひ、戸田先生とだせんせいにお聴かせしたい」と言いまして、その翌日よくじつ、皆で歌ったのです。

戸田先生は涙なみだを流ながされながら、何度も「もう一回！」「もう一回！」と聴いてくださいました。

その後、学会あいしやうかの愛唱歌あいしやうかとして幅広く歌われるようになりました。

いまになって振り返りますと、小さなわが家やが、この「五丈原の歌」の発祥はつしょうの場所ばしょになったわけですから、感慨かんがい深いものがあります。





大森・山王の「秀山荘」。3年近く暮らした1階左側の部屋

——ご長男が誕生されて、若いお父さん、お母さんとなりましたが、当時のこととで印象に残っていることを教えてください。

昭和二十八（1953）年の四月二十八日、長男の博正が誕生しました。

結婚の一年後でした。主人が二十四歳で、私が二十歳の結婚ですから、二十一歳で母親になったわけです。

やはり少し早すぎたかしら。（笑）

ただ、すでに主人は、戸田先生の会社で、営業部長という重責をいただいております。

ました。ともかく体が弱かったので、戸田先生から、「早く身を固めて、健康管理をしてもらったほうが、仕事にも専念できる」とのご指導があつたんです。

長男が生まれたとき、主人は、立宗満七百年を慶祝する行事で、静岡の富士宮におりました。「戸田先生を囲む会」を行ってありました。男子青年部の方々が八百人ほど集まり、盛大な会になったようです。

その記念の四月二十八日に、長男がたま生まれしました。翌日に帰ってきた主人は、それは喜んでおりました。

誕生の報告は、すでに戸田先生のお耳に



昭和29年

入っていて、その会の直後に、お歌を贈<sup>おく</sup>つてくださいました。

扇子<sup>せんす</sup>に、「子<sup>こ</sup>生<sup>う</sup>れて嬉<sup>うれ</sup>し春の月」と毛筆<sup>ひつ</sup>でしたためてありました。「戸田先生<sup>とだせんせい</sup>がそのとき持<sup>も</sup>っておられた扇子<sup>せんす</sup>だ」と、主人<sup>しゅじん</sup>が申<sup>もう</sup>しておりました。

博正<sup>ひろまさ</sup>は生後<sup>せいご</sup>一、二年で、いつの間にか、蓄音機<sup>ちくおんき</sup>を回してレコードをかけることを覚<sup>おぼ</sup>えてしまいました。レコードに傷<sup>きず</sup>がつくといけないと思って、私は机<sup>つくえ</sup>の下に隠<sup>かく</sup>しました。

ところが、子どもの目の高さからは、そこが丸見<sup>まるみ</sup>えだったのですね。(笑) スルス

ルツと机の下に入っていたのには、自分でも笑<sup>わら</sup>ってしまいました。

よく「子どもの目線<sup>めせん</sup>で！」と言われますが、確<sup>たし</sup>かにそのとおりだと思いました。

おおもりのえき 大森駅<sup>おおもりのえき</sup>の近くにあるお店で、主人が「ブラウスを買ってあげる」と言<sup>い</sup>ってくれたことがあります。初<sup>はじ</sup>めてのことでした。(笑) 「これと、これと、これと、これと……」と、一氣<sup>なんまい</sup>に何枚も買<sup>か</sup>ってくれようとするんです。(笑)

私は、もう少し吟味<sup>ぎんみ</sup>したいし、お財布<sup>さいふ</sup>の中身<sup>なかみ</sup>もわかっていますから、(笑) 「一枚でいい」と申しました。





昭和30年から41年まで住んだ大田・小林町の自宅

すると、「ちつともうれしそうにしない

ね」と言うのです。（笑）

家計のやり繰りが大変だったといえ、

あのころがやつぱりいちばんそうでした。

やり繰りの基本は、まず物を粗末にしな

いことです。お米一粒も無駄にはしません

でした。食事の残りも捨てずに、うまく工

夫して献立を考えました。

包装紙なども、きちんと畳んで再利用し

ましたし、ひもも何回も使いました。戦時

中の苦しい体験があるものですから、そう

した節約を心がけました。

昭和二十九（1954）年三月二十日に、

主人は新設の青年室長に就任し、各地を駆

けめぐる日々でした。

二男の城久は、長男とは二つ違いの誕生

でした。昭和三十（1955）年の一月二

十八日生まれです。

長男は生まれたときから大きな赤ちゃん

でしたが、二男は小さく生まれて、自分で

大きくなったという感じでした。（笑）

城久が生まれても、なにせ狭いので寝か

せる場所もなく、ベビーダンスの上に寝か

せたこともありました。（笑）博正も、あ

ちこち動き回るようになっていましたの

で、そのほうが安全だったのですね。



昭和33年 8 月、大田・小林町の自宅の庭にて

ます。

秀山莊しゅうざんそうでは、三年近く過すごしました。二階かいすに住すんでいらした、赤ちゃんあかちゃんのいる方かたとも、洗濯場せんたくばでおしめを洗あらっているときに知り合いました。

数年前、その方からお手紙をいただき、とても懐なつかしく、心うれしく拝見はいけんしました。

私は忘わすれていたんですが、引ひつ越こすときに、おもちゃを差さし上あげたことまで覚おぼえていくくださり、驚おどろきましたね。商社マンしょうしゃまんだったご主人は亡なくなられたと伺うかい、主人と追善ついでんさせていただきました。

一つ一つの出会いを大切にとってお

当時は、母が子守役こもりやくで、しかし、母も会合に出ますから、長男ちやうなんは大森おおもりと矢口渡やぐちのわたしの実家かの間でキャッチボールの球たまみたいに行ったり来たりしていました。

母も私も、長男を一緒いっしょに連れてよく歩きました。よちよち歩きで一生懸命いっしょうけんめいについてきましたね。そういう習慣しゅうかんでしたので、実際じつ、長男は表おもてに出るのが好きすになりました。けがや病氣びょうきなどはあまりしないほうでした。

秀山莊は、子どもが二人になると出なければいけないという決まりきまりがあったので、



二男の出産後、実家近くの小林町の一軒家に移るようになりました（昭和三十年六月）。

この住まいも、最初は六畳二間と四畳半でしたが、手狭になりましたので、のちに、もう一つ六畳を建て増しました。

小林町時代のことは、主人の『若き日の日記』にも登場します。その中で「妻、駅まで出迎えてくれる」という記述がしばしば出てきます。

主人が帰宅するときには、電話をもらうようにして、時間を合わせて蒲田駅まで迎えに行きました。

主人は朝、駅まで自転車で行きますの

で、帰りはその自転車を主人が押したり私が押したりしながら、二人で歩いて帰りました。十五分くらいの距離でした。

主人の疲れ方が、どうしても気になっていたので。

実際、それくらい体調は悪かったので。冬でも寝汗をかいていましたし、朝はボートとしたような赤い顔をしていました。やはり微熱のせいで、これだけは情熱のためではなかったと思います。（笑）

大阪などから夜行で戻ってきて、朝、東京駅に着き、そのまま学会本部へ、ということもよくありました。やはり心配でしたから、子どもも小さかったのですが、一緒

に連れて、主人の着替きかえを持って迎むかえに行きました。

私は、主人しゅじんの健康けんこうを守るまもるために生まれてきたようなものですから、あのころにくらべますと、いまこんなに元気な主人は、信じられなくらいなんです。私には、主人が健康でいてくれることが、何よりの幸しあわせです。

当時、青年室長だった先生のお宅たくに伺うかがったのですが、まあ、先生は質素しつそだなあ、と思いました。青年部せいねんぶの指揮しきをとっておられるときの先生は、いつも悠然ゆうぜんと余裕よゆうのある

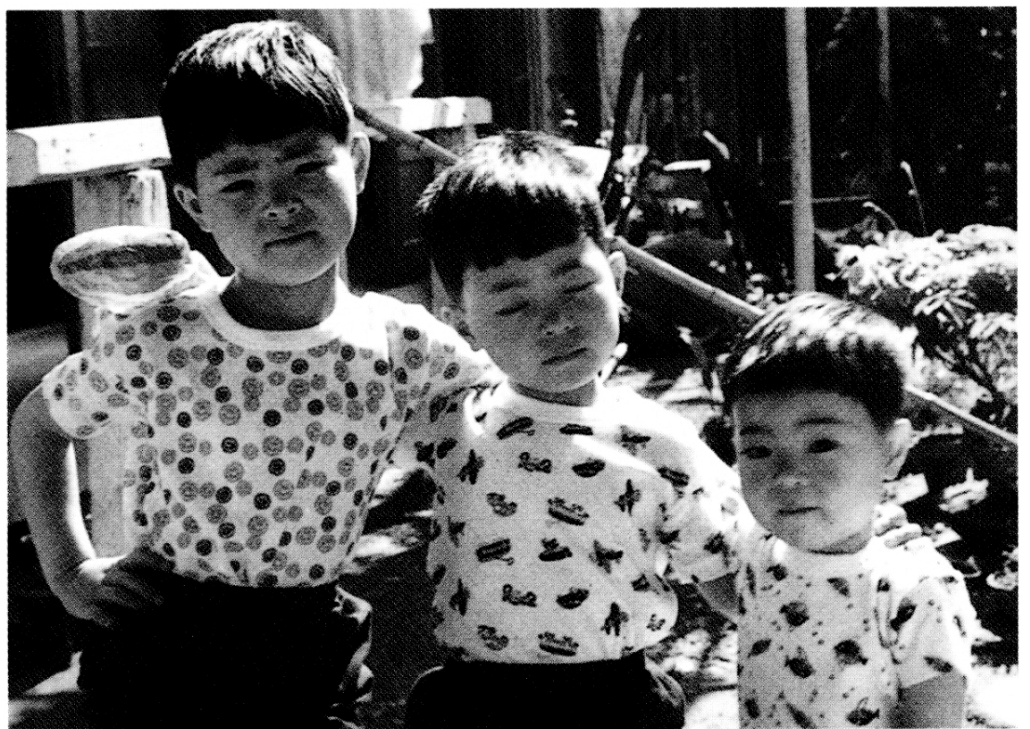
ご様子ようすでしたからね。それが、ご家庭かていでは質素しつそで……というのが第一印象だいいちいんしやうでした。それで奥様おくさまにお目にかかりますと、優しいし魅力的みりよくてきだし、ほんとに素晴すばらしい奥様だなーと。

それから何度なんどか伺うかがわせていただいたて、ある日、奥様が和服わふくを着きておられたのです。「和服なんか着て、いいと思うだろう。でも、いくらだと思う」って、先生がおっしゃるのです。「化繊かせんなんだよ」と言われて、「こういうのが上手じようずなんだよ、この人は。やり繰くりするのが上手なの」って。(笑)奥様もニツコリ笑わらっていらして。

伺うとすぐ、「何か出してあげなさい。



昭和36年3月、城久さん、尊弘さんと東京・向島百花園にて



昭和35年5月、大田・小林町の自宅にて。  
池田氏が第三代会長に就任したころ

おなががすいてるから」って言われるんです。しかし何もないうろなんですね。ちよつと青いトマトを出していただいたんです。

先生は「いつも言ってるじゃないか。青年部ねんぶの人たちが来るんだから」と奥様おくさまを叱しかられたんですけど、奥様が奥に行かれたときに、私に「ないんだよ、なんにも。あるなら出すんだよ、全部ぜんぶ」とおっしゃられて。本当に胸むねの詰つままる思いがしました。

(SGI総合女性部長・秋山栄子そうごうじよせいぶちよう あきやまえいこさんの話)

——三人の息子むすこさんをテーマに、「三巨頭会談きよとうかいだん」という随筆ずいひつも書かれたことがありましたね。(笑)

三男さんなんの尊弘たかひろが生まれたのは、昭和三十三年(1958)年四月十一日です。育ち盛そだ ざかりの男の子が三人になりました。

上の巨頭は、学者がくしゃタイプで長老型ちやうろうがたの「お・に・い・ち・や・ん」でした。中の巨頭は学級第一がっきゅうだいいちの肥満型ひまんがたで、あだ名が相撲すもうの「大鵬たいほう」、下の巨頭はすばしっこいんですけれど、ちよつと甘えん坊あま ぼうで、あだ名が「豆タンクまめ」でした。家の中は、一年中、ドタン、バタン



でした。(笑)

夜には、仲よく三人一緒にお風呂に入り、主人の随筆に「海国男子の面目にかけ」とあるとおり、そこでまた騒ぎますので、風呂桶は二度も底が抜けてしまいました。(笑)

尊弘さんが幼いころ、奥様が会合にお出かけになるとき、泣きだしたことがあります。

あまりあとを追うことはないのですが、そのときは何か違っていました。それで、二日ほどたったあとに、尊ちゃんにお話を

されまして、諭すように、「こうするのと、ああするのでは、どちらがいいの」と、私に聞こえたのは断片的ですが、幼くとも一人の人格に対するような話しかけは、いつもの場合と同じでした。

(近隣の会館の管理者の話)

奥様は、雰囲気のパツと変えられるのがお上手です。

たとえば、先生が帰宅なさる前、子どもさんたちと食事して、そのあと、母子そろって勤行をされますが、その間の母子の雰囲気を実にいいのです。

いろいろと子どもたちの話を聞き、上手に相づちを打たれたり、ほめられたり、とてもなごやかな対話の時間が過ぎていくんです。

そして、先生がお帰りになると、こんどはまた、パツと雰囲気を変えられます。そのときは、もう神経が全部、先生のほうに集中してるといった感じです。そこで先生とお子さまたちのことで話されると、パツとまた母親の雰囲気に戻られる。

私自身、家庭を持って子どもを持ってみますと、本当に、いい勉強になったなあ、といつも思い返されました。それが私にで

きるかは、いまもって宿題ですけれど、努力する楽しみは、奥様から、たくさん学ばせていただきました。

（お手伝いさんの話）

小さいころから、子どもたちは「パパが帰ってきたら、もうママに甘えてはいけない」と思っていたようです。

主人の過密スケジュールは、全部、承知しておりますので、それに合わせてくつろげるように心配りをしてきました。

主人は、お化粧や服装に意外とうるさいんですよ。（笑）髪形など変えると「ちっ



昭和39年 3 月（撮影・池田大作）



昭和39年11月、大田・小林町の自宅にて

とも似合にあわないよ」などと言われました。

(笑) いまの髪形かみがたは戸田先生とだせんせいからもほめていただきましたので、ずっと変かえていませ  
ん。洋服ようふくも「なんだ、それは」と言われた  
ら、その服は、主人しゅじんの留守るすのときにしか着き  
ないようにしてきました。(笑)

私の子どもこどものころと同じように、わが家や  
のいちばん大事だいじなことは朝夕あさゆうの勤行ごんぎょうです。  
主人しゅじんがいるときは全員ぜんいんで、いないときは私  
が中心ちゅうしんで勤行ごんぎょうをしました。

主人しゅじんの勤行ごんぎょうの姿すがたを見ていると、勤行ごんぎょうの大  
切さがわかり、身みにつくんです。

しかし、その点で厳きびしすぎても、子ども

はかえつていやになってしまおうでしょう。  
主人しゅじんは「そこは、やはり母親しんじんの信心しんじんだろう  
ね」と言います。

朝あさの七時には必かならず集あつまってやりました。  
一人来なければ、ピツとベルを鳴らして  
「勤行ごんぎょうですよ」と声をかけました。いつも  
はそれでみんなそろうのですが、朝寝坊あさねぼうし  
て、ときには家族かぞくの勤行ごんぎょうに間まに合あわず出でか  
けなければならぬ場合があります。それ  
を学校がっこうの出がけに注意ちゅういしては、むしろ逆効ぎやくこう  
果かではないでしょうか。やはり朝一番は、  
笑顔えがおで気持ちよく送り出おくしたほうが子ども  
のためだろうと思います。

戸田先生とだせんせいが、朝晩あさばんの送り迎えむかえを「につこ



り笑<sup>わら</sup>つて」とおっしゃいましたが、あの話は、主人<sup>た</sup>に対して<sup>たい</sup>だけではなく、子どもに對しても通じると思います。

特に男<sup>とく</sup>の子は氣むずかしいし、（笑）誇<sup>ほこ</sup>りも高いようですから。あとき、戸田先生は、「どんな不愉快<sup>ふゆかい</sup>なことがあつても、笑顔で」とつけ加<sup>くわ</sup>えられました。

そこで、何かの理由<sup>りゆう</sup>で朝の勤行ができなかった場合は、こう言いました。

「お母さんが、あなたの分もちゃんとやっておきますから」と。幸<sup>さいわ</sup>いなことに、これが成功<sup>せいこう</sup>しました。（笑）

三男<sup>さんなん</sup>の尊弘<sup>たかひろ</sup>が高校生<sup>おがさわら</sup>のときに、小笠原<sup>おがさわら</sup>に

星<sup>かんさつ</sup>の觀察<sup>かんさつ</sup>に行きたいと言いだしたことがあります。

学会<sup>みらいぶ</sup>の未来部<sup>みらいぶ</sup>の会合<sup>かいさ</sup>と重な<sup>かさ</sup>つていたので、そちらに出るべきではと私は言いました。だが、学校の友人<sup>まえまえ</sup>たちとの前々<sup>まへまえ</sup>からの約束<sup>やくそく</sup>だから、どうしても断<sup>ことわ</sup>れない、と言います。

主人<sup>そうだん</sup>に相談<sup>そうだん</sup>したら、「信仰<sup>しんこう</sup>は一生<sup>いっしょう</sup>涯<sup>がい</sup>のものだし、長い目で見れば、今回は小笠原<sup>おがさわら</sup>に行かせてもいいのではないか。大事<sup>だいじ</sup>なのは、信心<sup>しん</sup>し抜<sup>ぬ</sup>くことなのだから」と言われ、私もなにかホツとしたことがあります。

奥様おくさまがよくおっしゃったことは、「子どもこどもに対たいしては、まず母親は真剣しんけんに祈いのることです。会合は教育きょういくの場です。子どもはどんな連つれていらっしゃい」ということでした。

御書講義ごしょこうぎをされている奥様の隣となりで、静しずかにしていたご長男ちやうなんの姿すがたが忘れられませんか。奥様は必ず御本尊ごほんぞんの前で「今日は大事な会合です」と教えられていました。

私が「そんな小さな子どもに話してわかりますか」と聞くと、「い・の・ち・と・い・の・ち・ですから、必ずかならわかります」と言われました。

あるとき、ご長男が「パパに買ってもら

ったんだ」とうれしそうに、おもちゃの刀を振り回まわして遊あそんでいました。そのちよつとしたはずみで奥様の手に当たり、指ゆびから血ちが出ました。

「僕ぼく、おやめなさい。ママ、血が出てしまったわ。そういうことをするために買ってもらったのではないのよ」と諭さとすように言われました。

勤行ごんぎやうも「無理むりに座すわらせてはいけません」と言われ、強きやう制せいはせず自然体しぜんたいで伸び伸びと育そだてていくことを教えていただきました。

こばやしちやうじだい  
(小林町時代、香峯子夫人と一緒に活動かつどうされたご婦人ふじんの話)



昭和44年秋、天体観測に夢中なころの尊弘さん

兄弟きょうだいゲンカなどの場合は、「お兄さんは弟だいじを大事になさい」、そして「弟はお兄さんを尊敬そんけいしなさい」ということで、させてきました。

「三つ子の魂たましい、百まで」といいます。それは、よい意味いみでも悪い意味わるでも、いえることでしょう。

仏法ぶつぽうでは「自分のため」だけではなく「人のために」という心の転換てんかんを教えます。

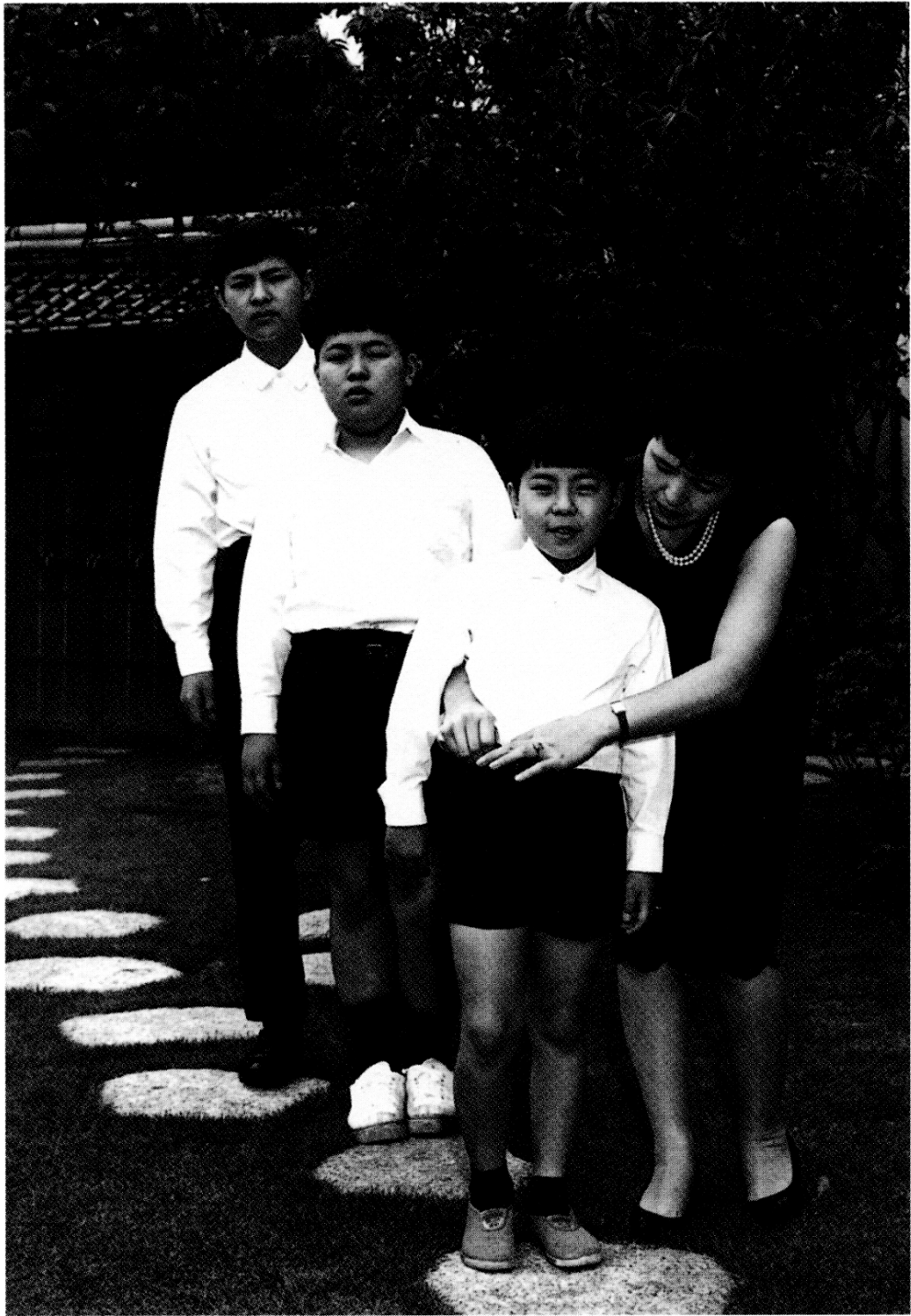
私たちが「人間革命にんげんかくめい」と申もうしますのも、その一つの形であり、働きはたらだと思おもいます。そして、子どもの時期じきには、その方向ほうこうへ早くから促うながし、励はげましていくのに絶好ぜっこうの機会きかい

が、いろいろありますね。

母親かきに限らず、父親も、その機会を生かしていくのが、いちばんいいだろうと思おもいます。でも、ふだん子どもといちばん接せつしているのは母親ですから、兄弟の間で何かとり合いなどが始はじまつても、上手じょうずに諭さとしていけば、子どもは、だんだんわかっていくのではないでしょう

か。それには、母親自身どしんが成長せいちょうしなければならぬと思おもってきました。そうでなければ、本当の意味で子どもも成長できませんから。





昭和41年5月、博正さん（中学1年生）、城久さん  
（小学6年生）、尊弘さん（小学2年生）

お子さんたちは、小さいときでも、物をむやみに壊したり、障子を破るとか、そういう荒れた乱暴はまったくなかったですね。

ある日、おもちゃを持って遊んでいた城久さんに、弟の尊弘さんが「それ、貸してもらいたんだけどね」と言うのです。普通だったらとり合いになると思うんですが、尊弘さんは涙をいっぱいためながら「貸してもらいたい」ってきちんと自分の意思を伝えようとしていました。とても印象的な光景でした。（故・白木文さんの話）



「家訓」は何かありますか。

「家訓」ということではありませんが、

一、人のために、社会のために生きる。

一、すべての人に誠実に。

一、信念は、一生涯、貫き通す。

一、勝つことよりも負けないこと。それが、

すべてに勝っていくことになる。

このことは、常々言ってきました。

「子は親の背を見て育つ」と、よく言われます。

結局は「子に親の何を見せて育てるか」

ということだと思っています。

特に父親の役割の中で大事なものは、子どもに対しては幻滅ではなくて、常に夢を与えるといえますか、希望を持たせていくことだろうと思いますね。この役柄は、言うはやすく、実に大変なことだと思っていますが。(笑)

確かに忙しい主人でしたが、主人は子どもがかわいくてしかたがないんです。子どもの話をすると、厳しい顔も、とたんにニコニコ顔に変わり、いちばん楽しそうにしていました。疲れ切って帰ったときは、私の話に返事もしないほどで、突然、子ども

のことを聞いたりします。

「あら、私の話を聞いてくれなかったのかしら」と思うこともあります。(笑) その場合は、そのままそつとしておきます。会長に就任してからも、時間があるときには、子どもたちと相撲をとったり、金魚をすくったり……。

ただ、子どもの教育は、ほとんど私任せでした。大事なことは相談に乗ってくれましたが、私もなるべく主人を煩わせないようになしてきました。

主人は「子どもの教育は母親に任せただけがいい。子どもは母親からどんなに叱ら

れてもひねくれないが、父親がうるさく言う  
と、必ず成長を曲げてしまう」<sup>かなら せいちょう ま</sup>と言つて  
おりました。これは、戸田先生<sup>とだ せんせい</sup>からの教え  
です。

父親としては、子どもには、絶対<sup>ぜったい</sup>に怒り  
ませんでしたね。(笑)

あくまで自由<sup>じゆう</sup>にさせていました。健康<sup>けんこう</sup>  
で、まっすぐ若竹<sup>わかたけ</sup>のように、社会に貢献<sup>こうけん</sup>で  
きる人に成長させたいと。

単<sup>たん</sup>に出世<sup>しゅつせ</sup>すればよい、というのではない  
ない。何か人のため、社会のために役立<sup>やくだ</sup>つ  
人間になつてほしい——こういう考えのよ  
うでした。

海外や地方へ出かけて、一年に数カ月ほ

どしか家に帰れないこともあります。

あるとき、珍<sup>めづら</sup>しく旅先<sup>たびさき</sup>の主人<sup>しゅじん</sup>から電話が  
かかってきたことがあります。すると子ど  
もたちが、かわりばんこに電話口<sup>でんわぐち</sup>に出て、  
お土産<sup>みやげ</sup>に何を買つてきて、とか何とか、お  
しゃべりをしていました。父親の留守<sup>るす</sup>に慣<sup>な</sup>  
れつこだとはいつても、やっぱり、さびし  
かつたんでしよう。

海外からは、切手をたくさん貼<sup>は</sup>つて、三<sup>さん</sup>  
兄弟<sup>きょうだい</sup>それぞれに、手紙や絵はがきを送<sup>おく</sup>つて  
きてくれました。

子どもたちが、どういう父親として受<sup>う</sup>け  
とっているのか、それはずいぶん心配<sup>しんぱい</sup>しま  
した。





池田氏が海外から子どもたちに送った手紙や絵はがき

ところが、ある日訪ねてくださった学校  
の先生に「大きくなったら何になりたいの」  
と聞かれて、三人とも即座に「パパのよう  
な人になりたい」と答えたので、思わず涙  
ぐみそうになりました。

息子たちが成人してから言ってきたこと  
は、「誠実に」ということでしょうか。な  
んといっても、深く生きてもらいたい、浅  
薄なことに動じずに、深い人生を生きてほ  
しいと願いました。

真面目な道へ心を決めて、深い人に育つ  
てほしいという思いでいましたが、そうい  
うふうになつてくれて感謝しています。

いつも感心し、忘れられないのは、奥様  
が毎朝、三男の尊弘さんと一緒にご自宅の  
表に出てこられたことです。たしか小学校  
二年生のころだったと思います。ランドセ  
ルを背負った小さな尊弘さんが、坂道を下  
りて角を曲がるまで、お互いに手を振って、  
奥様が見送られるのです。

ここまで毎日とはとてもできないと思いま  
した。その何気ない姿が目には焼きついてい  
ます。

子育てには、特にああいう日常のことが  
大事なんだなあ、と思いました。

(昭和四十一年に小林町から信濃町の現在のお宅に越された当時を知る近隣の方の話)

私の場合は何事も、「必要に応じて」です。これはやったほうがいいなと感じますと、自然にそうなります。ただそれだけのことなんです。(笑) むずかしく考えることではないように思います。

わが身に当てはめて考えれば、よくわかることが多いですね。

自分があ有的时候にそうされていたらなあ、という思いはあるはずですし、また事

実、そうされた体験のある方は、やっぱそれを実行されるでしょう。

逆に、自分が傷つけられていやな思いをしたことを、また自分が人にすることは、それはどうかしら、と思います。それでは、進歩も改善もないわけですから。

\* \* \*

随筆「私の家庭」には、次のようなエピソードが紹介されています。

ある夕、久しぶりに、ご主人が早く帰宅された時のことです。

すると、何やら居間の気配がいつもとは違

っていました。そこに、やがて呼ばれて入ると、壁一面に敷布が掛けられていました。三人の子どもが考えつき、父の慰勞と歡迎のために催す8ミリ映画会だったのです。その映画幕替わりに敷布を吊ったひもの端に、小さなリボンが結んでありました。

何か買物の包装に使われたリボンらしいが、にわかつくりをいかにもはじらうような、ほのぼのとした温かさが感じられて可愛らしい。

電気が消されて、スクリーンに子どもたちの傑作が、つぎつぎと映しだされていていっ

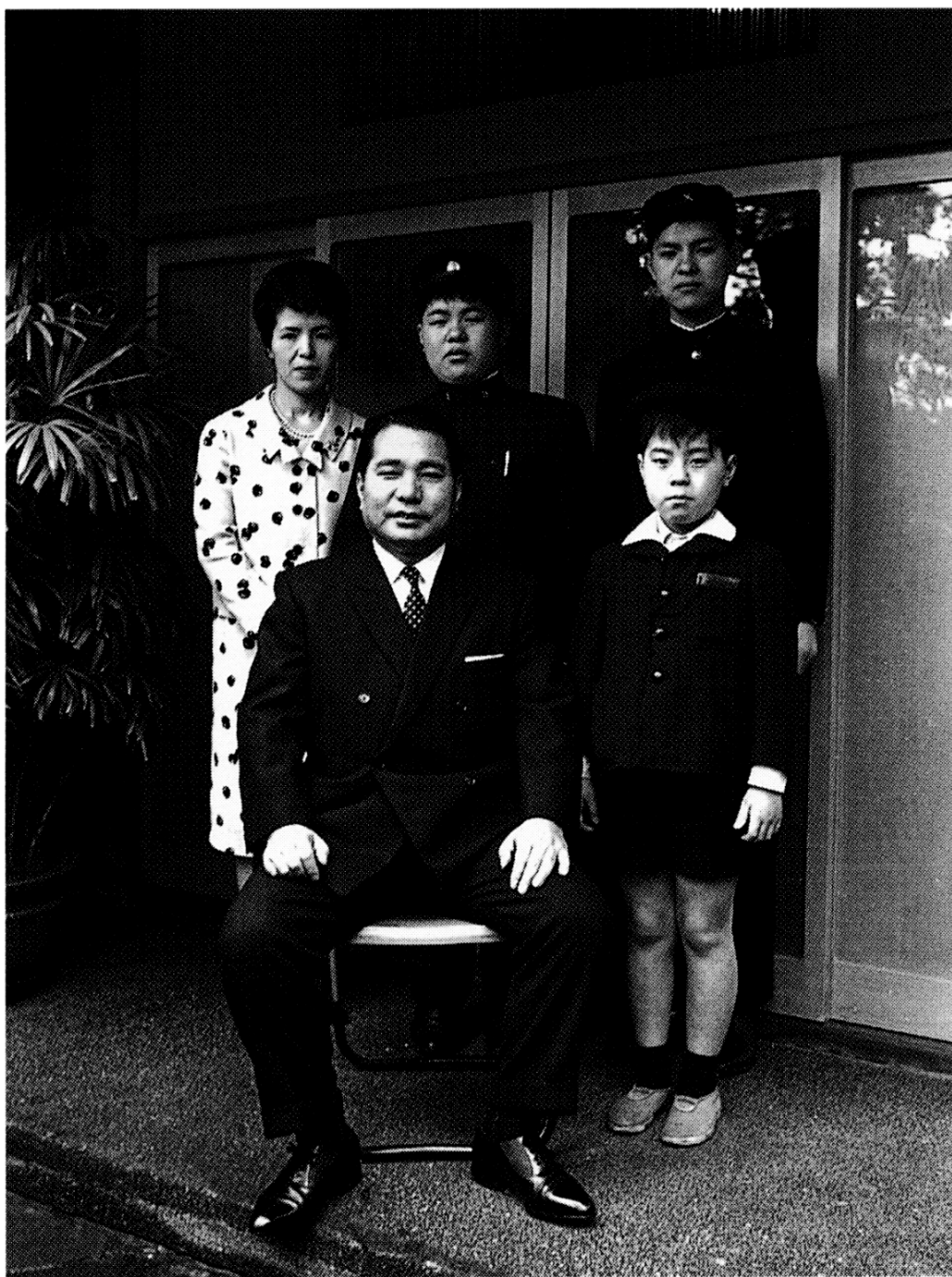
た。そんななかでも、そのリボンの印象は、私の脳裏からなかなか消えなかった。あとで聞いたところ、子どもたちの発案による映画会だったが、リボンだけは、妻の発案であつたという。

この話はこう結ばれます。

たとえ家中が揃う、一家団欒の時間が少なからうと、思い出をつくりだしていける家庭こそ、子どもたちにとっても、何よりの財産であるといえまいか。

そのわずかな時間を、数倍の価値あらしめるものにすることはできと思う。





昭和42年4月、新宿・信濃町の自宅玄関前にて。  
博正さん（中学2年生）、城久さん（中学1年生）、  
尊弘さん（小学3年生）

家庭に、価値創造がなければ、楽しさはないと思う。それは物の豊かさとは、まったく質のちがった、心の豊かさともいうべきものである。

（池田大作著『私の提言』〈産経新聞社〉「私の家庭」より）

主人とも話すのですが、確かに物質のほうは潤沢すぎる時代になりました。

つい、ぜいたくをしますと、ご主人の給料では追いつかなくなり、しかたがないのでカードで借金をする。物が豊かになったためにかえって見えを張り、浪費を重ねな

ければならないような、そのために夫婦の間で雲行きがおかしく、ときには暗くて憂うつになる、そんな話を耳にする時代です。長引く不況の影響で、家計は楽ではありません。

あるいは家計が潤っていたとしても、人のことを考える余裕がなければ、心は貧しいと言わざるをえません。いちばん心配なことは、余裕のない大人の心が子どもたちにどう反映するか、でしょうね。

親も競争している、子も競争している、そして社会の中で、この競争が、物とお金の獲得に傾いたままいけば、子どもの未来



昭和42年10月、東京・外苑のいちょう並木にて

はどうなるのでしょうか。

そのことを、私たち大人は真剣に考えなければいけないと思います。

庭によく、くちなしの花がいっぱい咲きます。なぜか、それにものすごく虫がつかます。

私はいつもパツと戸を開けて、あつ、虫がいた、というだけで、閉めちゃうのですけど。

ある日、奥様がそれをご自分でバケツにいっぱい切ってこられて、花弁も花茎も枝葉もきれいに洗って、家の中のあちらこち

らを、くちなしの花で飾られました。とてもいい香りがしました。そういうふうに、ちよつとしたもので模様替えをされます。

一枚の絵や一つの置物も、こちらのものをあちらへかえたり、花を飾られたり、工夫されるので、先生が帰られたときには、家の中の感じが全然違ったようになっていくわけです。

先生がドアを開けられると、奥様が座っておられて、ほんとにこうキチンと。その奥様のお顔がなんとも言えない笑顔で、自然な振る舞いですけれども。

その笑顔も服装も、もう先生にホツとして、安心して、喜んでいただいてという心



から先生をお迎えむかえているんです。ときどき和服わふくに着替きえたり、夏は浴衣ゆかたを召めされて。その和服がすごくお似合にあいです。それをすぐ先生は「いいねえ」とおっしゃるんです。

(義妹ぎまいの白木美代子しらき みよこさんの話)

毎日、朝起あさきると、主人しゅじんの体調たいちようを案あんじて、顔色を見るといいう生活せいかつでした。

外では神経しんけいを張り詰つめておりましたので、せめて家に帰ってきたときくらいは、ともかく身みも心こころも休やすめてもらいたかったわけです。ですから、少しでもホッとしてもらえるようにと、花を飾かざってみたり、とき

には和服きを着きてみたり、私なりにできる限かぎりの工夫を心がけていました。

私は、息子むすこたちに特別扱とくべつあつかいは絶対ぜったいにさせませんでした。

私たちは庶民しよみんの一人です。息子も庶民の一人でよいのです。

おこづかいも世間並せけんなみです。おこづかいで欲ほしいものが買えないときは、アルバイトをしていました。アルバイトは子どもには、いい経験けいけんになりましたね。

主人はあまり家にはいませんでしたから、実際じっさいにはほとんど、子どもたちが勉強べんきょう

しているところを見てはいません。そのかわり、本や万年筆などを、誕生日の贈り物にしておりました。なるべく、学習に關係のあるものを選んでいたようです。

でも、主人は忙しいので、自分ではお土産を求めてはられません。それで私が前もって買って置いて、押入れなどに隠しておき、主人が帰ってきたときに、「ハイ、お土産よ」と言って渡せるように用意していました。

主人は子どもには甘くて、なんでもすぐ約束しちゃいます。（笑）それを私に言いつけますので、用意して時を見計らって、

それぞれの机の上においておきました。

父親の点数を上げて、（笑）気持ち子どもたちとつながるような工夫は、よくいたしました。

—— お子さまたちの教育や受験については、ご夫妻とも熱心なほうでしたか？

教育ママでは、ありませんでした。（笑）子どもに勉強勉強と言ったこともありませんが、本人のやりたいことをやらせ、自分で自分の道を開いてほしいと思って育ててき



昭和47年11月、新宿・信濃町の自宅にて

ましたから。

勉強<sup>べんきょう</sup>は、長男<sup>ちやうなん</sup>の博正<sup>ひろまさ</sup>は、言われなくても

するほうでした。

二男<sup>じなん</sup>の城久<sup>しろひさ</sup>は、あまりやらなくてもでき

ちやう、という感じ<sup>かん</sup>でしたね。

尊弘<sup>たかひろ</sup>は、学校の勉強よりも、天体観測<sup>てんたいかんそく</sup>に

夢中<sup>むちゆう</sup>でした。(笑) もっぱら銀河系<sup>ぎんがけい</sup>の研究<sup>けんきゆう</sup>

とか趣味<sup>しゆみ</sup>のほうへ発展<sup>はってん</sup>していききました。私

も宿題<sup>しゅくだい</sup>のことで、やきもきはしなかったと

思います。根<sup>ね</sup>が楽<sup>らく</sup>天家<sup>てんか</sup>ですから。(笑)

尊弘には、家庭教師<sup>かていきようし</sup>の学生<sup>がくせい</sup>さんに来てい

ただいたことがあります。苦学<sup>くがく</sup>している学

生<sup>せい</sup>さんを少しでも応援<sup>おうえん</sup>したい、という主人<sup>しゅじん</sup>

の思いもあつたのです。

ただ、家庭教師になる学生さんは困<sup>こま</sup>られ

たと思います。尊弘の機転<sup>きてん</sup>には、私も負<sup>ま</sup>け

ましたけど、あの子は、とにかく、すばし

っこかつたのです。(笑)

教えられるというペースにはまらないよ

う、わざといろいろしますから、学生さん

も遊び<sup>あそ</sup>につきあわされ、馬乗<sup>うまの</sup>りにされて、

ドタン、バタン、そして最後<sup>さいご</sup>に夕飯<sup>ゆうはん</sup>。いつ

も、そんな感じでした。(笑)

それでも、あの子には有用<sup>ゆうよう</sup>なお相手<sup>あいて</sup>だつ

たみたいです。(笑)

子どもが受験期<sup>じゆけんき</sup>を迎<sup>むか</sup>えたとき、私として

は、主人<sup>そくりつ</sup>が創立<sup>そう</sup>した創価<sup>くだいがく</sup>大学に、一人は入





昭和51年7月、新宿・信濃町にて（撮影・池田大作）

ってもらいたいと思っておりました。

長男は、中学から慶應けいおうに行っていたの

で、そのまま慶應大学に進学しんがくしました。

子どもの意思は、最大限に尊重そんちょうしてきま

したが、母親としての気持ちきもちというのは、

私にもそれなりにありました。

二男じなんの城久しろひさは、中学から成蹊せいけい学園に行っ

ていましたが、大学は薬科大学に進みすすたい

と言いでした。それは絶対ぜったいに変えな

い、と言っていました。

最初さいしょに薬大やくだいを受けると聞いたときは、び

つくりしました。

私自身じしんが高等女学校を卒業そつぎょうする前、進学

するかどうかで、かなり悩なやんだときに、

人々の健康けんこうに尽くせればと、薬専やくせんへの志望しぼう

がありましたから。それで、この子も、と

驚おどろきました。

小学生のころから大きい体でした。なん

でも大きな派手はでなことが好きすで、その半

面めん、繊細せんさいな気持ちきもちもあつて、他人たにん思いだつ

たのです。

本人の志望ですから、とにかく本人の意

思をそれなりに尊重して、受けさせてあげ

て、とは思いましたが、私は創価そうか大学に行

ってほしいと祈いのっておりました。

そのあとに、その志望が変わりまして

ね。いよいよ受験じゅけんというときに、創価大学

も受けてみようか、ということになりました。そして、受験で創価大学に行ったら、いいところだからと考え直して、まあ、しぶしぶ決めたみたいな感じで、創価大学に入ってくれました。私としてはうれしい結果でした。

三男の尊弘は、小学校からずっと慶應でしたので、そのまま大学に進学しましたが、小学校の教師になる夢を果たすために、教育学部のある創価大学に入学し直しました。創価大学に通っていた二男の影響もあったのかもしれませんが。

二男が幼いころ、ひどい風邪をひきました。そのとき主人から、どう祈っているのか、と聞かれたんです。「軽くすむように」って答えたら、「絶対にひかないようにと祈るんだよ」と言われました。

祈りの姿勢を教えられました。主人のお題目は、一つもムダがない。

いざというときに「勝つつもりです」というと、「つ・も・り・は・い・け・な・い」「必ず勝つのだ」と言われる。それほど信心に対しては厳格なんです。

とにかく、子どもたちが絶対に無事故で、ということは祈ってまいりました。子どもたちもまた、こういう立場だから事故

を起こしてはいけな<sup>お</sup>いと努力してきたと思<sup>おも</sup>います。

長男<sup>ちやうなん</sup>の博正<sup>ひろまさ</sup>は、車の免許<sup>めんきょ</sup>をとるのも、大学の友だちの中では、いちばん遅<sup>おそ</sup>かったんです。大学四年にはとりましたが、それまでは、信濃町<sup>しなのまち</sup>から三田<sup>みた</sup>の慶應大学<sup>けいおうだいがく</sup>まで自転<sup>じてん</sup>車で通学<sup>しや</sup>していました。

自転車ではかえって危<sup>あぶ</sup>ないからと言うのですけれど、「自転車で事故<sup>じこ</sup>にあつても、こつちがけがをすれ<sup>ば</sup>はすむけど、車で事故を起こした場合は、相手<sup>あいて</sup>にけがをさせる」と言うのです。

「だから、自分は車には乗<sup>の</sup>らないんだ」とも言いました。

私が、「自分がけがをしても、多くの学<sup>が</sup>会員<sup>かいいん</sup>の方たち<sup>かた</sup>に迷惑<sup>めいわく</sup>をかけます。あなたが注意<sup>ちゆういぶか</sup>深く運転<sup>うんてん</sup>すればいいでしょう」と申しましたら、ようやく免許をとる気持<sup>きもち</sup>ちになつたようでした。

そういう意識<sup>いしき</sup>が博正にはありました。しかたないのです、長男に生まれたのは宿命<sup>しよくめい</sup>ですから。(笑)

三男<sup>さんなん</sup>などは、高校を卒業<sup>そつぎよう</sup>するときにとりました。それも自由<sup>じゆう</sup>ですね。(笑)





昭和44年、新宿・信濃町の自宅台所にて

三男の尊弘さんなん たかひろさんが大学生のころのことです。

ある日、かなり深夜しんやになっても帰宅きたくされない。先生が帰宅されても、まだなかなか帰ってこれられない。先生は、大変たいへんご心配しんぱいの様子ようすで、奥様おくさまは、むしろ落ち着おいておられた。(笑)

いよいよになって、先生が「どうしたんだ」と言われたら、奥様は「たぶん海でしょう。まだヨットに乗のっているほうが、繁はん華街かがいで遊あそんでいるよりも、いいじゃありませんか」と。

(お手伝いてつだいさんの話)

あときは、遭難そうなんしたのではないかと心配しんぱいしました。そうした経験けいけんをしながら、子どもたちは、だんだんに自主独立じしゅどくりつをしていきました。



第4章  
幾山河







夫の「開拓」の日々を支える  
妻の役割

昭和三五（一九六〇）年の五月三日。

この日は、夫人にとって「一生忘れられない日」になりました。池田氏が創価学会会長に就任した日のことです。そして、「この日を境に、生活は『私』の部分より『公』の部分の比重が、徐々に重くなっていきました」。

池田氏の仕事は多忙を極め、全世界から

絶え間なく、連絡、報告が入ります。しかも体調はすぐれません。

夫人の暮らしも一変しました。

昭和四十四（一九六九）年冬に、池田氏が旅先で病氣になったことをきっかけに、医師の強い要望を受け、夫人は国内の諸行事に同行するようになりました。

海外へは、すでに昭和三十九（一九六四）年秋の東南アジア、中東、ヨーロッパ歴訪のときから、同行するようになっていました。それも池田氏がアメリカ訪問のおりに体調を崩し、執行部の要請があったからでした。

そんな日々の中でも、夫人は、自分のす



昭和44年3月、新宿・信濃町の自宅にて



べきことを当然とうぜんのようにきちんと果たはして  
いくのです。困難こんなんをものともしない夫人ふじんの  
明るさは、家族かぞくにとってどんなに頼たのもしか  
ったことでしょう。

何なにがあっても心こころがぶれることがない夫人  
でしたが、「そばにいる私も本当に疲れつかれ、  
体調たいちようを崩くずしたことがありました」。昭和五  
十（1975）年の秋のことです。

深夜しんやに疲れつかれて帰宅きたくする夫おつとを休やすませよう  
と、ご自身じしんは寢室しんしつではなく「じゅ・う・たん・を  
敷しいた廊下ろうかで寝ねておりました」という厳しきび  
い毎日まいにちだったのです。しかし、ここでも夫  
人の究極きゆうきよくのプラス思考はっきが発揮はつされました。

自分の病氣びやうきを通して、初めて夫はの体のつ

らさがわかり、いい経験けいけんだったというので  
す。

昭和四十九（1974）年に、初めて中  
国ごくを訪問ほうもんしたときは、その率直そつちよくな発言はつげんで、  
夫をハラハラさせる場面ばめんがありました。

しかし、その夫人の発言で、かえって中  
国かたの方かたとの信賴しんらい関係かんけいが深ふかまっていきます。

勇氣ゆうきある夫人の面目躍如めんぼくやくじよといったところ  
でしょうか。夫のホツとした表情ひようじようが目に浮う  
かぶようです。

トインビー博士はかせご夫妻ふさい、周恩来總理しゅうおんらいそうりご夫  
妻さいをはじめ、海外かいがいの要人ようじんたちとの家族ぐる  
みの交流こうりゅうが、「新しい友情ゆうじようの道」を大きく  
開ひらいていきました。



昭和44年 3 月、新宿・信濃町の自宅にて

『若き日の日記』には、「遂に戸田

先生は会長となられる。待ちに待った、

吾等門下生の願望であつた。生涯の歴史

とならん、この日」と記されています。

当時、二十三歳の青年でした。

昭和二十六（1951）年の一月六日

の日記に、「二晩中、先生宅にて、種々

お手伝い。先生の、なみなみならぬ決意

を、ひしひしと感ずる。先生は、正成の

如く、吾れは、正行の如くなり。……後

継者は、私であることが決まった」と。

師弟の深い絆を感じます。

そういうことは、私には、まだ全然わかりませんでした。

結婚してからも、会長に推戴されて就任

する日まで、そういう内実のことは、私は

知りませんでした。主人は、何も言ひませ

んでしたから。（笑）

ただ、戸田先生の直弟子としての使命感

は、交際するようになってから、私なりに

感じるようになりましたけれども。

だいさんだいかいちょうじゅうにん ほんぶそうかい  
第三代会長就任の本部総会のあと、池田  
せんせい こばやしちよう  
先生の小林町のご自宅へ、夫とおと  
とご挨拶にあいさつ  
うかが  
いました。玄関はきれいに水が打たれてい  
ましたね。打ち水で輝いていたのが印象に  
残っております。

「こんばんは、義一郎です」と夫が言いま  
すと、「上がれよ」と気軽におっしゃって、  
それで上がらせていただいたのです。する  
と、いつもとは雰囲気、全然違ふんです。  
奥様もとても厳肅でいらして……。そこで  
先生が「今日はね、この人、赤飯も炊いて  
くれなかったんだよ」「今日はお葬式です  
と言うんだよ」と語っておられました。

(故・白木文さんの話)

昭和三十五(1960)年の五月三日、  
この日はこれまでの生活でいちばん忘れら  
れない日です。主人が創価学会の会長に就  
任したのです。

それまでの普通の家族の暮らしは、今日  
で終わり。明日からは、主人は公の人とし  
て皆さまのために働くことになる。これ  
は、主人の使命であり、主人でなければで  
きない仕事なのだから、主人が精一杯、仕  
事ができるように、私は努力しようと思い  
ました。どんな嵐にも耐えよう、と心を決  
めました。



とても会長就任を喜ぶ心境には、なれませんでした。「今日はお葬式」というのが、偽らざる心情だったのです。

この日を境に、生活は「私」の部分より「公」の部分の比重が、徐々に重くなっていきました。

昭和四十四（1969）年の暮れでしうか、先生も世にいう厄年だったのですが、体調を崩されて、とても厳しいときがありました。熱もずっとおありでした。

そんな日々でも、奥様はほんとうに泰然自若といえますか、お子さんたちに対する

ときは普段とちつとも変わらないご様子なのです。

すべてをてきばきとなさっていらつしやるお姿を見ていて、とても真似はできないなあ、と思うばかりでした。

（お手伝いさんの話）

昭和四十四（1969）年の夏、主人は、十万人の方が参加する夏季講習会に全力で取り組み、人材の育成に当たっておりまして。その疲れも重なって、この年の冬、関西、中部を激励に回るなかで、風邪をこじらせて肺炎にかかってしまったんです。



創価学会第三代会長就任の日（昭和35年 5 月 3 日）

大阪で、四〇度以上の高熱を出している主人のもとへ、急きよ、私も東京から駆けつけました。

医師からは「絶対安静」と言われていましたが、主人は「幾万の友が待っているから」と、渾身の力を振りしぼって、和歌山、奈良、三重への激励を続けたんです。私も必死でした。

それ以来、医師から、国内の諸行事にも同行するよう、強く言われました。

海外へは、アメリカ訪問のうちに体調を崩したこともあり、執行部からの要請で、

昭和三十九（1964）年秋の東南アジア、中東、ヨーロッパ歴訪のときから、同行す

るようになりました。

特に、行く先々で要人や識者の方々にお会いするなど、対外的な活動も急激に増えましたので、夫婦同伴のほうがふさわしいことが多くなったんです。

ともかく、主人の人生は「開拓」です。

どこへ行きましたも、それも徹底して新しい開拓をしていきます。

どうしても、男性ばかりですと、対話の場も、堅い雰囲気になりがちです。

そこに女性が加わりますと、やはり、その場がなごやかになるのは不思議ですね。

（笑）自然のうちに「ご家族はお元気です

か」とか、「わが家も、三人、息子がおりまして」とか、そういう話にもなりますし、互いの心が、より親しく、ほどけてくる場合も多々ございました。

街頭宣伝車が、大音量で先生や学会の悪口を流し、騒いでいたところのことです。

奥様は、街宣車が信濃町の本部とお宅の周りに来ている真っ最中にも、婦人会館で、皆とお題目を唱えてくださったんです。

「お題目をあげましょう。今日は千遍ね」と自分で数えられながら。

そして、「こんなにあげていることが、

あとでどんなふうになるか楽しみですよね」とおっしゃいました。

暗雲がいつ吹き払われるか、先のことは予想すらつかない時期でした。でも、奥様は「楽しみね」と、どんな場合にも大確信でした。

(婦人部幹部の話)

主人は、学会の最高責任者であり、あらゆる責任を担っておりました。

ですから、「法華経の実践者は悪口罵詈され怨嫉される(怨まれ嫉まれる)」と説かれるとおりに、非難中傷されるのは当然のことと、主人も私も思っておりました。



それにしても、一部の雑誌などが行った

中傷は、目に余るものがありました。

それは、私も憤りを感じました。まった

くの嘘であり、事実無根ですから。

売らんがための人権蹂躪のデマを含めて

「ジャーナリズム」というのでしたら、そ

のせつかくの真価が失われるのではないで

しょうか。

もちろん「言論の自由」は大切と思いま

す。しかし、その「自由」は、人々の幸せ

のためにならなくてはと思います。

主人は、夜遅くに「疲れた」と言っ

てきます。相当に神経が疲れているらし

く、すぐには眠れないようなんです。床に入ってから何か考えている様子なので

す。

二階が寝室だったので、朝早く、私

が起きだすと、すぐに目を覚ましてしま

ますし、夜中に指示を出されてメモをと

なければいけないときもありました。すぐ

に対応できるように、私はじゅうたんを敷

いた廊下に寝ておりました。

そして朝、起きると一気に仕事にかかり

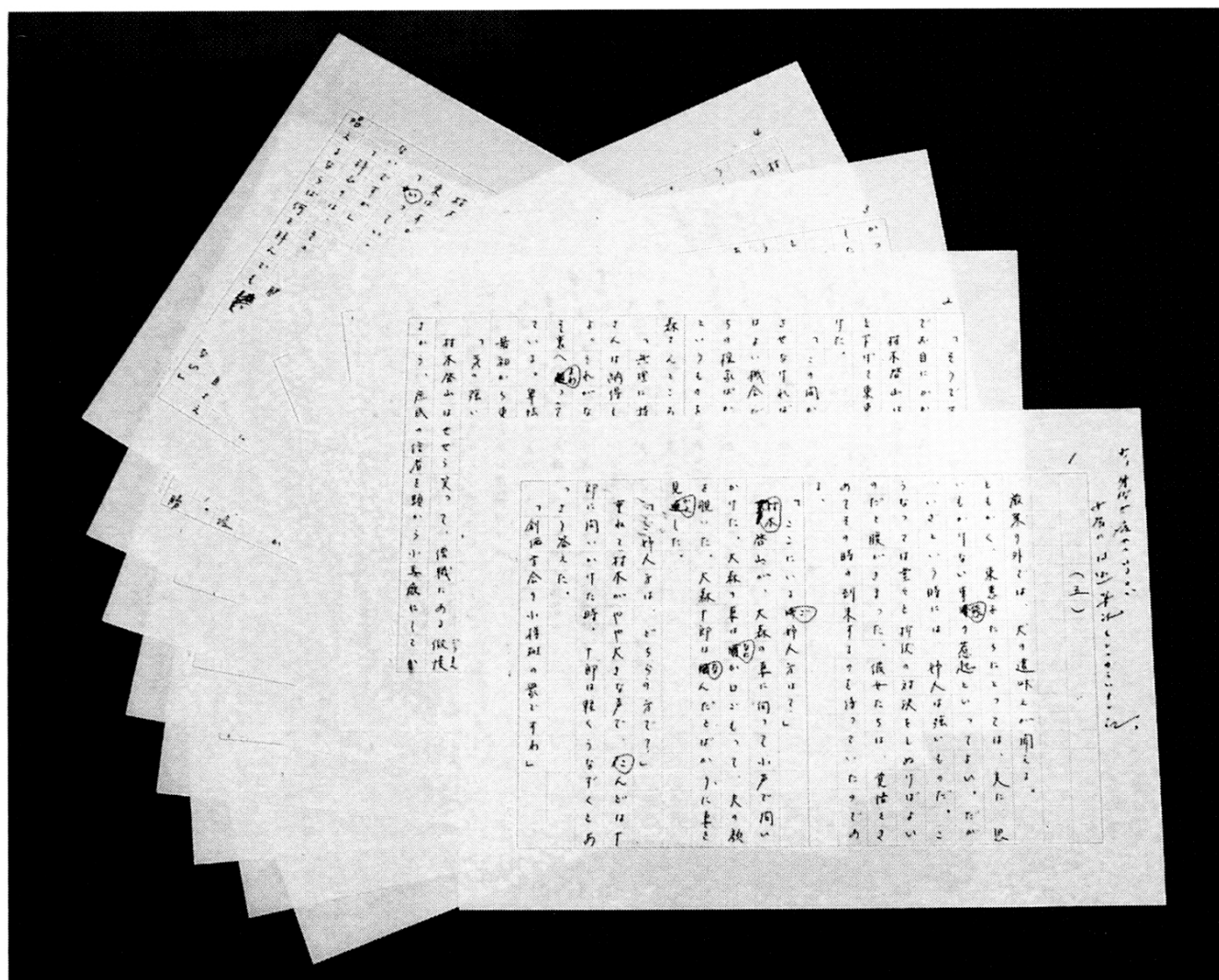
ます。

昭和四十（1965）年の元旦からは、

小説『人間革命』の連載が始まりました。当時、聖教新聞は週三回の発刊でしたが、



昭和48年4月、新宿・信濃町の自宅にて



小説『人間革命』の口述原稿。「少々身体が疲れているので女房に口述筆記をしてもらいました」との記述がある（昭和49年ごろ）

半年後の七月から日刊になりました。連載は、日曜日も休みなく毎日でしたから、寝室の隣の部屋に文机をおいて、朝一番から、すぐに執筆できるように原稿用紙を広げておりました。

私も、いつでも主人の口述を筆記できるように準備をしていたものです。

それでも、体調を崩したときには、さすがに「原稿用紙を見るだけで吐き気がする」と言われ、目の前からとり払ったこともありました。

海外に出たときには、主人が休めるよう、私は長いすで寝るときもありました。



睡眠時間は、どれくらいとれましたか。

だいたい、一日、四、五時間でした。

最近は、よく眠るようにしていますが、長い間、そういう生活でしたね。

海外では、さあホテルに着きました、カバンをほどこきました、それで、ともかく主人を休ませなければなりません。

まず休ませて、その間にご飯を炊いたり。それも、ホテルのバスルーム、つまりお風呂場ですね。そこで持参してきたボン

べを使<sup>つか</sup>って、といった具<sup>ぐ</sup>合<sup>あい</sup>でした。それが私の適<sup>てき</sup>役<sup>やく</sup>でした。(笑)

主人は当時、パン食がだめで、外国へ出るときは、お米のパックを用意<sup>ようい</sup>したり、主人の好<sup>す</sup>きなものを考えて、海<sup>の</sup>苔<sup>り</sup>とか、し<sup>ょ</sup>う<sup>ゆ</sup>とか、お餅<sup>もち</sup>などを持<sup>じ</sup>参<sup>さん</sup>していきまし<sup>た</sup>。昔<sup>むかし</sup>は、日本食など、どこにもありませんでしたから、いつも同じメニューになっ<sup>て</sup>しまっ<sup>て</sup>、今日<sup>きょう</sup>は何を食べてもらおうかと、気をもんだこともありました。(笑)



昭和<sup>しやうわ</sup>四十九(一九七四)年、ご夫<sup>ふさい</sup>妻<sup>さい</sup>は、一月は香港<sup>ホンコン</sup>に、三月から四月にかけて北アメリカと南アメリカ、五月から六月は中国<sup>ちゅうごく</sup>へ、九月にソ連<sup>れん</sup>へ、そして十二月に再び<sup>ふたたび</sup>中国訪問<sup>ほうもん</sup>をされています。そして昭和五十(一九七五)年も、一月がアメリカ、四月が中国、五月がヨーロッパおよびソ連、七月がハワイ訪問で<sup>した</sup>。

主人<sup>しごと</sup>の仕事は、多忙<sup>たぼう</sup>を極<sup>きわ</sup>め、深夜<sup>しんや</sup>にまで及<sup>およ</sup>びました。

全<sup>ぜん</sup>世<sup>せ</sup>界<sup>かい</sup>から絶<sup>た</sup>え間<sup>かん</sup>なく、連<sup>れん</sup>絡<sup>らく</sup>、報<sup>ほう</sup>告<sup>こく</sup>が入<sup>い</sup>



ります。電話での交信、激励なども時間を  
問いません。

体調は、よくありませんでした。寝汗も  
かいておりましたし。そうした状態で、戦  
わなくてはならない日が続きました。

そばにいる私も本当に疲れ、肝臓を患っ  
て、体調を崩したことがありました。昭和

五十（1975）年の秋のことです。

しかし、それも全部、皆さまの励ましで  
乗り越えることができました。

私は、もともと丈夫にできていて、一晩、  
二晩は寝なくても平気でした。

それまで、病気というものをしたことが  
なかったので、主人が熱を出して苦しんで

いるときも、わかっているようで、本当は  
わかっていなかったのですね。

やはり自分が病気をしてみても、体の具合  
が悪いつきのつらさというものが、初めて  
わかりました。

その意味では、いい経験をしたと思っ  
ています。

実を言いますと、この昭和五十（197  
5）年の当時は、何しろ主人が大変なとき  
でした。創価学会全体も大きな試練に立ち  
向かっていましたから、私は「主人の病氣  
をかわりたい」と祈っていたのです。そう  
したら、本当に病氣になってしまいました  
た。

主人に「君はばかだよ。君が病気になつたのでは、みんなが困る。そこまで考えなかつたのか」と叱られました。あのときは、それで自分が病気になつても、まだ動ける、（笑）と思つていたんです。

あのときを境に、子どもたちも、自分たちのことは自分たちでやるように役割分担を決めて、一家みんなで生活を切りかえました。

それから、多少、自分を大切にしようになりました。

それまで、自分のことはいっさい祈らなかつたのですが、自分も含めて家族全員、そして全同志の健康、無事故を一段と真剣

に祈るようになりました。

初めて中国へ行つた時のことです。あちらでは、必ず円卓の形で、皆さん方と懇談の席を持ちます。全員が一人ひとり発言しなければならぬような、やりとりになるんです。

そのような場合も、私は主人と一緒にいうことで、発言しないでいました。そうしますと、ずるいと言われまして、（笑）「私など、お手伝いさんがついてきているようなものですから」と申し上げ、一同爆笑となつたこともあります。（笑）

それでも、どうしても発言をと求められ

ましたので、一言、率直な感想を語らせて  
いただきました。

「日本では、共産主義は怖いといわれてき  
ました。ですから、貴国にも怖い国という  
イメージがありました。でも、お話をして  
みると、愛情のあふれた人間的なお国であ  
ることがよくわかりました」

隣の主人にしてみれば、何を言いだすの  
かと気が気でなかったと思います。(笑)

ただ、中国の方々は、かえって「正直に  
本当のことを言う」(笑)と心を開いてく  
ださり、信頼していただけたようです。

北京から、西安、鄭州、南京、上海、杭

州、広州へ案内してくださったのは、いま  
は亡き中日友好協会の孫平化先生(当時、  
秘書長)でした。東京工業大学に留学され  
た日本通です。

その道中、「日本の食べ物で、好きな  
ものはありますか」と伺うと、「納豆」と  
「いわしの丸干し」と「大学いも」とのこ  
と。

半年後、再び訪中したとき、その三品を  
お土産に持参して、大変に喜んでいただい  
た思い出があります。

そういうことは、私の仕事と思っ  
てきました。



日記をつけていた「文化手帖」

| ● 月間計画メモ |         |                                         |       | 1987 |                      |                                 |              |
|----------|---------|-----------------------------------------|-------|------|----------------------|---------------------------------|--------------|
| 2月計画     | 120,000 |                                         |       | 15日  |                      |                                 | 1,000        |
| 1日       |         | [ 成田発 4:50<br>ロスター F:30. 入居視察 ]         | 9,000 | 16日  | 良く眠った。<br>象威とバスに。    | 研11分。会。                         | 2,000        |
| 2日       |         | 池田清重印行会<br>分枝会見                         | 3,000 | 17日  |                      | マヤミ → パナマ<br>旅客車駅見              | 3,000        |
| 3日       |         | 分枝会見。パナマ                                | 3,000 | 18日  |                      | 文化会作印行会                         | 11,000       |
| 4日       |         | 1-マヤミンス氏、会見<br>地人マヤミンス氏                 | 3,000 | 19日  |                      | 大分県会見。<br>パナマ市役所                | 2,000        |
| 5日       |         | 4番合同マヤミンス<br>(マヤミンス)                    | 5,000 | 20日  | 野原マヤミンス<br>心配する。     | パナマ → マヤミ                       | 1,000        |
| 6日       |         | マヤミンス全支店マヤミンス<br>ロス。14:30発 マヤミンス 20:30着 | 1,000 | 21日  | マヤミンスマヤミンス<br>TELあり。 | マヤミンス最後。マヤミンス<br>野外会。           | 4,000        |
| 7日       |         | マヤミンスマヤミンス<br>分枝会                       | 2,000 | 22日  | 家へマヤミンス              | マヤミンス → ロス                      | T.ロスター 3,000 |
| 8日       |         | 40分国目。ドミニカ初訪問                           | 2,000 | 23日  | 寒い。                  | 研11分。会 (マヤミンス)<br>パナママヤミンス      | 2,000        |
| 9日       |         | 大分県。マヤミンス<br>分枝会見。マヤミンス                 | 2,000 | 24日  |                      | ロスマヤミンス。マヤミンス。<br>マヤミンス         | 5,000        |
| 10日      |         | マヤミンス。マヤミンス。59分<br>マヤミンス。マヤミンス。         | 3,000 | 25日  |                      | 1-マヤミンスマヤミンス。<br>分枝会見           | 3,000        |
| 11日      |         | マヤミンス。マヤミンス。59分<br>マヤミンス。マヤミンス。         | 2,000 | 26日  |                      | マヤミンス。マヤミンス。59分<br>マヤミンス。マヤミンス。 | 1,000        |
| 12日      |         | マヤミンス。マヤミンス。59分<br>マヤミンス。マヤミンス。         | 1,000 | 27日  |                      |                                 | 機中。          |
| 13日      |         | マヤミンス。マヤミンス。59分<br>マヤミンス。マヤミンス。         | 3,000 | 28日  |                      |                                 | 2,000        |
| 14日      |         | マヤミンス。マヤミンス。59分<br>マヤミンス。マヤミンス。         | 4,000 | 29日  |                      |                                 |              |
|          |         |                                         |       | 30日  |                      |                                 | 69,000       |

昭和62年2月のスケジュール表。アメリカ、ドミニカなどを訪問



以来、三十星霜。中国訪問は十度で  
すね。実に末永い友好の道を開いてこ  
れました。海外の交友のあった方々で、  
特に印象深い方はいらっしゃいますか。

中国では、やはり周恩来総理と夫人の鄧  
穎超先生です。

二度目の訪中の最終日でした（昭和四十  
九（1974）年十二月五日）。答礼の宴  
も終わったあと、北京の夜道を車で案内さ  
れました。

周総理が、入院しておられた三〇五病院  
で私たちを待っていてくださったのです。

会見は夜九時五十分からでした。総理のご  
体調を案じて、会見は少人数にし、私のみ  
が同席させていただきました。記者の方も  
おりませんので、私が必死でメモをとった  
のです。

周総理は厳然としていらして、闘病のご  
様子など、少しも見せられませんでした。  
鄧先生は、周総理とご自身に重ね合わせ  
て、私たち夫婦のことを見守ってくださいつ  
ているようでした。

鄧先生との出会いは、八回を数えます。  
お会いするたびに、ご夫妻の歩んでこられ  
たご苦労と、深く心が通い合い、響き合う  
ものがございました。



昭和49年12月、周恩来総理と会見。北京の305病院にて



昭和55年4月、北京の鄧穎超女史の自宅にて



北京ペキンの中南海ちゅうなんかいのご自宅じたくにも、たびたびお招きまねいただきました。中庭なかにわには、海棠かいどうやライラックの花が咲き香かおっておりまし

た。「恩来同志おんらいどうしも花が好きでした。ゆつくり観かん賞しょうする時間はありませんでしたが、少しでも心が休やすまるように、工夫くふうして、いろいろな花を植うえたのです」と、私に微笑ほほえんでおられました。

鄧穎超先生とうえいちようせんせいを日本にお迎むかえしたのは、昭和五十四しょうわ（1979）年の春です。

四月の十二日に、主人しゅじんとともに迎賓館げいひんかんへご挨拶あいさつに伺うかがいました。

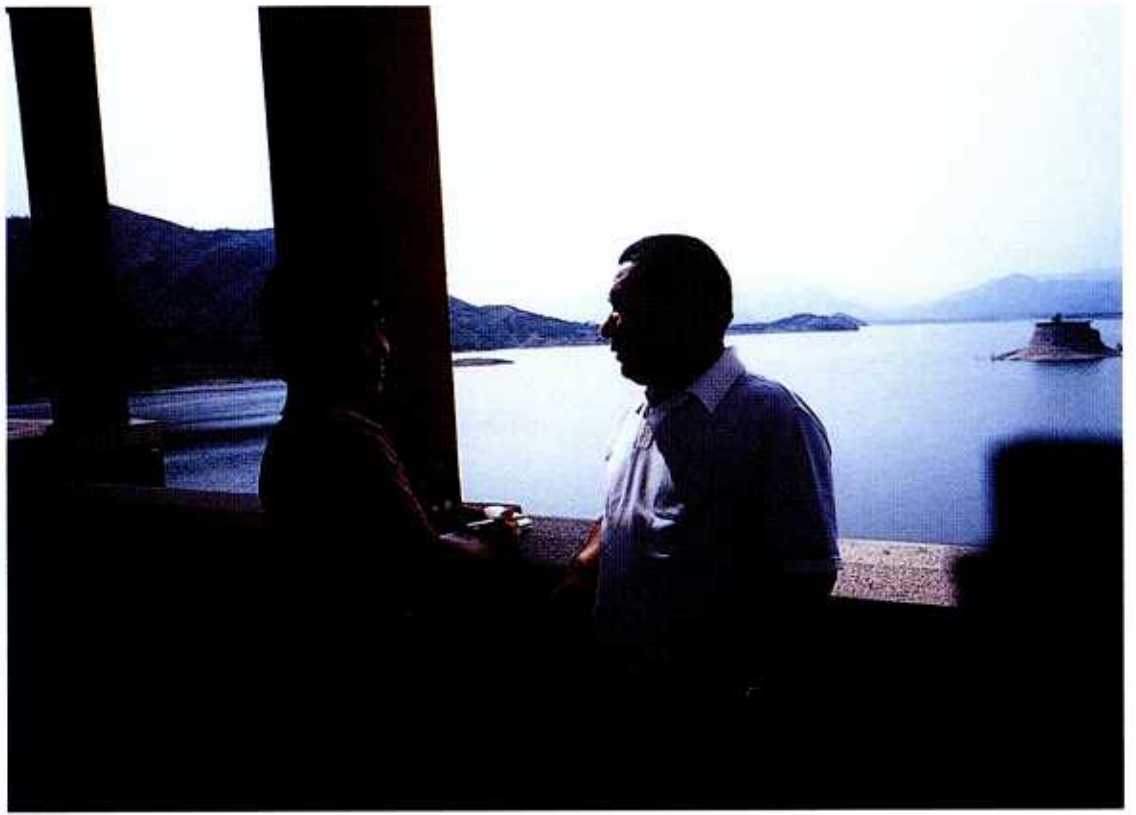
会見会場の「朝日あさひの間ま」には、私どもが

先にお届けした八重桜やえざくらが飾かざられておりまし

た。鄧先生は「私たちは家族かぞくです」と言われ、「時間が許ゆるすならば、池田先生いけだせんせいのご自宅や創価大学そうかだいがくを訪問ほうもんしたい」とも語っておられました。創価大学に記念植樹きねんしょくじゆした「周桜しゅうざくら」と「周夫婦桜しゅうめおとさくら」の写真しやしんをお持ちすると、それはそれ喜よろこばれました。

帰り際きざわ、主人が第三代会長だいさんだいかいちようを勇退ゆうたいする意向こうをお伝つたえますと、「いきません！ 人じん民の支持しじのある限り、やめてはいけません」と、きっぱりとおっしゃいました。

最後さいごにお目にかかったのは、平成二（1990）年の五月二十八日でした。ご自宅



昭和49年6月、第一次訪中の  
際、北京・十三陵ダム（上）、  
天安門前（下）





に伺<sup>うかが</sup>って、おいとまを告<sup>つ</sup>げると、「友情<sup>ゆうじょう</sup>の  
形<sup>かた</sup>見<sup>み</sup>として」と言われ、周<sup>しゅう</sup>総<sup>そう</sup>理<sup>り</sup>愛<sup>あい</sup>用<sup>よう</sup>の象<sup>ぞう</sup>牙<sup>げ</sup>  
のペーパーナイフと、鄧<sup>とう</sup>先<sup>せん</sup>生<sup>せい</sup>愛<sup>あい</sup>用<sup>よう</sup>の玉<sup>ぎよ</sup>製<sup>せい</sup>の  
筆<sup>ふで</sup>立<sup>た</sup>てを<sup>お</sup>贈<sup>おく</sup>り<sup>く</sup>だ<sup>さ</sup>つた<sup>た</sup>の<sup>で</sup>す。

ご高<sup>こう</sup>齡<sup>れい</sup>で、足<sup>ふ</sup>が不<sup>ふ</sup>自<sup>じ</sup>由<sup>ゆう</sup>であ<sup>ら</sup>れ<sup>た</sup>に<sup>も</sup>か  
かわ<sup>ら</sup>ず、鄧<sup>ひ</sup>先<sup>しよ</sup>生<sup>かた</sup>は秘<sup>ひ</sup>書<sup>しよ</sup>の<sup>かた</sup>方<sup>だ</sup>に<sup>だ</sup>抱<sup>だ</sup>き<sup>か</sup>か<sup>え</sup>  
られ<sup>な</sup>が<sup>ら</sup>、高<sup>しき</sup>い<sup>い</sup>敷<sup>い</sup>居<sup>い</sup>を<sup>ま</sup>た<sup>い</sup>で<sup>げん</sup>玄<sup>かん</sup>関<sup>かん</sup>ま  
で、お見<sup>み</sup>送<sup>おく</sup>り<sup>く</sup>だ<sup>さ</sup>い<sup>ま</sup>し<sup>た</sup>。

私<sup>わ</sup>た<sup>ち</sup>も車<sup>くるま</sup>を降<sup>お</sup>り<sup>て</sup>、も<sup>う</sup>一<sup>いち</sup>度<sup>ど</sup>、ご挨<sup>あい</sup>拶<sup>さつ</sup>  
を<sup>か</sup>交<sup>か</sup>わ<sup>し</sup>ま<sup>し</sup>た。見<sup>み</sup>え<sup>な</sup>く<sup>な</sup>る<sup>ま</sup>で<sup>て</sup>手<sup>て</sup>を<sup>ふ</sup>振<sup>ふ</sup>  
つ<sup>て</sup>く<sup>だ</sup>さ<sup>つ</sup>て<sup>い</sup>た、あ<sup>の</sup>お<sup>さ</sup>姿<sup>すがた</sup>は眼<sup>まなこ</sup>か<sup>ら</sup>離<sup>はな</sup>  
れ<sup>ま</sup>せ<sup>ん</sup>。

鄧<sup>おん</sup>先<sup>らい</sup>生<sup>どう</sup>が「若<sup>わか</sup>い<sup>い</sup>日<sup>ひ</sup>、恩<sup>おん</sup>来<sup>らい</sup>同<sup>どう</sup>志<sup>し</sup>と二<sup>に</sup>人<sup>にん</sup>で約<sup>やく</sup>  
束<sup>そく</sup>した<sup>こ</sup>とが<sup>あ</sup>り<sup>ま</sup>す。そ<sup>れ</sup>は、人<sup>じん</sup>民<sup>みん</sup>の<sup>た</sup>

め<sup>に</sup>奉<sup>ほう</sup>仕<sup>し</sup>す<sup>る</sup>と<sup>い</sup>う<sup>こ</sup>と<sup>で</sup>す。死<sup>し</sup>ん<sup>で</sup>も<sup>こ</sup>  
の<sup>こ</sup>と<sup>は</sup>同<sup>どう</sup>じ<sup>で</sup>す」と言<sup>い</sup>わ<sup>れ</sup>て<sup>い</sup>た<sup>こ</sup>と  
も、思<sup>おも</sup>い<sup>出</sup>さ<sup>れ</sup>ま<sup>す</sup>。

ロシ<sup>ろ</sup>ア<sup>あ</sup>で<sup>は</sup>、昭<sup>しょう</sup>和<sup>わ</sup>四<sup>し</sup>十<sup>じゅう</sup>九<sup>く</sup>（1974）年<sup>ねん</sup>  
の九<sup>く</sup>月<sup>げつ</sup>、最<sup>さい</sup>初<sup>しよ</sup>の<sup>ほう</sup>訪<sup>もん</sup>問<sup>もん</sup>の<sup>とき</sup>、歡<sup>かん</sup>迎<sup>げい</sup>し<sup>て</sup>く<sup>だ</sup>  
さ<sup>つ</sup>た<sup>の</sup>が、モ<sup>も</sup>ス<sup>す</sup>ク<sup>く</sup>ワ<sup>わ</sup>大<sup>だい</sup>学<sup>がく</sup>の<sup>ほ</sup>フ<sup>ふ</sup>ロ<sup>ろ</sup>フ<sup>ふ</sup>総<sup>そう</sup>長<sup>ちやう</sup>  
と夫<sup>ふ</sup>人<sup>じん</sup>の<sup>は</sup>エ<sup>え</sup>レ<sup>れ</sup>ー<sup>な</sup>博<sup>は</sup>士<sup>せ</sup>で<sup>し</sup>た。

当<sup>た</sup>時<sup>し</sup>は冷<sup>れい</sup>戦<sup>せん</sup>の<sup>ま</sup>真<sup>ま</sup>つ<sup>た</sup>だ<sup>だ</sup>中<sup>ちゆう</sup>で<sup>し</sup>た<sup>し</sup>、中<sup>ちゆう</sup>国<sup>ごく</sup>  
に<sup>つづ</sup>続<sup>つづ</sup>い<sup>て</sup>ソ<sup>そ</sup>連<sup>れん</sup>へ<sup>い</sup>く<sup>こ</sup>と<sup>に</sup>、内<sup>ない</sup>外<sup>がい</sup>か<sup>ら</sup>多<sup>た</sup>く  
の<sup>ひ</sup>批<sup>はん</sup>判<sup>はん</sup>や<sup>わる</sup>悪<sup>くち</sup>口<sup>くち</sup>が<sup>あ</sup>つ<sup>た</sup>こ<sup>と</sup>は<sup>た</sup>確<sup>た</sup>か<sup>で</sup>す。

主<sup>しゅ</sup>人<sup>じん</sup>は「な<sup>ぜ</sup>、宗<sup>しゅう</sup>教<sup>きやう</sup>否<sup>ひ</sup>定<sup>てい</sup>の<sup>こ</sup>国<sup>こく</sup>へ<sup>い</sup>く<sup>の</sup>  
か？」と<sup>と</sup>問<sup>と</sup>わ<sup>れ</sup>て、「そ<sup>こ</sup>に<sup>に</sup>人<sup>にん</sup>間<sup>かん</sup>が<sup>い</sup>る<sup>か</sup>  
ら<sup>で</sup>す」と<sup>と</sup>答<sup>こた</sup>え<sup>て</sup>お<sup>り</sup>ま<sup>し</sup>た。





昭和50年5月、モスクワ。池田氏の後ろにホフロフ総長、  
右端にエレーナ夫人



平成4年12月、三重にて。子息のアレクセイさんご一家と



本当に、そのとおりでした。

なかでも、ホフロフ総長そうちょうご夫妻ふさいは、素晴すばらしい人間性にんげんせいと知性ちせいの微笑ほほえみで迎むかえてくだ  
さいました。

「鉄てつのカーテン」に固かたく閉とざされていた国  
に「これほど立派りっぱな人格者じんかくしゃがおられるの  
か」と、それまでのソ連れんの印象いんしょうは一変いっぺんしま  
した。総長そうちょうご夫妻ふさいの周りまわの方々かたがたも、みな温あたた  
かで、新しい友情ゆうじょうの道を大きく開ひらくことが  
できたのです。

ご夫妻も、私たちとの出会いを通して  
「二千万の友人をつくることができた」と  
喜よろこんでくださっております。

そういえば、クレムリン宮殿きやうでんのすぐそば  
にあった宿泊先しゆくはくさきのホテルには、各階かくかいごとに  
カギを預あずかる当番の方がついていました。

私たちのフロアを担当たんとうされる中年のご婦  
人に、すれ違ちがうたびに声をかけて、挨拶あいさつを  
心がけておりましたら、最初さいしよは戸惑とまどわれた  
ようですが、やがてニコニコと笑顔えがおを返かえし  
てくれるようになりました。

お話を伺うかうと、この方も、ご主人しゅじんを戦争せんそう  
で亡なくされておりました。

平和へいを願ねがう「女性の心じよせい」「母の祈りいの」に、  
国境こくきやうはないと改あらためて痛感つうかんしたものです。

ホフロフ総長そうちょうご夫妻は、たびたび来日きにちさ

れ、創価<sup>そうかがくえんせい</sup>学園生や創価大学生とも、深い交<sup>ふかこう</sup>流<sup>りゅう</sup>の歴史<sup>れきし</sup>を刻<sup>きざ</sup>んでくださいました。

しかし、残念<sup>ざんねん</sup>なことに、総長は登山<sup>とざんちゅう</sup>中の不慮<sup>ふりよ</sup>の事故<sup>じこ</sup>のため、五十一歳の若<sup>わか</sup>さで急逝<sup>きゅうせい</sup>されたのです。

その後、モスクワ市内の総長の墓<sup>ぼ</sup>前に献<sup>けん</sup>花<sup>か</sup>し、ご自宅<sup>じたく</sup>に伺<sup>うかが</sup>ったのは、昭和五十六<sup>しやうわ</sup>（1981）年の五月のことです。

主人は、エレーナ夫人<sup>ふじん</sup>と、まだ学生だった二人のご子息<sup>しそく</sup>を、全魂<sup>ぜんこん</sup>込めて励<sup>はげ</sup>ましておりました。「私がお父さんがわりになりましたす」とも申<sup>もう</sup>してありましたね。

「ご子息が、総長<sup>そうちやう</sup>の志<sup>し</sup>を受け継<sup>つ</sup>いで、立派

な大学<sup>だいがく</sup>者<sup>しや</sup>になる勝利<sup>しやうり</sup>の日が必ず来<sup>か</sup>ます」と、未来<sup>みらい</sup>への希望<sup>きぼう</sup>を贈<sup>おく</sup>ったのです。

その後も、主人は、ご一家との交友<sup>こうゆう</sup>を大切にしておりました。平成四<sup>へいせい</sup>（1992）年には、ご長男<sup>ちやうなん</sup>のアレクセイさんご一家が、三重<sup>みえ</sup>に滞在<sup>たいざい</sup>中の私<sup>わたくし</sup>たちのところまで、わざわざ訪<sup>たず</sup>ねてきてくださいました。

ご長男は、異例<sup>いれい</sup>の若<sup>わか</sup>さでモスクワ大学の教授<sup>きやうじゆ</sup>になられ、総長夫人も、モスクワ大学で元氣に教鞭<sup>きやうべん</sup>をとられているとのお話に、主人は「言<sup>い</sup>っていたとおりになったね」と本当に喜んでおりました。

いまでもモスクワ大学と創価大学との交



流は大きく広がっております。ホフロフ総長（ちよう）のあとを継つがれたログノフ総長とも、さらに現在のサドーヴニチイ総長とも、主人（しゅじん）は対談集を発刊（はつかん）しました。

イギリスでは、歴史学者（れきしがくしゃ）のトインビー博士（はかせ）と主人の対談（たいだん）のため、ロンドンの博士のご自宅（じたく）に何度も邪魔（じゃま）させていただきました。

昭和四十七（しょうわ）（1972）年、四十八（1973）年の二年越し（にねんごし）の対話（たいわ）です。

赤レンガ造りのアパートの五階（ごかい）へ、旧式（きゅうしき）のエレベーターで上がりますと、博士とベロニカ夫人（ふじん）が両手（りょうて）を広げて待（まち）っていてくだ

さいました。小躍（こおど）りするように喜（よろこ）ばれ、抱（だ）きかかえて歓迎（かんげい）してくださったのです。

対談（たいだん）を始める前（まえ）に、ご夫妻（ふさい）で、清楚（せいそ）な家の中（うち）を、隅（すみ）から隅（すみ）まで案内（あんない）してくださったご厚情（こうじょう）にも恐縮（きょうしゆく）しました。

トインビー博士ご夫妻も、実（じつ）に仲睦（なかむつ）まじくなごやかで、そして共通（きょうつう）の目的（もくてき）に向（む）かって、一体（いつたい）になっておられました。



——日本では、いかがでしょうか。

そうですね。佐藤栄作総理（さとうえいさくそうり）と寛子夫人（ひろこふじん）と



昭和47年5月、ロンドンのトインビー博士宅にて

は、主人しゅじんも私も、忘れ得ぬ出会いを重かさねました。

主人は、昭和しょうわ四十一（1966）年の年頭の一夜、総理そうりから鎌倉・長谷の別邸にお招きまねいただき、長時間懇談こんだんをしております。

ご夫妻ふさいは、ノーベル平和賞を受賞された直後にも、賞を見せたいと連絡れんらくをいただき、わざわざ信濃町まで、お越こしくださったのです（昭和五十（1975）年の二月）。

その後、総理がお亡なくなりになられたあとも、ある雑誌ざっしの企画きかくで、寛子夫人ひろこ ふじんと私とで対談たいだんさせていただく機会きかいがございました。

た。昭和五十六（1981）年の暮くれだったと記憶きおくしております。



——寛子夫人の『宰相夫人秘録』という本の冒頭ぼうとうには「初めて明はじかす佐藤総理刺殺未遂事件さつみすいじけんの全貌ぜんぼう」と題だいする一章いっしょうもありました。総理公邸そうりこうていに刺客しかくが入り込んだ事件じけんなどが書かれていますね。

そうした総理夫人のお気持ちきもちは、痛いほど胸むねに迫せまりました。

沖縄返還おきなわへんかんを実現じっけんされるために、総理がど





昭和50年4月、静岡・富士宮にて。母・いちさん（79歳）を背負う池田氏



昭和63年10月、新宿・信濃町の自宅にて。  
母・静子さん、84歳（撮影・池田大作）



れほど辛<sup>しん</sup>勞<sup>ろう</sup>を重<sup>かさ</sup>ねておられたか。

その総<sup>そう</sup>理<sup>り</sup>を五十年にわたって支<sup>さ</sup>えてこられたご心<sup>しん</sup>境<sup>きやう</sup>を、私に母のように語<sup>かた</sup>ってくだ  
さいました。

寛<sup>ひろ</sup>子<sup>こ</sup>夫人<sup>ふじん</sup>は、たいへんな楽<sup>らく</sup>天<sup>てん</sup>家<sup>か</sup>でいらつ  
しゃいました。おおらかでいらして、対<sup>たい</sup>談<sup>だん</sup>  
はとても楽しいものでした。

『風<sup>かぜ</sup>と共<sup>とも</sup>に去<sup>さ</sup>りぬ』のスカーレ<sup>レット</sup>・オハ  
ラの生<sup>な</sup>き方<sup>ほう</sup>を通<sup>とお</sup>して、「明<sup>あした</sup>日<sup>にち</sup>になればまた  
日<sup>の</sup>が昇<sup>あ</sup>る」と朗<sup>ほが</sup>らかに語<sup>かた</sup>っておられたこと  
も、心<sup>こころ</sup>に深<sup>ふか</sup>く刻<sup>きざ</sup>まれております。

このとき、寛<sup>ひろ</sup>子<sup>こ</sup>夫人<sup>ふじん</sup>は七十三歳でした。

私は対<sup>たい</sup>談<sup>だん</sup>を終<sup>お</sup>えたあと、同<sup>どう</sup>席<sup>せき</sup>された方<sup>かた</sup>

に、「奥<sup>おく</sup>様<sup>さま</sup>の年<sup>ねん</sup>齢<sup>れい</sup>まで、あと二十五年ある  
んですけれど、あのようにいつまでも活<sup>かつ</sup>躍<sup>やく</sup>  
できるかしら……」と話<sup>おほ</sup>したことを覚<sup>おぼ</sup>えて  
います。

いま、その年<sup>ねん</sup>代<sup>だい</sup>になり、私も若<sup>わか</sup>い方<sup>かた</sup>たち  
への一<sup>いっ</sup>層<sup>そう</sup>の励<sup>はげ</sup>ましをと思<sup>おも</sup>っております。



第5章  
微笑み賞





## 妻の一途さがつくり出す 家族の絆

この章の見出しは、「妻に感謝状をあげるとしたら、『微笑み賞』でしようか」と語った池田氏の言葉から名づけました。平成三（1991）年、「主婦の友」新年号のご夫婦への特別インタビューでの発言です。

この「妻の笑顔」は、池田家にとって特別な意味があるものなのです。

香峯子夫人は、結婚式の時、師匠の戸田氏から「家計簿をつけること」のほかに、「朝晩、出勤するときと帰宅するときには、笑顔で送り迎えしなさい。どんなに不愉快なことがあると」という厳命を仰せついていたのです。

そして、池田家では、結婚以来、家計簿と「妻の笑顔」の約束は忠実に守られてきました。ですから、夫は、どんなときも安心して「妻の笑顔」に送られ、そして迎えられるてきたはずです。

読者の皆さんは、師匠にこう指導されても、笑顔を続けられるでしょうか。三日ぐらいはできるかもしれませんが、また、見送





平成元年5月、イギリス・ロンドンにて



りだけならできるといふ方もいるかもしれ  
ません。しかし、毎日です。出勤と帰宅時  
の夫への笑顔。これはむずかしいのではな  
いでしょうか。

ご夫妻には、「微笑み賞」の重みがズシ  
リと感じられる歳月がありました。

「小さいころから、子どもたちは『パパが  
帰ってきたら、もうママに甘えてはいけな  
い』と思っていたようです」と夫人。その  
言葉からは、夫にまっすぐな妻の姿が見え  
るようです。

この章は、ご夫妻そろってのインタビュー  
―「主婦の友」1990年新年号、「主婦の友」19  
91年新年号より―も交えて構成しました。息

のぴったり合ったご夫妻の言葉から、お二  
人が築いてきた家族の絆の深さを読みとる  
ことができるでしょう。

「仏法では『男は矢、女が弓』と説かれま  
す。主人も、それをよく引きまします」と語る  
夫人。現代では、「男が弓、女が矢」だつ  
たり、「どちらも矢」のカップルも多いか  
もしれません。しかし、どの夫婦も「幸せ  
になりたい」という思いは一緒ではないで  
しょうか。

名誉会長夫人となつたいまも、「私は平  
凡な一主婦ですから、表舞台に立つのは苦  
手なのです」と控えめな香峯子夫人。初め  
て半生を率直に語ったこの本には、夫婦が



幸せになるための英知えいちが、惜おしげなく盛もり込まれていきます。

現在の立場げんざいは、もちろん違ちがいます。しかし、結婚けっこんのスタートラインは、ほとんど皆みなさんと一緒なのではないでしょうか。「秀山しゅうざん荘」というアパートは、四畳半よじようはんの和室わしつと六畳ほどの小さな洋間ようまの二間で、台所だいどころも半畳せんたくばくらいの小さなものでした。洗濯場せんたくばとトイレは共同きようどうです。洗濯機せんたくきなどありませんし、お風呂ふろは、もちろん、ついていませんでした。

「私にできることは、まず祈いのることです。主人しゅじんの無事ぶじと、仕事しごとが大成功だいせいこうで展開てんかいしていくように、ということ。このことは、

生涯しょうがい、変かわらないと思います」

どこかが違ちがうとしたら、夫人ふじんのこの一途いちずさと志こころざしの高さなのではないでしょうか。そのことは、きっと夫・池田氏いけだしがいちばん感じているはず。です。

もう一度いちど、池田家の四つの家訓かくんを復唱ふくしょうしてみたくなりました。





——奥様おくさまが「主人しゅじんに育てられたそだ」とおっしゃるとき、具体的ぐたいてきには、どんなことを教えられたのでしょうか。

主人は青年たちに「男性だんせいは訓練くんれんするものだ」、それから「女性にょせいは育てるもの」とよく言います。そういう意味いみでは、私は主人に育てられてきたと思います。

信仰しんこうの面めんでも、自分がこの世よに生まれてきた使命しめいといえますか、そういうことも全部ぜんぶ、主人に教おそわり、教おしえられて、いままできたという感じかんじなのです。

「私わたくし」ごとではなく、「公おおやけ」のことでやら

なければならぬことが遅おくれたり、失礼しつれいをすると叱しかられました。

本当に身みにつまされることがありまし  
た。

ある方かたのところに「写真しゃしんを送おくってあげなさい」と、主人に言われたことがありまし  
た。その方の弟おもさんが重い病びょうき気で、主人が  
お見舞みまいに伺うかがって一緒いっしょに写真しやしんを撮とり、その  
写真しやしんができ上がってきたので、「送おくってあ  
げなさい」と言われたのです。

それを、私が、四、五日たってから送おくつ  
たのです。何か手紙てがみを書き添そえて送らなけ  
ればなりませんでしたから。すると、写真しやしん  
が届とどく二、三時間前に、弟おもさんが亡なくなら



平成7年11月、香港にて（撮影・池田大作）



れていたそうなのです。

それはそれは、厳しく叱られました。弁解の余地がないのです。私も本当に申しわけなく思いましたし、言われたときにすぐやっていたら、と後悔もしました。初めてといったいいくらい、ショックな出来事でしたし、また教訓にもなりました。

主人は、叱るのにも、やたらに叱る、ということはございません。ちゃんとした理由があるわけです。

その際に「もっと早くやればよかった」などと愚痴を言くと、「いまさら言っても、どうしようもないではないか」と、ひどく嫌いました。

主人は根っからの教育者です。何があっても、その人が明るく前へ進んでいけるように励ましています。これは、私や子どもたちにも変わりませんね。

子どもの成長と幸福にとって、賢明な母こそ太陽です。奥さんが賢明なことは、一家の幸福です。

仮に家庭に不和があっても、それを消してくれるのは、妻そして母の笑顔です。これにまさるものはありません。言葉以上の力ですね。妻の笑顔がなくては、安穩のオアシスは考えられません。（池田大作氏）



——奥様<sup>おくさま</sup>だけが知<sup>し</sup>っている、素顔<sup>すがお</sup>の名誉<sup>めいよ</sup>  
会長<sup>かいちょう</sup>は、どんな方<sup>かた</sup>なのでしよう。

素顔<sup>おつと</sup>の夫<sup>おつと</sup>は、誠実<sup>せいじつ</sup>という言葉<sup>ことば</sup>がぴったり  
の人<sup>ひと</sup>です。約束<sup>やくそく</sup>は必ず守<sup>まも</sup>ります。人をなん  
とか安心<sup>あんしん</sup>させ、喜<sup>よろこ</sup>ばせ、楽しませていくこ  
とに、いつも心<sup>こころ</sup>を砕<sup>くだ</sup>いています。

そうですね、結論<sup>けつろん</sup>的には、素顔<sup>おおやけ</sup>も公<sup>こう</sup>の顔  
とまったく同じ<sup>おな</sup>じといつてよいと思います。

(笑)

ただ、そばで見<sup>み</sup>ていて、これでは疲<sup>つか</sup>れき  
つてしま<sup>し</sup>まうと心配<sup>しんぱい</sup>すること、しばしばで  
す。

ともかく「行動<sup>こうどう</sup>の人」「仕事<sup>しごと</sup>の人」です  
から、頭<sup>あたま</sup>も八方<sup>はつぱう</sup>、十方<sup>じゅうぱう</sup>に気<sup>き</sup>をつかいますし、  
寝<sup>ね</sup>ているときしか頭<sup>あたま</sup>が休<sup>やす</sup>まらないので、な  
んとか寝<sup>ね</sup>てもら<sup>もら</sup>うしかありません。

目<sup>め</sup>が覚<sup>さ</sup>めたとたん、頭<sup>あたま</sup>が働<sup>はたら</sup>いて、あつ  
ちこつちと気<sup>き</sup>をつかいます。

いまでも若<sup>わか</sup>いときと同じように、毎日<sup>まいにち</sup>、  
机<sup>つくえ</sup>に向<sup>む</sup>かい、本<sup>ほん</sup>を読<sup>よ</sup>んだり、原稿<sup>げんこう</sup>を執筆<sup>しつぴつ</sup>  
したり、詩<sup>し</sup>を作<sup>つく</sup>ったりしています。

仕事をやめようとし<sup>し</sup>ないので、その勢<sup>いきお</sup>い  
を少しでも抑<sup>おさ</sup>えられるのは、私<sup>わたし</sup>だけなので  
す。

主人<sup>しゅじん</sup>は「仕事をしなくて怒<sup>おこ</sup>られるのはわ  
かるけれども、仕事をしすぎて怒<sup>おこ</sup>られては

やりきれない」と言っていますが。（笑）

また、多くの人と接する主人は、細かいところまで、よく気がつきます。

いたわったり心配したり、本当にその人のことを思つて話していることがよくわかります。

陰で苦勞している方々にも、サーチライトのように光を当ててねぎらいます。

私などは、これだけ長い間そばにいて、ずいぶんいろいろなことを覚えてもよさそうなものですけれど、主人に言われて初めて、ああ、そうだったということが多いのです。

ですから、よく言うのですが、主人がうさぎで、私は亀。（笑）

いいえ、鶴亀コンビで、ますます健康で長生きしてもらいたいと願っています。

自分のことだけではなく、みんなが幸福で仲よく生きていけるように、希望を与えていく。人類をどうしていくか、未来をどうしていくか、それを考え、尽くしていく。

——財産も何もいらぬ。ただ多くの人に希望を与えていく人生でありたい。これが私の心境です。妻も同じでしょう。



昭和49年3月、アメリカ・サンフランシスコにて





——名誉会長は、いつも奥様に支えられてきたとおっしゃいます。

私は、強くも賢くもありませんが、主人から、いつも教えられている信心の力と福運を確信して、一緒に祈ってきました。祈り抜き、祈り切っていく中で、必ず道が開けていきます。

私にできることは、まず祈ることです。主人の無事と、仕事が大成功で展開していくように、ということです。このことは、生涯、変わらないと思います。

私は平凡な一主婦ですから、表舞台に立つのは苦手なのです。（笑）

主人が表に出て、私は主人が気持ちよく休める家庭をつくること、健康を保つことに力を注いで、陰でお役に立ちたいと思ってきました。

それが、主人の舞台が大きく世界に広がり、海外にも同行するようになって、陰にいることを周りが許してくれなくなったのです。

でも、私はやはり陰で役に立つほうがいいんです。（笑）

主人も、昔ほど若くはありませんから、これから、ますます元気で、皆さまのため

に働き続けられるように、守り役がいよいよ大切になっていいると思つています。

妻は、私が寝たあとも、会員の方々からのお手紙や報告に目を通してくれておりました。

深夜、人知れず、ひとり深々と、私の体調を案じて、祈つてくれる妻でした。厳しい難のときも、正義の絶対の勝利を確信して、断固と祈り抜いてくれた妻でした。

私の勝利は、妻の勝利です。

(池田大作氏)

日本でも、海外でも、けなげに頑張つておられる婦人部、女子部の方々との懇談の機会を、私は心がけてきました。

強い信心を持つていても、病気や経済的な問題、また周囲の無理解などに阻まれて、つい心がしぼんで、いろいろ悩むこともあります。

そんなときに、皆さんの悩みを聞いてさしあげるのが私の役目と思つてきました。婦人部の皆さんは、ほんとにお忙しいですもの。家事や育児、仕事に加えて、学会活動ですから。三役、四役も当たり前のようにです。

その切りかえが大変です。これは、私もよく経験しています。

いろいろなお話を伺って、皆さんが一生懸命にやってくださっていることがよくわかるのです。ほんとうに頭が下がります。

\* \* \*

昭和六十三（1988）年の五月三日、

「創価学会母の日」が制定されました。その  
おり、関西婦人部の有志から香峯子夫人に贈  
られた感謝の詩の一節を紹介しましょう。

いかなる嵐の渦中にあつても

微笑みは絶えることなく

ある時は心やさしきナース

ある時は真心あふるる栄養士

ご子息たちには

賢母の指標

示すは 是るかなる平和と幸福の道

暖かな澄んだ声

聡明な凜とした振る舞いは

無言の励まし 希望の船出

感謝の念 胸奥より湧き出ず



平成元年10月、新宿・信濃町にて  
(撮影・池田大作)





——皆みなさんのかねてからの強い要請ようせいで、  
創価そうか学会がつかいの名誉婦人部長めいよふじんぶちよう、また創価学会  
インタナショナルの名誉女性部長じよせいぶちようになら  
れましたね。

アルゼンチンの名門フローレス大学を  
はじめ、世界の六つの大学から、名誉教  
授じゆ、名誉博士はかせなどの称号しょうごう、さらに、百以  
上の都市じようとしからも、名誉市民しみんの栄誉えいよが贈ら  
れています。

これは日本の女性にとって、大きな誇ほこ  
りですね。

いえいえ、とんでもありません。私は、

ただ主人しゆじんについてきただけですから。よく  
「刺さし身みのつまと同じ妻つま」と笑い合っ  
てい  
るんです。(笑)

名誉市民なども、各国かっこくで、よき国民こくみん、よ  
き市民として貢献こうけんされている婦人部ふじんぶ、女子  
部の皆さま方がたのおかげです。

その代表だいひようとして、これからの若い方々へ  
の励はげましともなればと、謹つしんでお受けさせ  
ていただいております。

私の受賞じゆしょうのときには、主人は両手りやうての人さ  
し指ゆびと人さし指で小さく拍手はくしゆして、祝いわつて  
くれるんですよ。(笑)

家庭かていという字は「家いえ」と「庭にわ」からでき

ています。「家」が衣食住などの物質面ぶつしつめん。

「庭」は精神的な広がりです。その両方りやうほうが

あつて、家庭ができると。

本物の庭ほんものは地価ちかが高すぎて、なかなか持も

てない。(笑)

けれども、わが家やという「心の庭こころのにわ」に、

いっぱい花が咲さき、季節きせつごとの鳥や虫が鳴

いていれば、その家庭は幸せしあわでしょう。

そして、美しい庭うつくの土壌どじようが愛情あいじようという大

地です。

もちろん、極端きょくたんな貧困ひんこんは不幸ふこうです。しか

し、結局けつぎ、幸不幸こうふこうはお金があるかないかに

は関係かんけいないものです。

何が幸福こうふくで、何が不幸か。幸福はデパー

トには売っていません。(笑) 心一つで、

だれもが、すてきな「幸せの庭」を持てる

のです。(池田大作氏)

家庭にあつても、日ごろの心づかいや身み

だしなみは大切です。

お化粧けしようも、そうした気持ちきもちの延長線えんちようせん上に

あるように思います。

たとえ外出しないで、家で過すごすとき

も、やはり朝一番に、お化粧をし、身だし

なみを整ととのえる習慣しゅうかんというのは、大事だいじにして

いきたいものです。

ぶってん  
仏典にも「女性<sup>じよせい</sup>にとって鏡<sup>かがみ</sup>はかけがえのないものである」と説<sup>と</sup>かれています。

どんな場合<sup>みずか</sup>にも、母親<sup>みづか</sup>自らが、ときには草花に語りかけるような、ときにはいい音楽に耳を傾<sup>かたむ</sup>けるような、ときには美しい絵を見て「ああ、いいな」と思えるような、つまり心<sup>こころ</sup>のゆとりを失<sup>うしな</sup>ってはいけないと思います。

いま、いちばん気に入<sup>い</sup>っていらつしやる歌は、何かありますか。

さいきん  
最近、ある方<sup>かた</sup>から、お手紙をいただき、  
「野に咲<sup>さ</sup>く花のように」という歌を教<sup>おし</sup>えて  
いただきました。

♪  
野に咲く花のように  
風に吹<sup>ふ</sup>かれて  
野に咲く花のように  
人をさわやかにして

(詞・杉山政美 曲・小林亜星)

はじ  
と始まる歌です。

そのお手紙には、「この歌を 奥<sup>おく</sup>様の歌<sup>うた</sup>」  
と勝<sup>か</sup>手に意<sup>い</sup>義<sup>ぎ</sup>づけて、(笑) いつも口<sup>くち</sup>ずさ



昭和63年1月、二男・城久さんの家族と



みながら、人生の山坂やまさかのつらいことや悲しかないことを乗り越こえて、生き抜ぬいてきました」と綴つづられていました。もったいないことです。それがきっかけで、私も聞くようになりました。

そういえば、主人しゅじんの「自然しぜんとの対話たいわ」の写真しゃしんでも、皆みなが見過みすごしてしまうような「野さに咲く花」にレンズを向けたものが、よくあります。

——ご主人から誕生日たんじょうびのプレゼントをいただいたことはありませんか。

夫婦めおとして

また夫婦して

築きずきたる

三世さんぜの幸さちの

この道みちたしかと

二月二十七日

この歌は、たまたま日記に書いてありましたので……。私の誕生日に、主人から贈おく

られた歌です。

私の誕生日には、子どもたちが誕生祝<sup>いわ</sup>いをくれたりしまして、主人も思い出すようです。（笑） たまたま、そういうときに時間があつたりすると、和歌<sup>わか</sup>や句<sup>く</sup>を書いて贈ってくれます。

私は、主人の和歌を筆記<sup>ひっき</sup>するだけ。主人には、記録係<sup>きろくがかり</sup>と言われています。（笑） 記

録係をやっていたら、相当<sup>そうとう</sup>うまくなるのではと思うのでしょうか、たまに下の句<sup>しもく</sup>を作りますいと言われるのですけど、とんでもないのを作ったりして笑<sup>わら</sup>われます。（笑） 主人のそばにいても、絶対<sup>ぜったい</sup>、上手<sup>じょうず</sup>にならな

いことを、私は自覚<sup>じかく</sup>しているんです。（笑）

私の本ができたときに、歌を書いてあげることが多々あります。誕生日は、たまに忘<sup>わす</sup>れてしまうんですよ。（笑）

女性<sup>じよせい</sup>には、誕生日を言<sup>い</sup>っていい年齢<sup>ねんれい</sup>と、もう言<sup>い</sup>ってはいけない年齢があるようですし。（笑）

妻<sup>つま</sup>の写真を撮<sup>と</sup>ったことはあります。詩は作ろうと思<sup>おも</sup>ったけれども、顔を見合わせれば、笑<sup>わら</sup>ったり、叱<sup>しか</sup>られたり、身近<sup>みぢか</sup>すぎて、詩にならない。（笑）

（池田大作氏）



——好きな言葉の中から、読者の方の  
励みになるような言葉をお教えくださ  
い。

私のいちばん好きな言葉は、主人から贈  
られた言葉で、「愚痴は福運を消し、感謝  
の唱題は万代の幸を築く」です。

すべてをいいほうにとつていこうとする  
言葉です。その姿勢は、私の習慣になった  
気がします。



——ほかにはどうでしょうか。

そうですね。

今日も負けるな

今日も勇みて

誓いの道を

という言葉も贈ってくれました。

私も、波乱の人生にお供して、ずいぶん  
鍛えられましたから、いつの間にか、何が  
あっても驚かなくなってしまうたんです。

(笑)

愚痴は福運を消し

感謝の唱題は

万代の幸を築く

池田香峯子

昭和57年11月、東京・文京の友に贈る

偉い奥様に  
強いお母様に  
力ある婦人部のリーダーになられますことを  
期待しております。

結婚間近の女子部幹部に贈った言葉（昭和61年2月）





——奥様おくさまが若い女性わかじよせいに贈おくりたい言葉ことばは、  
どうでしょうか。

ヤングミセスの方々かたがたに、私はよく、

優しい奥様やさに

強いお母様つよ かあさまに

そして

力ある婦人部ちから ふじんぶのリーダーに

と書いて贈らせていただきました。



——いまの趣味しゅみといいますが、生きがい  
をお聞かせください。

いまは、人に希望きぼうを持たせてあげるこ  
と、友人を心こころから励はげますことが、私たちの  
人生の生きがいになっています。

一般的な趣味いっぱんてきは通とおり越こしまして、（笑）  
私個人こじんにとっての喜びよろこはそれでよいのでは  
と思っています。



昭和48年11月、新宿・信濃町の自宅にて。  
新春用の写真撮影

妻は私にとって、人生の伴侶であり、ときには看護師であり、秘書であり、母のようでもあり、娘か妹でもあり、何より第一の戦友です。

妻に感謝状をあげるとしたら、「微笑み賞」でしょうか。あらゆる意味を、そこに込めて。

ともかく妻には健康で、いつまでも若々しくあつてほしい。

私の真実をいちばん知っているのは妻ですし、妻の誠実さとけなげさをいちばんわかっているのは、私だと思っています。

妻との結婚は、私の人生にとって、かけがえのない幸せでした。

その意味で、「また生まれてきたら、次の世も、また次の世も、永遠にどうぞよろしく」というところでしょうか。感謝状ではなく、委任状になってしまいましたか……。(笑)

(池田大作氏)





エ  
ピ  
ロ  
ー  
グ





ここに「池田大作さんご一家 おもてなしの心」と題する一編の取材記事（『婦人と暮し』昭和四十九年冬号）があります。取材・文は、児玉隆也さん。昭和五十（1975）年に三十八歳で亡くなった伝説のジャーナリストです。

——ご夫妻の姿が活写されています。その一節をご紹介します。

昭和四十八（1973）年、児玉さんが亡くなる一年半前の、初冬のある日の情景です。

「……池田氏は奥さんを何かといえぽんと肩をたたきあい——がお癖になつてい

て、『かまわない、かまわない』ポン、『いいから、いいから』ポン、『心配するなつて』ポン、『わかつているよ』ポン——とつづく」

児玉さんは、この「ポン」に、池田大作氏が気の遠くなるような多くの人々から「先生」と呼ばれる秘密をかぎとつています。

「『わかつているよ』ポンという行為は、時として照れくさく、いわゆる『知識人』『文化人』（何という嫌なことば！）という

種族<sup>しゅぞく</sup>の人間ほど、そういう仕草<sup>しぐさ</sup>に対して内<sup>うち</sup>なる羨望<sup>せんぼう</sup>と蔑視<sup>べつし</sup>を同居<sup>どうきょ</sup>させているものである」

池田氏は、人間が文化や教養<sup>きょうよう</sup>という衣装<sup>いしやう</sup>を身<sup>み</sup>ぐるみ脱ぎ捨てた、いちばん最初に<sup>さいしよ</sup>して最後<sup>さいご</sup>に残<sup>のこ</sup>る人間味<sup>にんげんみ</sup>を核<sup>かく</sup>のように身につけていて、その上にA・トインビー博士<sup>はかせ</sup>との対話<sup>たいわ</sup>をはじめとする、何重<sup>なんじゆう</sup>もの衣装<sup>いしやう</sup>をまとっている人だった、というのです。

「池田氏の『ポン』の真打<sup>しんうち</sup>はけっさくであった。池田氏が羽織<sup>はおり</sup>の紐<sup>ひも</sup>を結<sup>ゆ</sup>わえながら襖<sup>ふすま</sup>をあけて入ってきたとき、あるいは夫人<sup>ふじん</sup>が

『しばらくでございます』と入ってきたとき、香<sup>かう</sup>の香<sup>か</sup>がした。

お茶のシーンが終わり『脚<sup>あし</sup>がしびれちゃった。きようはまたこれから勤行<sup>ごんぎやう</sup>があるから』と立ちあがった池田氏に、『部屋<sup>へや</sup>にお香<sup>かう</sup>をたいていらつしやるのですか』と聞くと、氏は不審<sup>ふしん</sup>そうに『いいえ』と答える。

では、匂<sup>にお</sup>い袋<sup>ぶくろ</sup>ですか？

『いいえ、そんな伊達男<sup>だておとこ</sup>じゃない』。じゃあ奥さまの香水<sup>かうすい</sup>ですか？

『おい、おまえ香水<sup>かうすい</sup>をつけているかい？』

『いいえ』

じゃあ何だろう。

『そうだ。お線香<sup>せんかう</sup>だ。部屋<sup>へや</sup>にしみついてい



昭和63年 9 月、静岡・富士宮にて（撮影・池田大作）

児玉こだまさんは「夫人ふじんは実じつにみごとな答こたえで  
応おうじたものだった」と、そのときの様よう子を  
伝つたえています。

ご夫妻ふさいに共通きょうつうするものは、周まわりの人ひとたち  
の思おも惑わくなどを軽かる々と超こえてしまうほどの  
「率直そつちよくさ」なのかもしれません。

取材しゆざいが終おわりに近いづいたころ、池田いけだ氏しに  
「いじわるな質しつもん問は終おわりですか？」と、  
笑わらいながら聞きかれた児玉こだまさんは、「こうい  
う質しつもん問はほとほと面倒めんどうでしょうね」と問とい  
返かえしています。

そのときの答こたえがすごい。

「ええ、そうです。面倒めんどうです」

「普通ふつうなら、腹はらの中でそう思おもっていても  
『いえいえ、あなたもお仕し事ごとですから』と  
答こたえるものである。

それを『面倒めんどうです』と答こたえてはばからず、  
相あ手にまた残滓ざんしを残のこさぬところ、こうさら  
け出でされるとさわやかというものだ」

そして、この日のテ－マである「もてな  
し」について、児玉こだまさんだけが深ふかく心こころに感かん  
じただろうと思おもわれるこんなエピソードを  
残のこしています。



「前夜、編集部が私の近著を池田氏に届けてくださった。その夜、氏は激務が夜半までつづき、翌日は昼に新聞原稿の締め切りである。

にもかかわらず、氏と夫人は、訪問者である私の著書を読んでおられた。それも、ただ『読む』という肉体作業ではなく、行間を読まなければ語ることができない読後感を話された」

児玉さんが「畏怖すべき温情に満ちた『もてなし』と呼んだものは、物でもごちそうでもなかったのです。

そして、さらにすごいことは、この「お

そるべき努力と思いやりの必要なもてなし」を、ご夫妻は、結婚後、日常のこととしてずっと続けてこられたことです。

「訪問客へのお心配り、これも大変なものです。奥様が在宅でないときは、私が代理人で出させていただきます。先生は常に『親切に、丁寧に、感じよく』とおっしゃいますが、奥様にはとてもかありません」と義妹の女性が証言しています。

ご結婚は、昭和二十七年（1952）年五月三日。式は東京・中野の歓喜寮で、仏前結婚式でした。

この五月三日という日は、池田家にとつ

て特別な意味が込められています。恩師・

戸田城聖氏は、一年前のこの日に創価学会

の第二代会長に就任しています。戸田氏

は、まな弟子の池田氏のために、五月三日

をお二人の出発の日に選んだのです。

また、この日は、立宗七百年祭の直後で

もありました。そして、八年後の昭和三十

五（1960）年五月三日に、池田氏ご自

身も第三代会長に就任しています。

池田氏は、昭和四十九（1974）年に

発刊になり、大ベストセラーになった『婦

人抄』（主婦の友社）に、ご自身の結婚式

についてこう書いています。

「——やがて結婚しました。昭和二十七年

五月三日のことです。結婚式も披露宴もい

たしましたが、決して背伸びするようなこ

とはしませんでした。極めて簡素なもので

したが、恩師や親しい知友の祝福は、まこ

とに心温まるものでした」

そして、別のエッセーでは次のような決

意を述べています。

「私たち二人は、そのとき、社会のために

尽くそう、人のために働こう、と私たちの

目的を互いに理解しあい、それを互いに約

束した。それは、いまも変わっていないし、

将来も変わらないであろう。だからといっ



平成2年9月、東京・世田谷にて。  
中国代表団歓迎会でのひとコマ

て、社会のために自分を犠牲にすることでもなく、自分の幸福のために社会を無視することでもない。このことの実践のうちに、私たちは幸福を望んだのである。

私たちの場合、結婚の成否は、新しい家庭を土壌として、どれだけ社会にあつて働けるかにかかつていた。結婚式の盛大か、否かには、まったく関係なかったのである」

（『家庭革命』〈講談社〉より）

香峯子夫人との結婚は、池田氏に「生涯の宝となった私の結婚」（『婦人抄』）といわしめるものでした。

「妻がいちばん気にかけたのは食事のこと

でした。病弱の私を、なんとかして健康体にするのが、彼女の第一の仕事となりました。私は妻と同時に、こよなき看護婦と栄養士とをえたわけです。私の当時から、激しい活動が、今日までどうやら続き得たのは、彼女のこの時の発意と努力のお陰とおもっております」（『婦人抄』より）

そして、ご夫妻は「冬は必ず春となる」という一節を胸に、目黒区三田の借家で結婚生活をスタートさせました。

香峯子夫人にとって、家庭は、会合の場であり、絶え間なく来客がある「職場」でもありました。



さらに夫人のパワーを証明する話があります。創価学会婦人部の最高幹部が夫人から直接伺ったという話です。

「前に奥様がこう言われました。先生といっしょに『一緒になれたのは過去の福運によるのでしようね』と。また『それがあつて今日がある』と感謝しています。だけどそれは過去の福運によるものなのです』と、こう割り切られましたね。『その福運というのは自分で運んで、積み続けなければなりません。崩れ始めると坂から石が転げるように落ちてしまいますもの。ですから私は私なりに、今日も福運を積みながら、未来へ前進していききたいのです』と、おっしゃった

ことがあります」

確かに、夫人は「微笑み賞」の中でこう言っています。

「私のいちばん好きな言葉は『愚痴は福運を消し、感謝の唱題は万代の幸を築く』です。すべてをいいほうにとつていこうとする言葉です。その姿勢は私の習慣になった気がします」と。

池田家の福運は、夫人がひとつひとつ的に積み上げていったものだったのです。そして、気がつくとき小さかった福運は、いつの間にか雪だるまのように大きくふくらんでいました。

マイナスをプラスに変えてしまふ発想力、そして福運を引き寄せる実行力を、香峯子夫人は、すでに子ども時代から身につけていたようです。

「母の体質は、決して強いほうではありませんでした」。そのために「姉も私もよく家事の手伝いをしていました」。そして「私の下には弟もいますし、我慢するといふか、忍耐強くなつたのは、そんな事情があつたからかもしれせん」。

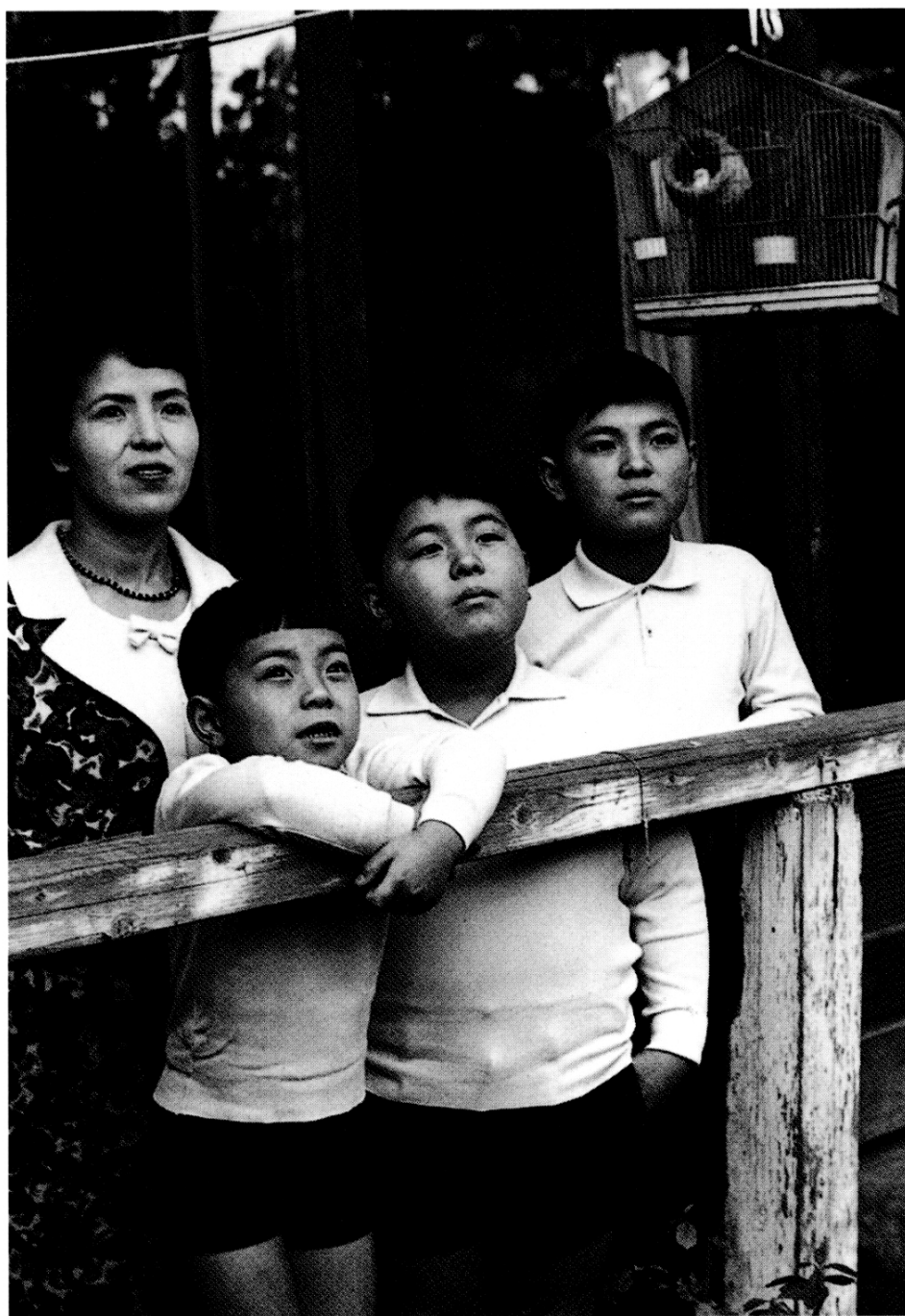
『ほんとに我慢強い子だつた』『熱を出して、ウンウンしてる時も、弱音を吐かな

かつたのよ』と奥様の母上から伺つたことがあります」とお手伝いの女性。

また「私は四人きょうだいの三番目でしたので、白木の家の中では、あまり重要視されないほうでした」。

そのことを夫人は、「でも、それがかえつて幸いして、いまではそれで助かつたと思つております」と言い、親戚づきあいを「ご無沙汰させていただけたおかげで、学会の仕事が優先できたことに感謝しているのです」。

ご夫妻には、父上が「三巨頭」という愉快なあだ名をつけた自慢のご子息が三人い



昭和39年11月、大田・小林町にて

ます。

ご長男は、昭和二十八（1953）年生

まれの博正さん（五十一歳・創価学会副会長）。戸田氏が命名し、「いい名前だろう。

文学者になってもいい名前だ」と、会心の笑みを浮かべた自信作なのです。

博正さんには、父上が好きな桜に、こんな思い出があります。

『花吹雪 父の肩にも 母の髪にも』

満開に咲き香る桜をながめつつ、私が

『花吹雪』というと、それを受けて、『父の

肩にも』と父。さらに『母の髪にも』と母が続けた。

父と母と子でつくった思い出深き、一句

である」

そして、就職を目前にしたときのことです。

「進路を悩んでいたそんなある日、夜の勤行のあと、母から一言、『学会にお世話になったのだから、学会に尽くしていきなさい』と言われた。

その一言で、自分のハラが決まった」

博正さんは、母上の言葉を胸に、関西創価学園の社会科教員として大阪に赴任することになりました。

三男の尊弘さん（四十六歳・創価学園主



事、創価学会副会長）は、天文学に夢中になり、父上と母上を大いに困らせた熱血漢だったようです。

少し長い引用になりますが、父の立場、母の立場、子どもの立場がせめぎ合う「池田家」の攻防劇を、池田氏の文章で紹介しましょう。

「自分を発見するといえは、中学一年になった三男坊は、天文観測に無我夢中である。そのきっかけになったのは、三年ほど前、ある親しくしている方から、二男にと、天体望遠鏡を贈られたのである。それと、土星の環を見た三男が、すっかり興奮

してしまった。

やがて、もつと本格的に観測できる望遠鏡が、どうしてもほしいというので、専門店へ連れていった。

三男坊が、即座に指した望遠鏡は、どうやら本格的なもので、専門的な観測にも、耐えうるものだったらしい。

どうせ、飽きて放りだすのだから、おもちゃ代わりの安いものにしなさいと、妻の反対は強硬である。三男坊のほうも、頑として聞かず、しまいには、その望遠鏡の前にすわり込んでしまふ有様である。

あいだにはさまった私は、なんとか双方を説得し、中間的なところに収めようとし

たが、調停に失敗。私自身も、土星の環を

見てかなり心を動かされていたこともあつ

て、妻を説得して、とうとう、その望遠鏡

を買ったのである。親切な店員が、そのあ

りさまを微笑を浮かべて眺めていたのを、

いまもって忘れられない」（『私の人生随想

——三人の息子と私』〈祥伝社〉より）

ついに尊弘さんの熱意に敗れた父上は、

子どもの情熱について、こんな感想を導き

出しています。

「私は、そうした何か、打ち込めるものを

持つことは、おおいに結構なことだと考え

ている。

とくに、少年時代は、好奇心が旺盛であ

る。それは、学校教育という枠からはみ出

して、際限なく伸びていくことが多い。

おとなは、しばしば、自分の既成概念か

ら、そのような芽をつみとろうとするが、

それは、かえって、子どもの性格をゆがめ

てしまう恐れがあるう」

ここで、「三巨頭」の二男坊で、創価大

学の学生思いの職員として活躍された城久

氏の急逝（享年二十九歳）にふれておかな

くてはなりません。

ここに紹介するのは、夫人の弟である白



昭和57年12月、神奈川・横浜にて。3人の子息は  
右から博正氏、城久氏、尊弘氏

木周次氏きしゅうじと美代子さんみよこご夫妻ふさいが語る哀悼あいとうの日の姿すがたです。昭和五十九しやうわ（1984）年十月三日のことです。

母・香峯子夫人かねこふじんのその日です。

「大阪おおさかから急きゆうきよ戻もどられる奥様おくさまを出迎でむかえに、私たちは城久さんしろひさの入院先にゅういんさきの病院びやういんから、東京駅とうきやうえきに行きました。私たちはもうがつくりしていました。

でも、奥様はかえって私たちを励はげまされ  
て……。駅では簡単かんたんに話を交かわしました。

ご心境しんきやうはいかばかりだったでしょう。奥様は、そういうときでも、『わーっ』というののがなくてですね。

列車れっしやから、すうつと降おりてこられ、『ま

あ、ずいぶん、かわいそうなこと』と驚おどろかれますので、『はあ……』と思い、どうしてかな、と思いました。

そのときは気づかなかったのですが、あ  
の日は十月三日でしたけれども、すごく暑あつ  
かったんです。病院でも、城久さんがそう  
言っていたくらいでしたから、私たちは半はん  
袖そでを着きておりました。しかし夜はグツと冷ひ  
えました。主人しゅじんはシャツ姿すがたで……。こんな  
ときでも奥様は私たちのことを気づかわれ  
たんです」  
(白木美代子さんの話しらきみよこのはなし)

「お孫まごさんのことは、城久さんがいないか  
ら、自分たちがしつかり見ていく、見つめ



ていく、というものが、ものすごく強いです。常に二人のお孫さんのことを思つて、そのぶん長生きして、見守つてゆく、という感じが伝わってきます。

お嫁さんのことも、まったく肉親同然の母娘のようです。『私、実は、娘も欲しかったの』と言つて、ですね。

あらためて姉の人生を振り返つてみると、睡眠時間が少なくなった点だけが結婚前と変わつていて、あとの根本的なところは、僕が物心のついたころから見えておりますが、違つてないですね。途中で向きを変えたことは、何もないと思います」

(白木周次氏の話)

そして、父・池田氏のその日です。

「当日、池田先生は奥様だけを東京に送り、関西の地に最後まで残り、帰りぎわまで、青年たちの成長に期待し、励ましてくださいました。翌朝、空港をたつとき、見送りの数人に言われたのです。『関西の未来は頼んだよ』と」。これは、機が飛び去つたあと、男子の涙、滂沱だったという青年が、東京の友人に伝えた話です。

二人のお孫さんは、お父さんの母校である創価大学に学び、卒業されました。そしていま、お父さんの心を継いで教育の道に

すす 進んでいます。

いけだし 池田氏は『私の履歴書』の中で次のよう  
つま に妻を語っています。

「ある婦人雑誌の正月号（四十九年）に  
『わが子に托して』と題して一文を寄せた。  
かれら 『彼等もやがて恋人ができ、結婚するであ  
ろう、そのときに私はただひと言いいた  
い。へパパのことはいい。ママだけは大切  
にしてあげてくださいよ』と。それは五月  
三日を、わが家の葬式と感じ、以来、いつ  
えがお も笑顔を絶やさないうで尽くしてきてくれた  
妻への償いの心である』」

わたくし （『私の履歴書』より）

では、最愛の夫に、こんなすてきな言葉  
をおく を贈られた妻は、どんな気持ちで夫を見て  
いたのでしょうか。

「奥様は『主人と私の関係は、主人が太陽  
で、私は太陽の光で輝く月だと思っています。  
太陽がなくなると、輝かないのじゃないで  
しょうか……』と、あくまで謙虚におつし  
やっています。」

もう一つ『勝たなくてもいいから、負け  
ないこと。どんな事態にあつても負けない  
一生を』と、よくおっしゃいますね」

ふじんぶかんぶ （婦人部幹部の話）



平成元年 8 月、長野にて

「負け<sup>ま</sup>ない一生」

夫人<sup>ふじん</sup>の实感<sup>じつかん</sup>が込め<sup>こ</sup>られたこの言葉<sup>ことば</sup>から、  
夫<sup>おつと</sup>とともに歩<sup>あゆ</sup>む人生<sup>じんせい</sup>を守る<sup>まも</sup>る、そして一歩も  
引かないという、「妻<sup>つま</sup>の決意<sup>けつい</sup>」がほの見え  
ます。

そして、この「妻の決意」は、池田氏の  
妻を思いやるたくさんの歌の中にしつかり  
と結実<sup>けつじつ</sup>しています。

いついつも

夫婦<sup>ふたり</sup>で見<sup>み</sup>つめむ

富士<sup>ふじ</sup>の山<sup>やま</sup>

二〇〇二年十月十二日 八王子にて

大作



本書は、池田香峯子さんへのインタビューや、これまで集めてきた資料を編集してまとめ上げたものです。

か  
ね  
こ  
しょう  
香峯子抄

平成十七年二月二十七日 第一刷発行

平成十七年三月一日 第五刷発行

編著者 主婦の友社

発行者 村松邦彦

発行所 株式会社主婦の友社

〒101-8911

東京都千代田区神田駿河台二丁目九

電話〇三―五二八〇―七五三七（編集）

〇三―五二八〇―七五五一（販売）

印刷所 大日本印刷株式会社

もし、落丁、乱丁、その他不良の品がありましたら、おとりかえいたします。お買い求めの書店が主婦の友社資料刊行課（電話〇三―五二八〇―七五九〇）にお申しいでください。

© Kaneko Ikeda 2005 Printed in Japan ISBN4-07-245960-7

国く日本複写権センター委託出版物

本書の全部または一部を無断で複写（コピー）することは、著作権法上での例外を除き、禁じられています。本書からの複写を希望される場合は、日本複写権センター（電話03-3401-2382）へご連絡ください。